
異世界トリップとタイムスリップをする主人公って・・・

妄想野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界トリップとタイムスリップをする主人公って・・・

【Nコード】

N0989R

【作者名】

妄想野郎

【あらすじ】

主人公は勇者として異世界に召還された。

だが、少年はもともとから武術に長けているがむやみに力を使わない。

そこにはトラウマがあった。（実際問題、作者の力不足によってトラウマ設定がありません）

そのトラウマを少しずつ魔王退治の仲間たちとなくしていき、魔王

を倒す。

しかしその先には仲間の裏切りと、仲間の死というとんでもない結末が待っていた。

そして、主人公は絶望に落ちることは無く、記憶をなくし、日本に戻っていた。

この話は現在↓過去↓現在↓未来という風に進みます。この進み方が嫌いな方はご退場してもらってかまいません。

：現在少しずつ最初のほうを改定していきたいと思っています。

ブログ 始まりと終わりの通過点？「改定」(前書き)

すいません、妄想野郎です。

初投稿です。学生でしかも駄文ですが、どうかおおめにみてやってください。

#改定いたしました

ブローグ 始まりと終わりの通過点？「改定」

2013年、9月23日、曇り 午後6時27分。

その日から世界は変わった。

自分の視界から見える周りの建物はほとんど崩壊を記している。

それに夕食時で、ちょうど夕飯を作ろうとしていた東京から僅かに離れた住宅街からは火が燃え盛るように猛威を振るい多量の煙幕を発生させている。

火事の臭いに混じって、人間の血生臭い異臭が立ち込めており吐き気を催す。

そして、世界にとってもっとも不釣り合いで存在するはずのない地球外生命体を目という機関で捕らえ、記憶を蓄積させる側頭葉に届いた瞬間、頭に激痛が走った。

地面にうずくまりながら2年前の空白の2ヶ月の間の記憶がフラッシュバックのように次々と失われた欠片を修復させ一つのものへと変貌する。

（全部……全部思い出した）

ただ、まだ分らない事が一つだけある。

なぜ、現代では当の昔に絶滅したはずの狼が存在し、その狼が二年前に見たものと似たような姿をしているのか。

本来、架空の世界にしか存在しないゴブリンという生き物が日本にいいのか。

自分の記憶の欠落に関係しているのだろうか。

そもそも、俺は何のために異世界に召喚されたのかを忘れていた。

今なら分かる。

それは、魔王という恐怖の対象を異世界の人々から排除する事だったはずだ。

記憶では確かに魔王は倒した。

しかし、その直後の記憶が酷く曖昧でなにかフィルターがかかったようにその記憶を思い出せてはくれない。

ただ、これだけは言える。

自分は失敗したんだ。

異世界を救うこともできず、そして日本も崩壊へと近づいていることを許している。

（俺は一体何のたれに向こう《異世界》に召喚されて魔王を倒すために努力したんだよ…）

「全部、無意味じゃねえか……」

その自分を責めるような小さな声は誰にも届くことなく、天一杯に響いた。

2

彼はすぐに気持ちを切り替えこの世界を救うことを硬く心に誓った。

俺ただ一人で何ができるって？ それは当然の疑問だと思うが、それは簡単な話。

できるさ、この両目さえあれば……この両目のことは向こうのやつらの中でエリスとリリス姫しか知らない。好都合だ…。

そして、『とりあえず目の前のやつらの掃除からだな』、と心の中でつぶやいて俺はウルフの群れのほうへ歩み寄った。

そのことに気づいたのか群れのリーダー格のモンスターが俺を襲えと遠吠えで指示を出している。

そしてリーダー格のモンスターの口から炎の塊が吐かれた。

それとほぼ同時に手下の口からも同じもの《炎の塊》が吐き出される。

数はおよそ二桁を越える程度に及ぶがまったく持って足りない。

俺は2年前と同じように右目を閉じ、左目に魔力を籠める。

「無駄だ！！」

言葉を放った瞬間、彼の左目は漆黒の瞳に染まりすべてを飲み込むような、ただ純粹な黒色をしたと同時に、朱色の文様が瞳に浮かび上がるとともにやつらの炎の塊を消し去った。

二年間のブランクがあつたが問題なくこの左目は機能した。おそらく右目も正常に作動すると思う。

その後、右目の色は茶色に戻り、相手に捕らえられないような速さで背後に回り込み手刀で首を捕らえ引き裂く。

「^{おひ}怯えても助けは来ないぞ！！」

「俺に会ったことを地獄で後悔するんだな」と、もうすでに聞こえてはいないだろうバラバラな狼に吐き捨て残りの人の体を食す殺戮動物の息の根を視界に写るすべてを止めた。

とりあえず、この東京にいるやつらは今日中に片付けなければ……。

それが終わるまで無事でいてくれよ……可憐！、暁！、…美希！。

第一話 「改定」(前書き)

三日に一度ペースでいけたらいいなと思います・・・
とりあえず、最初は飽きられないようになるべく早く投稿をしたい
きたいと思います。

#改定しました

第一話 「改定」

1

2011年、6月29日、6時00分

ピピピピピピピピピピ！！

どこまでも響き渡りそうな甲高い目覚まし音で、青年はゆっくりと瞳をひらいた。

現在進行形で鳴っている目覚まし時計を止めて、ベットから腰を上げる。

青年はまだ、眠気が残っていたので洗面台へと向かい、冷たい水で顔を軽く洗い眠気を吹っ飛ばした。

そして、寝巻きから毎朝行つ鍛錬をするための道着へと袖を通した。

いつものように、家の隣に隣接してある道場に足を運ぶ。

そこで、正拳突き20回・上段突き20回・下段突き20回・前蹴り10回・回し蹴り20回・後ろ回し蹴り20回の準備運動を実戦の感覚を交えながら行い、その後二年前に他界した祖父とのイメージトレーニングをした後、座禅を組み、精神を集中させ気を体中に巡らせる。

それらをすべてこなしたときにはすでに7時を回っていた。

もう、可憐が朝食を作り終わっているはずなので、持ってきたタオルで汗をふき取る。

家に帰り、リビングに入ると、いつもどろりに可憐が朝食を作り終えた状態で椅子に座って俺を待っていた。

「ごめん、可憐まつたか？」

「いや、全然」

少し、可憐はしかめた顔をしていたが、自分にはそんなことの理由は分からないので特に咎める事もしない。

「そつか、じゃ食べるか」

「うん、いただきます」

俺もいただきますと言い、朝食を食べ終えた俺たち二人は、一緒に食器を片付け、私立柵帆高校へと足を伸ばした。

同日7時30分

俺たち二人を待っていたかのように家の外には俺や可憐と同じ黒髪で、前髪は目の上で切りそろへ、髪を肩まで伸ばし、身長は俺よりも約10cmほど離れているが164cmと女性にははなかなかにベストな身長をしている少女がいる。

肉つきは陸上部に所属しているため引き締まっているところはし

かっ引き締まっている。

一度、あの太もに挟まれないと思うのは俺だけではないはず……とまあ俺のクラスメイトの美希だ。

こうして3人で他愛のない話をしながら登校する。

同日8時00分

いつもどおりに遅刻せず、2ノCの教室のドアを開け美希と一緒に教室に入る。

「おっす、お二人さんおはようさん」

陽気な声で俺と美希に挨拶したのは、俺の数少ない友人の一、さか榊原きはら暁である。

その挨拶に美希は他人行儀で返す。

「おはよう、今日も元気だな暁は」

「おはよう、榊原君」

そうだ、あつし暁と美希は中が良くはない。

理由はまだ、俺も知らないが多分これからも仲良くはならないと思う。

そうして、各自席に座りつまらない授業を受け終えた。

同日午後7時20分。

学校が終わった後、暁にゲーセンに誘われて断ろうとしたが、俺たち親友だろ？ 言われて満更でもないと思っただが、やっぱりせつかくの可憐の夕飯をさめた状態で食べるのは心に響くものがあるし、両親とのトラウマもあるためなるべく早く帰りたい。

そんな思いも抱きながらも、暁とゲーセンに行ってしまったのだから愚痴くらいは言う。

「まったくふざけんなよな、何でこんなに走んなきゃいけないんだよ。恨んでやる」

そう、心の中では言わず、愚痴りながら帰宅路走っていた彼の真下に突如光り輝くものが現れた。

それに気づいたが、光り輝く円陣のようなものから、まるで目標を見つけ、補足するように黒い触手のようなものが足から体全体に絡みつき、そのまま頭をも呑み込み地面へと引きずられていった。そして彼はこの世界から消失した。

しかしその穴は数分間ひらかれていた。まるで、もう一人通るための時間を待ったように。

付近には、彼が暁から借りたCDが落ちていた。

そう、この穴は彼と彼のもの以外を通すことは許されなかった。

第一話 「改定」(後書き)

なんか、うまくかけませんね・・・
描写へたくそですいません。

第二話 偶然の召喚（前書き）

また今日も投稿できました。これからよろしくお願いします。

第二話 偶然の召喚

2011年、6月29 午後7時25分

「——なのか？」

誰だ？……………。

「——召還で来たのだから勇者で間違いないはずだ……」

召還？……勇者？……。

よく分からない状況になって数分。ようやく周りの音が聞き取れるようになった。

「本当に、これが魔王を倒せるのか？」

「確かにこんな身なりじゃ無理だろうが、覚醒の泉でもものすごい能力^ちを発揮させ、手に入れるかもしれんぞ」

魔王？、しかも俺、侮辱されてるのか？……

周りから、ものすごく多数の皮肉と不安の声が寄せられている。

そして、多数の中の声の一つだけかわいらしい声で俺の身を案じてくれたものがいた。

『大丈夫ですか？』と・・・

俺は、強く打ち付けた頭をさすりながら腰を上げた。

そして、かすれ声で答えた。

「ああ、なんとかな・・・

だが、この状況説明をしてくれないか？」

むしろしてもらわないとかなり困る。

予想だが、たぶんこれがかの異世界召還だと――。

「はい、・・・あなたには私たちの国を救ってもらったために、エルフォード国へ勇者として召還しました。」

言い切った。

言い切りやがったこいつ・・・

なんだろ、・・・なんか腹の虫があられたがってる。

「ですから、まずあなたの素の力量がどれくらいなのかを見せてほしいのですが、

よろしいですか？」

俺は、即答はできなかった。

もし、この力を見せれば周りのやつらからは評価はもらえるが、それではだめだとあの日に思い知った。

だから、模擬戦もどきをやるのは別にいいが、本気・ましてや相手を倒すことは避けて倒されることを頭に留め、答えた。

「ああ、かまわない」

「えと・・・あの・・・」

俺はすぐに理解した。

何か言おうとしているのがわかるが、たぶんこういうことはいつも相手側が先きに言っていたのだろーと思ひ彼女の聞きたいことができるだけ笑顔で答えた。

「あ、悪いな。」

俺の名前は獄閻寺紅鷹^{ごくえんじ こうたけ}だ、よろしく。

俺のことは紅^{こう}とよんでくれてかまわない。

俺の周りものはみなそう呼んでいた」

そして、俺の自己紹介に礼儀として巫女姫さんが笑顔で名乗る。

「リリス・エルフォードです。

よろしく願ひします紅^{こう}」

「ああ、よろしくリリース」

こうして獄閻寺紅鷹ごくえんじ こうやうの長いようつで短い2ヶ月間が始まるのであった。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・

・

第二話 偶然の召喚（後書き）

ネタがあるのにあまり指が動かないのはなんでだろう？
本当に困りますね。

第三話（前書き）

???は一体誰なのでしょうね？

早く彼についてもっと書きたいです。

そこまで行くのにかなりかかりますが。

第三話

2011年、6月30日、午前10時5分

今、彼は国直属の騎士が使つ練習場で国3番の騎士との模擬戦をおこなつところである。

すでに、二人とも剣を構えており、審判の合図を待っている状態である。

そして審判が『始めえええ!!』と声を張り上げる。

そしてお互いに剣を前に構え開始1秒足らずで間合いを詰め剣を交える。

そしてよく見るとお互いの顔が笑っていた。

剣を交えるのを楽しむように・・・

▲ 2011年、6月29日、午後7時26分

今、俺はリリースにしばらくここに住む自分の部屋を案内されている

ところだが、先ほど言われた力を見るのを何時やるのかを気になっていたのもあるし、この沈黙から抜け出したい気持ちもあったため聞くことにした。

「リリース」

「はい、何でしょう?」

俺の呼びかけに振り返りざまに彼女の銀の髪が揺れて軽く屋内光が反射するように光っている。

思わずあまりの美しさに見惚れていたが、すぐにその気持ちを抑える。

「先ほど言っていた力を見るとは何時するんだ?」

「はい、それはですね明日の鐘が5つほど鳴るときになります」

「鐘?」

「ああ!、そうでしたね。」

あなたは私たちとは違う文化をお持ちなはずなので解りわかりませんでしたね」

とかつてに俺のいた地球のことを解釈して淡々と説明を始めた。

その説明で大体わかった。

模擬戦をやるのは地球の東京にあわせるとちょうど10時くらいだとわかった。

この国では、6時にその日の最初の鐘が鳴り、それから一時間後とに一回鳴り午後の11時が最後らしい。

そのほかにも、いろいろ説明をうけたがまあ画面の向こう側の人たちには必要ないだろうと思うのでそこは省かせてもらう。

リリースの説明が終わった後は俺がまだ夕食をとっていないことを話したのですぐに食堂に案内してもらった。

その料理長がこれまた、某アニメの赤足のゼフさんにそっくりでびっくりしたが、料理の腕は絶品で彼の作った料理を食べたとたんぼっぺが落ちるではすまないほどうまかった。

そして、食事を終え先ほど案内された自分の部屋へと戻り、いろいろあったせいか、すぐに睡魔はやってきて眠りについた。

2011年、6月30日、午前6時00分

ゴーンゴーン・・・ゴーンゴーン

昨日のリリースの説明どおり鐘の音がこの城全体に響いている。

その音を聞いて俺は、深いまどろみから抜け出しベットから身を起す。

たぶん自分の感覚では6時ぴったりだと思うが、窓から見える太陽みたいなものを見てある程度日本と時間と近くにある恒星などからして同じだろうと勝手に解釈する。

しかし、あらためて思うとほんとに異世界などと感じられる。

『日本での生活ではこんなに豪華な城に住むなんてことは絶対になかったからな』・・・とつぶやき日本でも日課だった早朝トレーニングをととも体を解^{ほく}しに行くために城内にある庭へと行きそれに周りに誰もいないか細心の注意をしてからトレーニングをする。

その後誰にも見つからないように部屋へと戻った。

しかし、このとき彼は実質二人の人に見られたいたのっであつた。

そのうちの一人はエリスだつた。

▲ 同時刻 ??? side

そうか・・・

どつりで気づかなかったわけだ・・・

獄間寺紅鷹ごくえんじ こうようはまだ魔法について無知だったな。

エリスが、気配を消す魔法で彼を見ていたので彼は気づけなかった。

これで、一つ謎が解けた。

『案外こういうのも楽しいものだな』と昔の自分を思い出しながら
これからを見通していた。

まるで、これから起こる惨劇を知っているかのように。

side out

・・・

・

第三話（後書き）

誤字脱字があつたら是非報告ください。
よろしく追い願います。

第四話（前書き）

だんだんと更新スピードが落ちてくるよおおおおお！。

第四話

2011年、6月30日、午前9時50分

昨日リリースに説明されたとおり、約束の騎士専用練習場にやってきた。

すでに、俺とその相手の試合を見るために野次馬がたくさんいる。

そしてすこし進むと審判らしき人とその近くにリリースがいたので話かける。

「おう、リリース」

「あ！？きましたか。」

では相手の騎士を紹介しますね」

と言い、すぐに去ってしまった。

数分後・・・女を連れてリリースは戻ってきた。

「紅、つれてきましたよ」

「彼女が俺の相手か・・・」

見る限り、かなりの鍛錬を行っているものだった。

しかも、美人で彼女の艶のいいスカーレットの色が美しさをさらに

引き出している。

「あなたが、勇者ですか」

彼女は然程俺を気にせず、試合場にかかる。

彼女は勇者には興味がないのかと思ったが、たぶんはずれだと思った。

自分が試合場上がったら闘志がむき出しだったから。

そして、お互い名を名乗る。

こういう挨拶も此方では日本と同じなんだと少し微笑んだ。

「エリス、エリス・エレフォード」

「こつち風に言えば紅鷹獄閻寺こうおうごくえんじかな」

そして審判が『お互い前へ』

そして俺たちは前に出る。

『構え!』

『始めえええ!!』

俺は相手より少し送れたタイミングで地面をけた。

あくまで相手に自分はあなたより弱いですよをアピールするためだ。

剣を交える。

想像したとおり一撃は重く鋭かった。

かなり洗礼されたしなやかな動きだった。

それに対して、俺は剣術などやったことがないので握りが甘くすぐ剣を手から弾き飛ばされた。

そして、彼女の剣先が俺の首筋に当たる直前で止まる。

その様子を見て審判が『そこまで!!』

内心ほっとした。

今の試合で俺に興味をなくしたものがほとんどいたからだ。

まあ、この国のやつらにとって俺はただの宣伝役だからただのもの
としか思っていないんだろうな。

まだ、俺の相手と数人の目は俺を捉えていたがいずれその目も消え
ると思いその日を終えた。

ただ、彼女だけは違かった。

しかし、その理由は彼にはわからない。

第四話（後書き）

誤字脱字の報告お願いします。

なんか、疲れちゃったよ・・・パトラッシュ

第五話

▲ 同日午後3時

先のエリスとの戦いのあと何事もなくスケジュールどおり勇者^{おれ}の能力^ちを覚醒^{から}するために今、リリス姫に城の地下にある覚醒の泉に向かっている。

この泉では勇者として召還されたものを限界まで潜在能力を覚醒させることができる。

しかし、必ずとも成功するわけではない。

過去300年前に一度失敗した例があった。『ていうか、俺以外にもいたんだ・・・勇者』

そのものは、能力こそ覚醒しなかったものの、護衛の騎士達のおかげで無事魔王を倒せた。

仮にもし俺が失敗しても護衛の人たちがやっつけてくれるらしい。

この話を聞いてますます自分はただの、宣伝役なんだと思い知らされる。

そんな説明を受けながらも覚醒の泉に着いた。

「いいですか、紅」

「ああ、わかってる」

「どうか、無事に戻ってきてくださいね」

言葉は返さない。

ただ、背中を見せるだけ。

そうして石造りのドアを開け覚醒の泉のある部屋へと入る。

自分に勝つを入れるために心の中で『よし!!』と意気込む。

そして目の前にある泉の中へと階段を一段ずつ降りる。

少しずつ体が水につかる。

腰まで使ったところで目を瞑る。

リリスの話によると・・・

『泉に腰まで使ったら目を瞑ります。』

その後体中から光があふれ意識が切れます。

そして、目覚めたときから試練が始まります。』

『試練は毎回同じなのか?』

『いいえ、個人の能力が違つように、勇者の試練も人それぞれです』

『そうか、・・・』

体中から発光しているのがわかる。

これから何が起こるのか、少しわくわくしていた。

そんなことを考えているうちに意識は落ちた。

▲

意識が戻る。

すぐに頭を回転させる。

・

・

そつだ試練が始まるのか・・・

すると、先ほどまでこの真っ白な世界には自分しかいなかったのに

目の前に全身黒ずくめのマントを羽織ったものがいた。

あんたは誰だ？と言う前にそいつは・・・

『能力ちからが欲しいか？』

迷う。

迷う。

力があることで災いを呼ぶこともある。

その力で俺は一体どれくらい自身が傷ついたのかもわかってる。

だから、まだ踏ん切りがつかない。

この力がないとたぶん魔王と戦う俺の護衛たちは俺の変わりに傷つく。

ただ、それだけがいやだった。

だから告げる。

あの時もそうだったから・・・

『俺の周りの人間を守る能力ちからが欲しい』

その答えに黒ずくめの男の口がニヤツとなる。

『なら、これからお前に試練を与えよう。』

その試練を乗り越えればお前は这个世界で一・二位の力を得ることができる。

しかし、その試練は厳しい。

その、試練を受ける覚悟がお前にあるか？』

何をいまさら、

俺は試練を受けるためにここにきたんだ。

もちろん答えは

『YESだ！』

『よし、じゃあ移動だ』

言葉の後、黒ずくめの男が指を鳴らす

パチン！！

指の音が鳴った後、あたりの景色が変わった。

さっきまでは白い世界だったのに今は、草木のない荒地だった。

『では、ルールを説明する。

お前にはただひたすら俺の魔術・陣術・精霊魔術をひたすら見ろ！』

『見るだけか？』

『いや、違う。』

発動の際に起きる周りの変化とその弱点を見つける。

さらに俺に魔法で攻撃することだ。

それができたらおしまいだ』

『まで、俺は魔法なんてつかえないぞ。』

それに理論なんてまだ聞いてない』

『大丈夫だ、お前はすでにわかってるはずだ。体の中に今までなかったはずのものが入り混じってるくらい』

『そんな、まさか・・・』

あいつに言われたとおり体に意識を集中させる。

すると今までなかったものが入っているのに気がつく。

『おいおい、まさか本当に気づいてなかったのか。』

まあ、いい。

その変なのが魔力の源だ。

それを体から出すイメージで自分の想像した魔法を思っ浮かべれば

いい』

『そんなの練習が必要に決まっているだろ!!』

『だから、それを実戦形式でつかめたっていつてるんだよ。

わかったか?』

『ああ』

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

・

それから俺の体感時間でおよそ半年以上もの長い月日の中で訓練という死闘があった。

そのなかでいくつか自分の弱点に気がついた。

なぜか、左の反応がわずかに右より劣っていたことに。

思い返せば俺は左目の視力が右目ほどよくない。

そのためか、若干右目よりも劣る。

しかし、もう一つわかったことがあった。

目で視認できない攻撃には左のほうが反応できていた。

しかし、右のほうは視界に頼っているせいで、どうしても目で確認しようとしてしまう。

この訓練で、自分自身の弱点を見つけ、克服し、ある意味二段階・三段階と強くなった。

だが、肝心の試練を終えた俺にあいつは俺の能力の^{ちから}ことを何一つ教えてはくれなかった。

『さよならだ・・・』

その言葉を最後に俺の意識は闇に落ちた。

・
・
・
・
・

・
・
・

・

第五話（後書き）

一気にストーリー進めました。

単に試練のどこをかける力がなかったただけですけどね。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第六話（前書き）

今さっき書いたものなので、見直しかしてません。

いろいろ変なところかあると思います・・・確実に・・・

第六話

▲ 7月7日 午前11時 全国一斉七夕DAY・・・何茶って
ww

自分の意識が戻るのを感じる。

少しずつ、少しずつ瞼を開ける。

最初の数秒はあまり視界がよくなり、ぼやけて周りの様子がわからない。

ただ、日がまだ真上には届かないがかなりの高さから日を照らしつけているのがわかる。

何度も瞬きを繰り返し目覚めたときからある左手に触れられているものへと視線を向ける。

自分の左手を握っていたのは、紛れもなく姫のリリスだった。

しかし、こちらに来たばかりのときより、やつれており、たぶん夜遅くまで俺がおきるのを待っていたのだが、睡魔に負けて寝てしまったのだろつ。

それだけではありえないほど彼女の目の下には隈ができていた。

そんなに心配かけていたのか・・・

『ごめんな・・・』と寝ているリリスに語りかけながら、前髪を掻き分けて撫でる。

すると、気持ちよかったのか少しだけ顔が微笑んだ気がした。

そんな、彼女を数十分みていたら部屋の外から誰かが、入ってきた。入ってきたとたん、俺のことをみて声を上げようとしたが、俺に看病してくれていた姫のほうを見てあわてて口を閉じた。

姫のことを起こさないように気遣いながら、小さな声で『やっと気がついたのか』

俺もリリスを起こさぬよう小さな声で『ああ、久しぶりになるのか？ エリス』

俺が名前を覚えていたのが意外そうな顔をして『ああ、一週間ぶりだな君的にはな』

『てことは、エリスは寝ている俺に挨拶に来たことがあるのか』

『そうだな、で話題を変えるが・・・。急にエリスの顔が険しくなった。』

君は一体どんな試練を受けたんだい？ 一週間も寝たきりになるなんて歴史上初めてだ。

過去最大でも三日でだったのに君は一体どれくらいの間試練を受けていたんだ？』

『俺の感覚的に半年だったと思う。』

それに、あいつ試練だけやらせておいて能力のことは一切教えてくれなかった』

『なに！？ 教えてもらえなかっただと・・・』

とたんに考え始めたエリスに何を言っているのか分からないため、彼女の思案がまとまるまで待つことにした。

そして、彼女の思案がまとまったらしくこちらを向き話す出す。

『君はその・・・あいつとやらにどんな試練をしたんだ？』

『あいつが放つ魔法を見て、よけて、弱点を見つけて、最後にあいつに向かって魔法を当てただけだけど・・・』

また、黙り込み考え始める。

『たぶん、私の推測だが君の能力は目に関係するものではないか？』

『目、ですか？』

『そうだ、試練の中で何か、今までになかったことかは感じなかったか？』

そのことを聞かれて思い出す、あのときの状況を・・・

・・・

•

•

•

•

第六話（後書き）

てことで、次回回想はいりっまっす!!

第七話（前書き）

とりあえず見直しなしの更新

地震ってこわいですね。

第七話

▲ 試練を受け初めてから約3ヶ月・・・

ヒューー・・・ドカン！！

ヒューー、ヒューー、ドカ、ドカン！

あいつの繰り返し出す魔法をこれまでどおりによける。

決して無駄な動きをいれず、最低限のエネルギー消費で、体をよじったり、足裁きでよける。

もう、魔法はほとんど当たらなくなってきた。

最初のほうこそ軌道がつかめず、あたっていたが、パターンなどが読めてきてもう、よけるのに苦労はしない。

なので、そろそろ魔法での反撃を考えていた。

試練が始まる前あいつは魔法はイメージするのをいっていたので、あいつの魔法をよけながら、頭の中で思考する。

しかし、具体的なことが浮かび上がらなかったもので、今まで散々こちらに向かってくるあいつの魔法をマネすることにした。

今まで食らってきた中でも最低、火・水・土・雷・風・光・闇がある。

その中でもあちらの世界でも好きだった雷の魔法が一番イメージがしやすく、応用が利きそうなのでこれを放つことにした。

手のひらにとどまらせるように雷をイメージする。

スピードこそ遅いが、右手にはしっかりと雷特有の電気が迸っている。いまだに、あいつからの攻撃はやんではおらず、しかし、その中でもしっかりと相手に当たるように放つ。

ある程度スピードが乗ったものがあいつに向かって飛んでいく。

だが、あいつに届く前に消える。

「くっそー！　そう簡単にうまくいかないか」

魔法こそ当たらず消えたが、俺が魔法を放てたのがよかったのか、あいつが話しかけてきた。

「よし、無事魔法使えたしそろそろ、俺の魔法のレベル一段階上げるけど」

「は！？」

あのやろっ！！

・ レベルを上げるってことは、今までの全部、手加減していたのか・

ただでさえ慣れてきてやつと魔法で対抗しようと考えていたのに。

・・・と思案中にあいつから火の魔術が飛んでくる。

ゴオオオ！！、とまるで巻き込んだものすべてを焼き尽くすような勢いで接近してくる。

それを、ほぼ反射神経だけで、体を平行移動するように、左足できるだけの力をこめて右によける。

よけた火の魔術が地面にぶつかる。直後、ドゴオオオン！！！！

今までの魔法とはまるで別物のように数センチ、いや、数十センチ以上のクレーターがその地面にできていた。

第八話（前書き）

地震の被害はすごいですね。

人が何千の単位で消えてなくなってしまうものだったなんて・・・

こんなこと考えてもくなくなるだけやーい。

あ、見直しもちろんなしっす。

第八話

▲

目の前にできたクレーターをただ、呆然と見ていた。

放たれた魔法はスピードもパワーも桁違いだった。

この魔法を見て改めて魔法の恐ろしさを知っただろう。

呆然と立ち尽くしている俺を見て、あいつは言った。

「おいおい、こんなもんじゃねえぜえ！」

その、咆哮をもとに、上左右から魔法が飛来してくる。

上から来る風魔術から相殺し、順に、右・左と相殺する。

しかし、このとき完全に獄閻寺紅鷹ごくえんじ こうようは、この試練を甘く見ていた。

いくら、潜在能力を覚醒させる試練だったとしても、殺す勢いだとは思わない。

右から来た、魔術の後ろにもう一つ魔術があったなんて思わなかった。

一つずつしか撃ってこないとおもってしまっていた。

闇属性で放たれた魔術の後ろから炎属性の魔術が顔付近に飛んでくる。

思考回路では来るとわかっていても、この速さじゃよけられない。

この瞬間に獄閻寺紅鷹は目をつぶった。

右目だけを閉じたのだ。

よく、みんなもこんなことあるはずだ。

いきなりとんできたボールをよけられないと思い。

骨髄神経の反射で目を閉じる。

ただ、獄閻寺紅鷹はある程度の武術の心得があるので、接近して来るほうの逆の目だけは閉じなかった。

そう、たまたま、彼は無我夢中で魔力を籠めた。

彼は、来るはずの衝撃を待っていた。

.....

・
・
・

・

・

しかし、いつまでたっても衝撃は襲ってこない。

痺れを切らし、目を開ける。

あたりを見渡してもさっきの魔法が見当たらない。

魔法の痕跡も目の前からぶつつり切れていて、たどることはできない。

消えたのか！？

いや、そんなはずは無い。

だが、それ以外考えられない。

そして、この思考をさえぎるようにもう一発、あいつの魔法が飛ん
でくる。

その、魔法に彼はまったく反応できず、もろに鳩尾に食らう。

『ううー！！』

魔法があたった衝撃で数メートル後ろに飛ばされる。

腕に力を入れて立とうとするが、頭が重くそのまま地面に落ちる。

そうして彼は、意識を手放した。

・
・
・

・
・

・

第九話（前書き）

募金したぜ！！

俺だって、日本に貢献できるんだ！！

第九話

▲ 7月7日 午前11時20分

試練の中で不可思議なことを、エリスに話した。

「やっぱり、目に関する能力だと思うよ。」

吸収か打ち消しか反発ってところだけど、君の話からするに魔法の痕跡がぶつり切れているのなら、反発はまずないね」

自分でも、俺の能力はどう考えても目による力だと思うので相槌をうつ。

「明日にでも能力を確認したいんだけど・・・」

能力についてエリスに手伝ってももらおうと思ってお願いしようとしたら「ん、んん!!」

俺に看病してくれていた、姫さんが、ムクムクムつと起きだした。

まだ、完全におきていないのか、目をこすり此方を見てるようで見ていない。

そんな中、エリスが『感動の再開を邪魔するのもなんかいやだから失礼するよ』って言って出て行きやがった。

そして、やっと目が覚めたのか、『あー!! やっと、気がついた

んですね』

といきなり抱きついてくるし、『もう、心配かけないでくださいね』とか、あれ？ 俺こんなフラグ立てたっけ？

いつの間にか立てたフラグをしらずのうちに回収してしまった。

▲ 7月10日 午前6時00分

眩い日差しが自分の顔を照らす。

「んん！！」

とつさに左手を目の前に出し、日差しをさえぎる。

数分が経ち、ゆっくりとベットから起き上がる。

今日から魔王を倒しにいく旅が始まる。

少し、わくわくしているようで、そうでもない。

なにか、やるせなさを感じるが、今日が出発の日なので、避けることはできない。

それに、すでに腹はくくつているので、自室からでて、集合場所の屋外へ。

案の定、早くもなく遅れたわけでもない。

事前に聞かされていたメンバーが馬車に搭乗しており、先日あった勇者披露宴での盛り上がりで、俺たちを出迎えようとすでに人だかりができていいる。

そんな中、俺も馬車に乗ろうとしていたところで、聞いたことのある声が聞こえた。

声に反応し、振り返る。

その、声の主は泣いていて、ゆっくり近づいてくる。

状況を察して場にあつた言葉を言う。

ある程度お世話になった場所でもあり、また来たいと思う場所に、帰ってくる場所があり、待っていてくれる人がいる。そんな人に向けて。

「リリス、いつてきます」

すると、リリスは俺の体に抱きついてとろける様な甘い声と涙目プラス上目遣いで『いつてらっしゃい』と言われた。

その瞬間顔は真っ赤になっていただろう。

周りの連中はヒューヒューとか王様なんか、いつの間にうちの娘を毒牙に！！とか言っているが、顔に熱がいつてくらくらしているの
で耳に入ってこない。

最後にさっきと同様涙目プラス上目遣いプラス100%の笑顔で『
必ず帰ってきてくださいね』とまで言われた。

もう、これは死なずに帰るほかないと思った。

これを、やられた人は必ず、いや絶対落ちる！！

これだけは断言できる。

そんな、やり取りを遮る護衛のAさん。そのAさんににそろそろお
時間ですと中断され、直り惜しいがリリースから離れ馬車に乗る。

こうして、彼らの旅は始まる。

そして彼も同時に動き出す。

▲ side in 7月10日 午前1時40分

そういえば、明日・・嫌今日があいつらの出発日だったな。

こっちは、軍事国家の裏とか、あの計画に関わる人物などを調べているのに、あいつはまた、幸せそうな顔をしてやがる。

あの、顔もすぐに壊されるとも知らずに・・・

それに、まだあいつらには何も起きない。

「それまでに、“あの計画”に関わった人物とエリスを殺した張本人を排除しなければ」と誰に言うわけでもなく自分に言い聞かせるように続ける。

「あの思いをあいつにはさせたくない。

あんな、思いをするのは、俺だけでいい。

エリスさえ助けられれば、俺は十分なんだ。

リリスもエリスも好きだけど、あそこにいるあいつらは、あいつのだから。

せめて、あいつが笑えるような世界にしたい」

彼の意味は硬く鋼のような強固さを持っている。

生半可な気持ちではない。

自分の人生をかけて彼らを助けたいと思っている。

そして、『あの光景だけは防ぐ』とつぶやき、明日を迎えるのであった。

・

・

・

side out

（追加）

しかし、“この獄閻寺紅鷹”では“成功させる”ことはできても、その先には到達できないことはすでに証明されている。

第九話（後書き）

最近思ったんですけど、この小説いったん終わりにして、最初からきっちり書こうかな？　っておもいました。

なので、もし決心ができたなら改訂版でも出そうと思います。

決心がつかないまでは、連載続けます。

もし決心がついたら、もっと読みやすく、わかりやすく、面白くな
って帰ってきます。

キャラ設定

主人公

獄閻寺紅鷹^{ごくえんじ こうよう} 17歳 黒髪 瞳：ブラウン 身長174

細身だが引き締まった身体をしている。

家庭内の関係でかなり複雑な環境である。

頭は非常によく、スポーツ万能。しかし、音楽だけはギリギリ3を取れていること。

リリス

エルフォード国 姫

リリス・エルフォード 17歳 銀髪銀瞳 身長158 バスト：

秘密（でも着やせするタイプです）

容姿はとても優れ、街中を歩けば10人中8人は振り向く美少女。

ある程度の魔法は使えるが、それほど魔力は高くない。

本人はまだ気づいてはいないが、紅鷹を意識している。

エリス

エリス・ヴァルージュ 21歳 赤髪赤瞳 身長163 バスト：

秘密（よろいの上からでもわかるでかさ）

リリスと同じく容姿は優れている。リリス専属の護衛だったが、魔王討伐メンバーに選ばれ、一時専属はなれた。魔法は得意ではないが使えるのは限られている。そのかわり、剣の腕はたしか。

セイ
ン
護衛A

セイン 26?歳 金髪金瞳 身長176

なかなかの物腰で、いわゆるゴリマッチョとまではいかないがそんな感じ。

剣ともに魔法、両方とも扱えて万能タイプ。

敬語口調。

第九・五話 とある一日（前書き）

主人公が旅に出る前の話ですね。

第九・五話 とある一日

▲ 7月8日

先日覚醒の泉で試練を受けたが、前々からリリスが楽しそうに買い物企画をしていたので、気分転換をかねてエリスと俺を連れて、俺のたびの準備として買い物の途中だった。

しかし、たまたま！！ほんとにたまたま、そのときの護衛がエリスで、三人で連れ立って歩いており、右からリリス、俺、エリスという配置でをいたのが後悔したと思う。

そう、右端の細道から急にリリスが奥へとさらわれてしまったのである。

一緒にいた二人は、理解が追いつかず、数秒立ち止まっていたが、ことの重大さに気づき、エリスが「姫様！！」と人影のように追いかけていった。自分もそれにくっついていった。

案の定、細道の奥の広い空間についたときにはまだリリスに危害はなく、首筋に刃物を突きつけられている状態であった。

状況が状況なので、二人は下手に動けなかった。

そして、リリスを裏路地にさらった中年太りは金ほしさに、リリスを脅した。

さすがに、自分が今にも何か変な行動をしたら中年太りの人にナイフで傷つけられると思い、リリスの体は震え得ていた。

中年太りは「姫様を傷つけられなくなったら、今お前たちの持っている有り金全部をよこせ!!」と言い放った。

そんな、中年太りの態度にエリスは今にも爆発しそうに「その手を姫様から離せ!!」

と、いまにも飛び掛りそうなので紅鷹はエリスを征した。

「止せ!! 今飛び掛ったら確実にあいつはリリスに刃物を突きつける」

「ならどうすればいいのだ!!」

かなり感情的な部分をさらけ出しているエリスには落ち着いてもらおうと思っただが、あまりいい言葉が思い浮かばず、苦虫を噛み潰したような顔になった。

手が無いため、彼はエリスに目だけで合図する。二人は財布を取り出し、財布の中に入っていたものをすべて豚野郎の近くに投げつけるようにばら撒いた。

豚野郎はリリスから手を離さないようにしゃがみ、地面に落ちていた金をかき集め自身のポケットに突っ込んだ。

行動の様子を見ていた二人は要望を果たしたので、リリスを開放するように求めた。

しかし、いや当然のごとく豚野郎はリリスを離すつもりは無かったらしい。

「おい！　どういうことだ！　お前の要望には答えた。だから、さっさと姫を離せえ！」

エリスの感情的な行動に思うところがあつたのか豚野郎は、口を二やたとさせさらに追い討ちをかけた。

「俺がこいつをお前らに解放したら、お前たちは必ず俺を捕まえる。んなのは俺は嫌だ。だから、お前らには俺の安全を保障してもらわないとこいつは解放しねえ」

「っ！！」

「くっぞ！」

上から、エリス、紅鷹と双方似たような反応を示した。

紅鷹は、必死に打開策を考えていた。

このまま奴の要望に応じたら、さらに現状は悪化する。

奴の行動を凌駕するほどの器量と経験はエリスは持ち合わせてはいない。

このまま、街の外まで行き、奴はそこに逃げる。

もし、追っ手などを下手に送り、奴の機嫌を損ねれば、間違いなく、奴はリリスを殺す。

それは、だめだ。

させない。

なら、どうする？

エリスは使えない。

要望には答えてはいけない。

下手に手を出せば、容赦なく殺す。

だったら、視認できない一撃で決めればいい。

だが、ほんとうにそれでいいのだろうか。

悩んでいる境に、エリスが痺れを切らし飛びつくように前進した。

すると、リリスの首筋から赤い液体がにじみ出る用に出ていた。

その様子を見たエリスは急停止した。

瞬間、紅鷹の周りから殺気が放たれた。

周りの温度は下がったように錯覚するようなほど強い殺気。

しかし、本人の周りだけはなぜか熱を帯びているように空気が揺らいでいる。

意を決したように紅鷹がリリースに言う。

「リリース、少しも動くなよ」

その言葉に即答でリリースは「は、はい！」と答えた。

しかし、目の前で行われている会話に苛立ちを覚えた中年太りは「おい！！ お前ら状況分かってんのか？！」

その言葉で紅鷹はブチンときた。

なぜか、あの脂ぎった手でリリースを触っているのが気に食わず今すぐにもぶっ飛ばしたい気分になり「黙ってろ！！ 豚野郎！！」と大喝した。

その言葉で豚野郎は少し身震いをした。

「今すぐその手を引き剥がす」とものすごくトーンの低い声ではなつ紅鷹。

そして、コンマ数秒で紅鷹の地面には紅鷹の靴跡がくつきり付き、リリースの目の前に現れた。

彼は、端から見たらいきなり消えたように見えただ。

当然、豚野郎は視界から消えた紅鷹を探していたが、見当たらない。
目の前にいた。

そして、勢いを殺さず、そのまま右手でリリスの腹部を押し上げて持ち上げるような姿勢で後ろにいる豚野郎に衝撃が奔り、数十メートル吹っ飛び、壁にぶち当たりめり込んでいた。

しかし、エリスからみたらどう見てもリリスもろとも攻撃しているようにしか見えなかった。

「貴様！！ 何を！？」

「大丈夫だって、なあ？ リリス」

紅鷹の右手にまるで延長線のようにつながっていたエリスを抱き寄せるようにし、抱かれていた本人はピンピンしており、エリスはまったく現状をつかめてはいなかった。

第九・五話 とある一日（後書き）

いつのまにかユニークが1000を超えたびっくりだわ・・・

IF 　　というか、ただ連れて行きたかっただけ（本来ならお蔵入りだけどせっか

▲

長い用で、短い一週間、この城の生活も今日が最後で、もうすでに馬車に乗る前に別れのあいさつとやらが行われている。

自分の知らない人からや、護衛たちの親しい者たちの声援。

彼は知らぬうちに彼女を探していた。

その、彼女を見つけようとあたりを見回しても見当たらない。

そんな俺を見てエリスが「きっと姫様はあなたと分かれるのがおつらいですよ。だから、顔は合わせないと思うのですが」

なぜか、感慨深く感じていた彼がいた。

しかし、自分がそのようなことを考えるようになったと思うと自然と頬が笑っていた。

可憐以外でこんな気持ちになったのは、初めてだったから余計に気持ちが増した。

「もっと一緒にいたかったな・・・」

その言葉をしっかりと聴いていたエリスはまるで彼をあざ笑うかのように「魔王を倒したらここに帰ってこれる。それに、元の世界に帰るか帰らないかは選べるから、姫様を娶ってもいいんだぞ」

しかし、それを彼はあえて無視をした。

護衛の一人、Aは「もうお時間が押しているのでお早くに馬車に乗ってください」と彼とエリスに告げ馬車の中に入っていた。

肝心の一人には挨拶はできなかったが、帰ってきてもう一度会えると思うと自然と足は動き、馬車の中へと消えていった。

▲

何かおかしい。

護衛のAは最初からわかっていたっばいけど、彼とエリスは違った。

先ほどからエルフォード国の姫、リリスについて彼とエリスと護衛Aで話していたのだが、悪口や、ちよつとはしたない行動についてのことになったときになぜか、馬車内にあつた樽が少しだけ揺れたのである。

一回目は馬車が地面などで石ころを踏んだ際に起きるものだと思っていたのだが、引き続きリリスについての話題話をしていると、ガター！ と、馬車のゆれとは不釣合いなゆれだったので、まさかと思ひ、護衛に選ばれ、護衛に選ばれる前はリリス専門だった騎士エ

リスが、おそろおそろ樽を開けた。

予想通り、樽の中にはリスが体育座り中で中に入っており、エリスと目が合ったときはまるで世界が終わったかのような目をしてごめんなさい、と言った。

▲

知らずのうちに馬車に乗り込んでいた利リスは、未だに誰かにかまわず謝るように耳をふさぎつぶやいている。

それが、数十分、数時間続いたけれども、飯以外のときは、未だに謝まり続けている。

『そんなに罪悪感を感じてるならこなきやよかったのに』

と、紅鷹は口にはださなかったが、一緒に旅にでられるのにちよっぴりうれしさがこみ上げているのがわかった。

だからか、いまだに場車内で言霊を呟いて、負のオーラを撒き散らしているリスに声をかけることにした。

「おい」

反応は無い。

聞こえなかったのかも知れないと思い、もう一度声をかけた。

「リリス」

「はい・・・」

返答はとても小さな声だった。

こいつは、まだ落ち込んでいるのかと額に手をやっていたが、いつまでもこの状態だと旅先でも不幸をよびかねないので、とりあえず機嫌だけは直してほしかったので、慰めるつもりで「なあ、いい加減機嫌直せよ。いまさら、遅いし、その、俺が連れ出したってことにすれば・・・（つて名にいちやってんの俺?! 普通そんなことしたら罰せられるよな?! あれ、死刑もんじゃねこれ?!）な？」

俺の思いが伝わったのか顔をこちらに向けて「ほんとうですか？」と涙目で真意を確かめるように問う。

とりあえず「ほんとうだよ。だから、いい加減もどつてくれ」

「善処しますっ」

自然と彼女には笑顔が戻っていた。

その笑顔は慈悲の塊のようで、思わず見とれていた。

そういえば、リリスの顔をしっかり見たことは無かったからか、余計にリリスの可愛さが伝わってきて、顔が厚くなるのを覚えた。

第十話 旅の目的先と決意（前書き）

お待たせしてすみません。

短いです。

あと、これからも亀更新になります。

あ、見直しなしっす。

ストックないしww無理だわ。

第十話 旅の目的先と決意

▲

ガタン！ ゴトン！！ ガタゴトン！

「っ！！」

思わず痛さのせいで尻を押さえる。

そんな紅鷹の様子を見ていたエリスがかわいらしく首を傾げ言う。

「まだ、馬車には慣れませんか？」

「ああ、皮がひりひりする」

ふふふ、と悪戯をこめた笑みで紅鷹を見つめる。

見つめられた本人は、そんなふうに見つめられることに、羞恥心とほのかな怒りを感じていた。

・
・
・

「これから、向かう目標の魔王がいるとこまでに、どれくらい時間がかかる？」

まだ、こちらに来て一週間もたっていない彼は当たり前な疑問を護衛二人に聞いていた。

その疑問に答えるべく護衛Aは口を開いた。

「まあ、軽く見積もって一ヶ月と半位いですかね。多少寄り道をしても二ヶ月はかからないと思いますよ」

「二ヶ月か・・・、以外とかからないんだな。それで向かう場所はどこになるんだ？」

彼の質問に、少し考えるようにして護衛は答えた。

「北の最果て。私たちのいるここら一体は、南部で、基本的に弱いモンスターしかいませんが、北のほうに上っていくと、だんだんとモンスターのレベルが上がり、ある程度の熟練者の人でないと、“死にます”」

最後の言葉に彼は身震いをした。

“死”。

それは、日本ではめったになかったことだ。

たしかに、日本でも事故や病気などで死に至ることはあるが、自分はいたって健康体で、信号無視などをして、交通事故を起こすような前方不注意をするわけでもない。

だから、自分が死ぬのは寿命なのかな、と楽観的に考えていた自分が、今現在異世界へと召喚され、今から死の危険があるところへと赴いていることに改めて突きつけられたように感じた。

たしかに、自分には人よりも力がある。

しかし、その力は対人専門だ。特に相手を、傷つけるか、無効化するもので、決して仲間や、味方をまっもるために存在するものではなかった。

日本にはモンスターなどはいなかったから、どのように戦っていいかわからない。

それに、もし自分が足を引っ張って護衛のみんなが傷つき苦しそうな顔をされるのはもつと嫌だ。

逆に、自分がみんなを守る位に強くなりたいとも思った。

だから、一番に努力をしようと思った。

みんなを守る努力を・・・

第十話 旅の目的先と決意（後書き）

なんか、こここのいろんな作品読んでたら、書き方がわからなくなってきた。

どうしよう!？

第十二話（前書き）

再開！！

おまたせしました。

いや、文才とイベントを引き起こす力が無いのでかなりすっ飛ばします。

第十二話

▲

俺が城を出てからの初めての街にたどり着いた。

以前、リリスとエリスとの買い物のときに城下町で、服や、武器、この世界に存在するモンスターの毒を解毒する薬などの調度品、旅に必要なものを買って以来の街ということで多少興奮していた紅鷹は、この街には一体自分の知らない事がどれくらいあるのだろうか気が気でなかった。

案の定、期待は外れることなく自身の想定範囲内を軽くオーバーするくらいで、好奇心が沸いており、すぐにでも街を徘徊したい気分だった。

そんな様子の紅鷹をみた護衛Aがこう言った。

「先にエリスさんと街を見に行ってもいいですよ。馬車は私が予定通りの宿に預けますので」

護衛の言葉に感謝し、直ぐにエリスを引きずるようにして馬車を降した。

特に行きたかったのは飲食店だった。

なにせ、今は日本人じゃなくてもおながやすく昼時だからである。それに、文化の違いが合ったとしてもやはりおいしいものはおい

しいはずだと思っているので、それをエリスに伝えた。

すると、エリスはそんなことかと軽く流すように答えた。

そのことに紅鷹は多少疑問に思ったが、ある程度位の高い騎士だったこと思い出し、それなりにうまいもんを当たり前のように食ってたのかなと思っていた。

案内されるようにこの街を回った。

途中、野外経営の店があったのでおねだりをしたところ、エリスは少しむっとしたが、「しょうがないな」と、まるで親が子にするようなやり取りだった。

そして、着いたのが「ユーミリ」。

由来はわからないが、なぜかカタカナというところに異世界を感じて冷めかけていた興奮がぶり返すように心の奥底から燃え盛ってきてさらにうつつとうしくなっていた紅鷹であった。

食事の後、自分たちが泊まるであろう宿に向かい護衛Aと合流した。

そのときの護衛は、なぜかキョロキョロしており、どこかに集中しているようだった。

その様子に気になって俺は問いかけた。

「何かあったのか？」

「いえ、なにも」

そうか、と軽く返してその場は特になにもなかった。

しかし、後でこの会話を後悔するだろう事をまだ知らない。

一泊した後、すぐに街を出た。

紅鷹的にはもつとはじめての異世界の旅を楽しみたいと思うところがあったのだが、魔王討伐という大義名分を与えられた身であってその様な行動は許されなかった。

ほとんどノンステップで荒野を駆け抜ける馬車の中に彼らはいた。

「でも本当に急いでいるんだな」

「あたりまえですよ。誰もが早く魔王という恐怖の対象を消し去ってくれるのを待ちわびているのですから」

「俺たちのことはどうでもいいのか？」

そう、もっとも疑問に感じたのがそこだった。

なぜ、この世界の人々のために俺たちは誠心誠意を尽くそうとしているのに、実際に救ってもらうはずである人たちが俺たちを急かすのか。

仮にも死というものが高確率で迫ってくるであろう依頼のはずなのに、それ相応のものが保障もなしなのか。

「魔王を倒せば英雄。倒せなければ名を知られること無くはじめから存在すらしていなかったようにされるだけ。特に貴方のような異人はね都合がいいんですよ」

「そうか、それでも俺にはそれ以外目的も無い。無事帰ってこれたとしてもまだ日本に帰るなんて決めてない。まだ、俺には選択の余地がある。選択はそのときそのときにあるけれど決してそれを選びなおすことはできないのだから、慎重になるさ。まあ——」

すべてを切り捨てるように言う。

「——とりあえずは魔王を倒してからな？」

それぞれが反応を示し何かを考えているようだった。

正直、紅鷹本人かなり難しいことを言ってしまったって自身も自分の言ったことをわかりかねているのだ。

はたして紅鷹は自分の言ったことがしっかりと誰かに伝わるのかわかっていつているのか、それとも口から出た偶然なのかはまだ、分らない。

第十二話（後書き）

次回は3日の予定です。

さらに次は6日です。

その後は、二日おきに投稿を続けます。

第十三話（前書き）

ふせんちゃん、ふせんちゃん、回収するのはいつかな？

お気に入りが減ったw w 駄文なのはわかってるけど……、やっぱり傷が。

第十三話

俺たちが城を出てからもう、一ヶ月は過ぎたと思う。

何度か、盗賊や魔物、そういった類のものに襲われることで戦闘にも慣れてきた。

それに、まだ正確な発動条件はわからないが、覚醒の泉の試練で手に入れた能力はかなり扱いのいいものだったことが発覚した。

魔法無効化。

名前の通り、魔法を無効化するのだ。

原理は分らないが、チートにしか思えない。

ただ、発動条件はかなり厳しいことはわかった。

右目を完全に閉じ、左目に魔力を集中させる。

この時、少しでも右目が開いていたり、魔力が流れていた場合は発動しない。本来、自然と魔の気は体全体に血液のように流れるものであつて、決して一点を通らなかつたり、一点に集中することは無い。

しかし、この能力はこの要素が必要不可欠なのである。

面倒な発動条件だが、慣れるとどんどん発動が早くなりほとんど弊害なく使いこなせるようになって来た。今はまだまだだが、魔王

と対峙するときまでには完成系にしなければならない。

そして今、地球でいうかなり緯度の高いところまで来たと思う。

俺が召喚された街では、気温は高く、過ごしやすい日々を遅れたが、ここ最近では上着を羽織る必要があるほど寒くなってきたている。

上着は、日本と同じ動物、いや魔物の毛皮を使ったもので日本製のよりはかなり暖かい。

時刻は深夜を廻りそうな中、無性に心が寂しくなり、散歩に出かけた。

夢には日本での友人たちの顔が出てくる毎日で、少々ホームシックになりかけているところで自己嫌悪に浸っている。

ここに残るか、日本に帰るか……。

2

夜の街は薄暗い街頭が照らしつけ、気分の優れない異人の俺をも受け入れてくれるような温かみがある、感じがするのは気のせいだろうか。

昼間、活気のあった街中何度も肩をぶつけたこの場ではすでに一人さえすれ違ふことのないくらいに少ないものである。

そんな街中、まだ野外に展開されているまだ店仕舞いされていない店があった。

なんとなくその店に引き付けられるようなものを感じ近づいた。

どんな商品を扱っているのかを聞こうとしたら逆に向こうから話しかけられた。

「あ、昨日のアンちゃんじゃねえか。探し人は見つかったのか？
まあ、俺はすでに一生に一度の人は見つけたけどな」

ガハハ、と笑いながら左手の薬指についでる指輪を見せ付けていた。

その行動には感心は一切いかなかったが、前者の話が気になった。

（こいつは何を言っているんだ？ 昨日？ 探し人？）

どう見ても初対面なおっさんに突然意味の分からないことを言われて誰だって不振がる。

「あのすいません、俺たちって初対面ですよね？」

「な〜に言っただよ、昨日俺に聞いたじゃねえか、俺よりかは少し小さい奴と、どっかの国の鎧をきた金髪の男と赤髪の三人組を見なかったかって、忘れたのか？」

おっさんの言葉に口が半開きになっていた。不意に護衛Aの不自然な行動が頭をよぎる。（前話）

「――、――」

あまりのことにおっさんが追加でしゃべっていたことに気づかな

かった。

（誰かに俺たちが狙われている？　なんのために？　魔王討伐を阻止するため？　護衛はそれを感じ取っていた？）

「一体なんの目的があるんだ……」

考えても答えが出ないことを分かっているでも考えることをやめることはできなかった。

その後、どうやって宿に帰ったかは記憶になかった。

第十三話（後書き）

小説全体	PV	ユニーク
累計	6,099	アクセス 1,708人
パソコン	4,559	アクセス 1,488人
携帯	1,540	アクセス 220人

すごいな……、こんなにも人が見てくれてたなんて、感動だべ
〜。

第十四話（前書き）

ほんとに戦闘のクオリティーが低くてすみません。

ほとんど戦闘なんかないんだけどね……。

戦闘は書けない。

二日後を期待してこの話すっ飛ばしてください。

どうせ、勝つの決まってるし……。

第十四話

▲

とうとうこの日がやって来てしまった。

この世界の人たちを苦しめ、自分の私利私欲のために力を振るっていた魔王にようやく鉄槌を下すことができる日が。

魔王の住む土地は案外狭く、唯一ついかにも魔王城って感じの薄気味悪い富陰気と、コウモリにた動物がフラフラ漂っている。

「ここが魔王の城なのか？」

「はい、ついにここまでたどりつきましたね」

金髪の髪色が目立つ護衛が俺を見る。

「準備はよろしいですか？」

赤髪のツヤがより女らしさを主張するエリスも俺を見る。

だから、俺はこいつらに恥じない言葉を言わなきゃいけない。

「当たり前だ！」

入り口の鉄扉を開ける。

すると、一本道に赤色の絨毯が真っ直ぐこの先にいるであろう魔

王の席まで続いている。

距離はかなり離れているのに対して、魔王の笑い声が響いてこちらまで聞こえてくる。

「フーハっハハ！！　とうとうきたか勇者どもよ。遅いではないか、我を待たすとはいいいご身分だな、ゴ・ミどもよ」

「だけどな！　そのゴミにお前はやられるんだ！！」

刹那、紅鷹は高速詠唱で、魔法の中でもっとも速度を持つといわれる雷属性の矢を放つ。

「ライティングアローー！！」

ビューン！　と音速を超える速度で放たれた矢は数百メートル離れた魔王の目の前で消え去る、と思いきや反発するように魔王のほうから、禍々しい黒色の矢が帰ってきた。

それを仲間たちの前にでて、何度も練習したあの動作を行う。

静かに右目を閉じ、左目を中心に魔を集める。

そして、発動する。

キュインっ　と甲高い音が紅鷹の目の前で発生するが、すでに魔王が反射した矢はどこにも無い。

魔王は当然のように王座に腰をかけた状態でこちらを見ている。さすがは魔王ってところか。

「そんな簡単にやられてはくれないか……」

「そんなのは分かりきっていることでしょう。私は行きますよ」

そう言葉を残して、エリスは鞆に手をかけて魔王に向かって走り出した。

彼女は前衛なのでどうしても前に出なくてはならない。

俺も行かなくては。

「しっかりついてこいよ！ セイン！」

「了解しました」

そして、俺たちは死闘を始めることになったんだ。

第十五話 不可解な現象と忘却の記憶（前書き）

やつふ - - - - - !!!!

結構力を入れたけど、詰まんなかったらかなりショックを受ける。

結構がんばったんだけどな……。

第十五話 不可解な現象と忘却の記憶

8月29日、午後6時40分

魔王は跡形もなく目の前から消え去った。

自身の放った懇親の魔法で、無限と称される俺のすべての魔力を
 籠めて、塵一つ残さず消し去った。

紅鷹は、心の底からなんともいぬ達成感のようなものが急速にこみ上げてくるのがわかった。

この二ヶ月間でいろんな犠牲を払いながらもここまでこれた。むしろ、そういう犠牲があつてこそ今の現実があるのだと感謝をしていた。

そして、内に潜むこの気持ちを早く仲間と共有したいと思い、後ろを振り返りエリスに抱きつこうとしたが――。

そう、抱きついていつもなら、やめてください、私たちはそのよ
うな関係ではないのですよといいながら頬を赤らめるはずの顔が無
い。

[illegible]

無い、無い、無い、無い、無い、無い。

首から上が“無い”。

「なっ……なっ!？」

生きている人間なら誰しもが存在する場所は虚空をただ現していた。

虚空という表現は違つかもしれない。

なぜなら、斬られたであろう首元からは噴水のように血しぶきが吹き上げているのだから。

そして、恐怖に追い討ちをかける様にコロコロつと丸い何かが音を立てながら自身の足に転がってきたものが当たって停止をする。

下を見たくなかった。

下を見ることが怖かった。

下を見て現実を突きつけられることがいやだった。

下を見たらすべてが終わってしまう気がしたから。

なぜなら足元には、約二ヶ月間を一緒に旅をしてきて、特別な感情を抱いたエリスの顔が、首から上だけが存在しているのだから。

転がってきたであろうエリスの首から上だけの部位は鮮血をまき撒きながらも美しさを保っていた。

紅鷹に迫った魔法はそのまま直撃して彼を壁際まで吹き飛ばした。

「うっうっ！」

瓦礫の中から這い上がって視界を得た。魔法が頬に直撃したために口からは大量の血を垂れ流しながら、攻撃をしてきた者をつつろな目で見つめた。

口内を切ろうが、攻撃してきた相手を見るだけで、紅鷹の頭を冷やすのには十分だった。

しかし、運命はそれ許さぬように突如紅鷹の記憶というものに直接なにかがぶち込まれるように流れてくる。

あまりの頭痛で地面にしゃがみ込んでしまい、起き上がることができない。

もがき苦しむ中、誰しもが体験することが無いようなものを紅鷹は体験していた。

しかし、この状況で今、流れ込んでくる記憶が誰かなのか理解できないし、記憶を叩き込まれれば、当然、脳はパニックを起こす。

なので、先ほどの魔法を放った敵に対応することはできなかった。タイミングとはどうしてこうも悪いのだろうか、どこか意図的にされているのではないかとおもうには十分過ぎた。

そして、魔法を放った張本人の護衛Aは、ヘラヘラと笑いながら紅鷹に近づき一蹴した。

「はははは！！ 大丈夫ですか？ 勇者様よー！！」

高らかな笑い声を上げながら、ドスっ、ドスっ、と紅鷹の腹に蹴りを加える。これまで一緒に旅してきた護衛Aとはとても思えぬのようない言葉遣いだった。

鳩尾に諸に与えられる衝撃に抗うことができずに何度も、何度もそれをもらい続ける。

飽きた護衛Aは用を済ますためか次の行動を始めた。

「せいぜい元の世界で記憶をなくして生活してな！！ はははははははははは！！」

「……………っ」

最後に言葉も発せず、悔し涙を流しながら意識は遠ざかった。

ただ、その時不自然な光景を脳裏で見たんだ。

まるで右目と左目で別々の世界を見るように。

そうだ。

別に見ていたものに違いは無い。

なのにこの感覚は一体なんなんだ？

セインの言葉に重なって別の声が聞こえたんだ。

『せいぜい元の世界で記憶をなくして生活してな！！　はははははははははは！！』

『この行動には意味があるのですよ……それを理解するには少々時間が必要なのですがね』

2

深い、深い底から急速に意識が戻ってくる。

先ほどの光景。

それらを必死に抗おうとする気持ち。

「っ！？　はあ…はあ！！　はあ！！　はあ、……ふー」

意識を取り戻した紅鷹の体中汗で濡れ、大きく肩を上下させて呼吸をした。

なぜかはもうわからない。

ただ一つ、酷く辛い悪夢を見たのだろうと自身を納得させた。

冷静さを取り戻すと自分が寝ていたのは家のソファだということを知る。

しかし、いつも座りなれているはずのソファが、懐かしいものになっていたから奇妙な気持ちになった。

自分にそんな覚えはない。当然、もう何年も暮らしているはずのこの家の感覚を忘れるほど家を空けた覚えもない。

不思議な感覚に妙な浮遊感を感じていたが誰かから声がかかった。

「起きたの？ お兄ちゃん」

声をかけてきたのは案の定分かりきったことに、一緒に家に住んでいる可憐だった。

「ああ、起きたよ。ゴメンな、晩飯送れてさ。いや、あれだね、暁と一緒にゲーセン行ってたからであって、決して可憐の作つてくれた晩御飯を――」

必死になって言葉を繋ぐ紅鷹に可憐は哀れみの視線を向けていたのを紅鷹は気づいた。

「どうした可憐？」

すると、可憐はまるで記憶喪失の人に真実を伝えるかのような顔で言った。

「今、何月何日か言える？」

「は？ そんなの6月29日だろ、いや30日か」

ははは、となに記憶喪失のやつに聞くような見たいに言ってるんだよ笑いながら紅鷹は言った。

その否定を肯定するようにするよう可憐は口を開いた。

「うっん、違うよお兄ちゃん。今は8月の30日だよ――」

空白の二ヶ月間。

自身の見た悪夢。

そして、可憐の懷に感じる何か不可解な温もり。

それを理解するには二年の月日を有することになる

第十五話 不可解な現象と忘却の記憶（後書き）

ヤバイ……愛用中のノートパソコンが壊れた。

今は、親のを使ってるけど、いつ復活できるか…とりあえず16日までは予約投稿してあるのでmondainiなのですが、それ以降はどうするべきか。

ていうか、自作パソコン作ってあるけどbootができない。

自作を進めてきた友達は原因がわからないというし、なんか不幸だ。

第十六話 絶望への一方通行

2013年、9月23日、曇り 午前7時20分。

「があああつ！！」

頭に急激な痛みが走り、頭を抱えながら飛び起きる。

ここ最近の朝はいつも頭痛が酷い。

特にこの一週間は。

不可思議な記憶喪失から約、二年と一ヶ月がたった今頃。

不思議なものを見る機会が増えた。

一番初めに気づいたのが、可憐のポッケに常時入っているお守りだ。

そのお守りはどこの神社の文様とは違って普通の裁縫してあるものだ。

そのお守りは特にこの一週間で輝きを増している。

といっても俺以外が、お守りが光っていることに気づくものはない。

所持者の可憐自身、光っているといった俺の言葉を信じ驚いていた。

そして、なにか確信めいた表情をしたのだ。

しかし、俺には関係のない話だし理解することもないのかもしれない。

話を戻して、二つ目は頭痛だ。

俺は頭痛持ちでは無かったはずだが、ここ半年から何度も出てくるようになった。

特に今日は格別だった。

頭が力チ割れそうなほどの痛みを促したのだ。

まるで脳が、今日災いがおこるのを警告しているみたいに。

それからというもの時たま学校を休む日が増えた。

そのおかげで大学での単位は結構ギリギリなのだ。

三つ目、俺が二ヶ月間の記憶を失った直後から、可憐・暁・美希の態度が少しだけ変わっていた。

もちろん最初はまったく気づかなかった。

しかし、俺が将来の話をするたびに皆は顔を悪くしていたんだ。

それらが俺の不思議な出来事たちだ。

そんな回想を思い浮かべているうちに、またあの頭痛がやってきた。

その頭痛は今までとは比にならないくらい強い。

さすがにこれは尋常ではないので、なんとか登校出来た大学を早退することにした。

早退することを、同じ大学にいる美希と暁に継げた後、帰宅路に徒歩で向かった。

途中、再度頭痛に襲われたので近場の喫茶店で時間をやり過ごすことにした。

まだ、昼間をすこし過ぎたあたりなので、俺以外の学生はかなりすくないのでよく目立ってしまう。

（こっちは頭が割れそうなほど痛いつてのに……）

誰に言うでもなく愚痴る。

そして、喫茶店内のテレビであるニュースが流れていた。

『今日未明、東京の世田谷区を中心に大火災が発生しております。発火の原因はいまだ分かってはいませんが、火災は広がる一方です。は！？……ただいま新たな情報と映像が手に入れました。こちらがその映像です』

ニュースキャスターが告げた直後、画面が切り替わり東京のどこかの映像が流れ始める。

映像には住宅街が中心となって火災が広がっているのが映し出されている。

その中には信じられないものが映っていた。

白銀の毛並みを持った狼、緑色をしたゴツゴツしている巨大な生き物。どちらも日本にいるはずのない化け物。まだなにかのドッキリとかCGなら快く騙された。

しかし、どれも本物にしか見えなかった。そいつらは、人を虐殺していたのだから。

「なんなんだよあれは……」

ほんのすこし前まで、いたって平和な日常が、街が動いていたのに、急激に崩壊へと近づいていく足音が聞こえてきた。

そして、ニュースに夢中になっている最中に、ついに付近のこちら一体の目黒区まで火の手がやってきたのである。まるで大震災のときのような火災の燃え移りだったが、今はそんなことを考えているときではない。

喫茶店内はもはや混乱しており、誰も勘定しようとするものはおらず、逃げる。

もはや平和な日常の姿は見えなくなっていた。それに対して、未だについていけない。

だってそうだろう？ いきなりあんな地球外生命体を見せられたっ

て信じる要素がどこにある？

心の中で人を虐殺するという映像の現実を否定するが、周りは生きたいがために逃げるのに必死だ。

その流れに乗って俺も早く家に帰らなきゃ。可憐が心配だ。

でもそれは無理かもしれない。

なぜか、テレビに映っていた化け物たちが、大群になって街の建物を破壊しながら近づくのだから。

そのおかげで、あの化け物達を通ったらしき道はもう瓦礫の山しかない。

（なんなんだよ！？ どうすれば生き残れる？ 逃げるか？ 戦うか？ いやそれは絶対に無理だ……）

録に喧嘩もしたことの無い紅鷹は戦うという選択権を捨てた。

喧嘩はした事が無い。対人戦なら戦う選択権はあった。

しかし、相手はどんな行動をするか分からないし、弱点もあるの
かないのか分からない生物たちだ。むやみに戦うのはよろしくない。
ならば逃げの一手しかない。

しかし、運命というものはそれを良しとはしない。

たまたま緑色のゴツゴツした生き物と目が合った気がした紅鷹は

恐怖を感じた。

次に殺されるのは俺なのではないか。自然と命という心臓を鷲掴みにされたような感覚になり、冷や汗がどつと溢れてきた。

必死になつて人ごみを掻き分けようとするが、何体かの緑のやつと、白銀の毛並みをもった狼が挟み撃ちをするかのように人が逃げ惑う方向から攻めてくる。

当然、目の前の恐怖から逃げようとする人間はパニック状態のまま、逆方向に逃げる。

しかし、その先にはさきほどのやつら《化け物》。

だめだ。生き残れる自信がない。

誰しもがそう思いながらも逃げる。

そして紅鷹は、逃げる気力を失い挫折している。

（無理だよ……生きのこれっこない）

ドシッ、ドシッ、と、重量感がある足音とともに少しずつ緑色のゴツゴツした化け物が近づいてくる。

逃げたいのに足が動かない。立ちたいのに、足には力が入らない。

叫びたいのに、かすれた声くらいしか出ない。そんな中、どこか他人事みたいに冷静に状況を把握した自分がいた。

（俺、死ぬのかな……）

目の前のやつが紅鷹の前で停止した直後、手に持ったこん棒で紅鷹の肩から入れるようにフルスイングした。

ボキッ！　という音はしなかった。その代わり瓦礫の中に突っ込む形で吹き飛ばされた。

ここで普通の人間なら死ぬ。骨は粉々き砕け、腕はちぎれてもおかしくはないはずなのに。

しかし、紅鷹は直接殴られたはずの肩の骨は粉々にはならず、吹き飛ばされても致命傷は負わない。

さすがに紅鷹は瓦礫に埋もれながらおかしいと思った。

その感覚は、二年前のあの日と全く同じ感覚だった。

二年前、俺が記憶をなくしてから当然風呂に入った。

しかし、風呂の鏡で見た俺の体は以前とは見違えていた。

無駄の無いように割れた腹筋。

丁度いいくらいの太さと硬さを持った腕。

そして、鋼のように下半身の筋肉。

しかも、それから短距離のタイムが急激に伸びていた。

陸上部がものすごく遅く感じるほどにだ。

それに全体的に体が丈夫になった。まるで自分の体では無いような感覚。もともと、体はみっちり鍛えていた。

しかし、それにさらに磨きがかかったように体全体が強化されていたんだ。

今、確実に死を受け入れるんのかと思いきや、丈夫さのせいであつたくもってそう感じさせない。

そして、脳から直接命令が下るんだ。

『目の前のやつを殺せ。頭を、脳みそを手刀で突き刺すのだ』

そんなのできっこない。

そんな力は俺にはない。

そんな勇気は持ち合わせてはいない。

なのに、命令してくるんだ。

『殺せ』と。

「うわあああああああああ！」

再度、命令がかかった瞬間には自然と体は大声を上げ、腕は、手首は、緑色のゴツゴツしたやつの脳天を手で突き刺していた。

第十七話 始まりと終わりの通過点？（前書き）

この話は本来プロローグとまったく一緒なんですが、まあ、4ヶ月でちよつとは成長したんだよって意味で書き換えました。

最後だけ文が加わっています。

てか一言。

冒頭につながった—————！！

第十七話 始まりと終わりの通過点？

2013年、9月23日、曇り 午後6時27分。

その日から世界は変わった。

自分の視界から見える周りの建物はほとんど崩壊を記している。

それに夕食時で、ちょうど夕飯を作ろうとしていた東京から僅かに離れた住宅街からは火が燃え盛るように猛威を振るい多量の煙幕を発生させている。

火事の臭いに混じって、人間の血生臭い異臭が立ち込めており吐き気を催す。それに、さきほど緑のゴツゴツしたやつを脳を手刀で突き刺したため、脳みそがグチャグチャとした固体のような液体のようなものがこぼれ出ている。

そして、世界にとってもつとも不釣合いで存在するはずのない地球外生命体を目という機関で捕らえ、それを自分で殺したという記憶を蓄積させる側頭葉に届いた瞬間、頭に激痛が走った。

地面にうずくまりながら2年前の空白の2ヶ月の間の記憶がフラッシュバックのように次々と失われた欠片を修復させ一つのものへと変貌する。

（全部……全部思い出した）

ただ、まだ分らない事が一つだけある。

なぜ、現代では当の昔に絶滅したはずの狼が存在し、その狼が二年前に見たものと似たような姿をしているのか。

本来、架空の世界にしか存在しないゴブリンという生き物が日本に存在し、それを狼同様二年前に見たことがあるような感覚がするのか。

もしかしたら、やつらは向こう《異世界》の世界の住人なのではないか。

自分の記憶の欠落に関係しているのだろうか。

そもそも、俺は何のために異世界に召喚されたのかを忘れていた。

今なら分かる。

それは、魔王という恐怖の対象を異世界の人々から排除する事だったはずだ。

記憶では確かに魔王は倒した。

しかし、その直後の記憶が酷く曖昧でなにかフィルターがかかったようにその記憶を思い出せてはくれない。

ただ、これだけは言える。

自分は失敗したんだ。

異世界を救うこともできず、そして日本も崩壊へと近づいていることを許している。

（俺は一体何のために向こう《異世界》に召喚されて魔王を倒すために努力したんだよ…）

「全部、無意味じゃねえか……」

その自分を責めるような小さな声は誰にも届くことなく、どこかに響くことも無かった。

2

彼はすぐに気持ちを切り替えこの世界を救うことを硬く心に誓った。

俺ただ一人で何ができるって？ それは当然の疑問だと思うが、それは簡単な話。

できるさ、この両目さえあれば……この両目のことは向こうのやつらの中でエリスとリリス姫しか知らない。好都合だ…。

そして、『とりあえず目の前のやつらの掃除からだな』、と心の中でつぶやいて俺はウルフの群れのほうへ歩み寄った。

そのことに気づいたのか群れのリーダー格のモンスターが俺を襲えと遠吠えで指示を出している。

そしてリーダー格のモンスターの口から炎の塊が吐かれた。

それとほぼ同時に手下の口からも同じもの《炎の塊》が吐き出さ

れる。

数はおよそ二桁を越える程度に及ぶがまったく持って足りない。

俺は2年前と同じように右目を閉じ、左目に魔力を籠める。

「無駄だ!!」

言葉を放った瞬間、彼の左目は漆黒の瞳に染まりすべてを飲み込むような、ただ純粹な黒色をしたと同時に、朱色の文様が瞳に浮かび上がるとともにやつらの炎の塊を消し去った。

二年間のブランクがあつたが問題なくこの左目は機能した。おそらく右目も正常に作動すると思う。

その後、左目の色は茶色に戻り、相手に捕らえられないような速さで背後に回り込み手刀で首を捕らえ引き裂く。

「怯^{おび}えても助けは来ないぞ!!」

「俺に会ったことを地獄で後悔するんだな」と、もうすでに聞こえてはいないだろうバラバラな狼に吐き捨て残りの人の体を食す殺戮動物の息の根を視界に写るすべてを止めた。

とりあえず、この東京にいるやつらは今日中に片付けなければ……。

それが終わるまで無事でいてくれよ……可憐!、暁!、…美希!。

そして五年。“俺は自殺を考えた”。

第十七話 始まりと終わりの通過点？（後書き）

そういえば、ノーパーソのブルースクリーンをみて文字を検索したらまさしく「UNMOUNTABLE | BOOT | VOLUME」がヒットした。

調べてみると、どうやらHDDに問題があるらしい。

詳しくはまた。

第十八話 何も残らなかった未来（前書き）

自分の説明の下手さと、トンでも設定が……。

誰か助けて——

なんか、矛盾が……。

手直しするのがつらい。

さきに謝ります。

本当にすいません

第十八話 何も残らなかった未来

▲

世界が絶望への階段を登り始めて五年。

その脅威は、全国の政府組織、ともに一般市民で構成されたチームが、それぞれのリーダーを筆頭にし魔物たちを狩っていた。

そのうちの一つの組織で俺はリーダーだった。

俺は、五年前の2013年、9月23日。

その日のうちに東京中心に発生したほとんどの魔物をすべて殺した。他県や、他国に逃げた魔物は後回しだった。

当然、そのシーンを幾人もの人間に見られたが、あるものは俺を尊敬し、俺の下へとついた者、あるものは、警察などというまったく機能のしない機関に助けを求めるもの。あるものは、自分たちでチームを結成し束ねるものたち。

その三つに代替的に分かれた。

そして俺は、暁、美希を連れながら全国を回りながら徐々に仲間を増やした。

当然、俺より年上や年下。複雑な家庭環境を持ったやつら。

様々の人間が俺をリーダーの座から引きずり落とそうとしてきた。

その理由はこうだ。

『お前は不思議が多すぎる。なぜ突如出現したやつら《まもの》を簡単に殺せていたのか、なぜ人間離れした体を保持しているのか、お前らはただの学生なはずだ』

いろんな反感があつた。

そのたび俺はそういうやつ等をチームから除外した。

そんなやつらがいたらチーム内の統制が乱れるだけなのだから。

当然、俺のチームを抜けていったやつらは一週間も持たずに壊滅をした。碌に戦闘もできない。指揮も取れない。そんなチームは壊滅を記すだけだ。

そして残った残党がもう一度、俺達のチームに入れてほしいと志願してきた。

俺はなおもそいつ等を蹴った。

一度裏切ったやつがこのこと戻ってきたところで、また裏切るのが落ちだ。

もちろん、そういうやつらだけではなかった。

俺に直接、自分の裏切りを償うように働いてくれたもの。いまだはそいつは俺の組織のかなり上層部に位置している。

（実に優秀なやつだよ。あいつは）

そして、俺は日本一の組織のリーダーとして成長した。

そして世界に進出するまでになり、全世界に蔓延した魔物をすべてを共同戦線で狩りだしてから五年。

2018年、10月13日。

暁、美希がともに眠る墓の前で、夕日と海が見渡せるこの場所で今までの人生を振り返っていた。

俺が不甲斐無いせいで可憐を死なせ、油断していたとはいえ二人を死なせてしまった。

守ると誓ったのに、守り通すことはできなかった。

場所はもう言ってもわからない所だ。ただ日本であることには違いないことは確かだ。

崩壊した世界全体の技術はすべて廃れた。それと同時に、過去の失われた科学技術を継続させようと復旧作業が現在進行形でなお行われている。

だが関係ない。俺にはもう生きる意味は“無い”。

「もう疲れたんだ……………いいよな？ 世界は救ったんだ。目的は終えたんだ。これが、俺の、人生だったんだ」

五年という短い月日ですんだのは、魔物たちを初日でほとんど東

京内で倒せたことが吉となったのだろう。その他の魔物は他県や他国で数を増やした。

それらを世界でつぶすのに意外と時間はかからなかった。

そうして、暁、美希がともに眠る墓で、静かに手刀で首を切る自殺を図ろうとしたとき、一人の――、“日本に存在する者はすべて殺した”はずの、“魔力を持った”気配が後ろに現れた。

できるだけ声を押し殺し、振り返ることはせずに、冷たく相手を射抜くように声を絞った。

「……誰だ？」

「……初めまして、紅鷹」

こいつは一体何者だ？ なぜ俺の名前を知っている？ なぜ体内に魔力を保持している？ そんな疑問が浮き上がる。

少なくとも俺は魔力の気配に対して敏感でそれらの特徴を覚えてられるので知っている魔力ならば誰かは判断できる。しかし、今感じられている魔力の気配には一度もあつたことは無いはずなのに。

再度、疑問を投げかける。

「誰だと聞いている？ 答えなければ殺す」

「怖い怖い、なーに急かさなくても教えるよー」

そしてやつはいったんだ。

俺に。

重要なことを。

「——“君を”、向こう《異世界》に召喚するように細工をした人物は“私”だよ」

まるで他人事みたいに、自分はいくまで関わっただけとも取れる言い方だった。

俺を、“召喚”するように促したのはわたし。当然、紅鷹は混乱を起こす。

（どういうことだ！？）

召喚はランダムだと、少なくとも紅鷹はリリスにそう聞かされていた。

（リリスが嘘を付いていた？　もしくは、真実は知らなかったのか？）

混乱している紅鷹を落ち着かせようと、さらにそいつは言った。

「えーと、混乱しているとこ悪いけど、このことを伝えてくれて言ってきた人物がいるんだ」

「誰だ！？」

もはや即答だった。当然だ。悪意ある行動がそれを起こしたのな

ら暴動ものだ。

今となつてはそれをしても無意味に近いし、異世界に渡るすべも無い。

紅鷹の反応にに動揺しながらもゆつくりとしゃべってくれた。

「たしか、エルフォード国の騎士、セインだよ」

（なに？ エルフォード国？ セイン？）

エリスを殺して、俺を――。

耳から入ってきた情報によつて、脳が活性化する。いや、何かを必死で探し回っているような感覚。

（っ！？ 思い出したぞ）

そうだ、俺はセインに気絶させられた跡にこつち《日本》に強制的に戻ってきていた。

あいつが？ 敵？ この際、どうやったかは気にはならなかった。

じゃあなぜそいつが五年たった今、そんなことを伝えにくる？

その疑問を解消してくれるように目の前の人物はさらに言葉を続けた。

「でも、その人は確か、『獄閻寺紅鷹にこのことを話すとき決してこの言葉を言わないと、やつは勘違いを起こす。だから伝えろ。い

まあ前に話しかけている俺は、エルフォード国の騎士セインであつて、そうではない魔王の手下NO1だ。

そして、あの場にいたエリスを殺したのは私ではなく本物のセインだ。やつらは、エルフォード国は、はじめからお前をコマにし、殺す予定だったが、俺がセインの記憶を一時的に書き換えたのだ。遠隔操作でな。

どうしてそんなことが必要なのかつて？ それはお前にすべてを観測してもらつたためだ。お前は、いや“俺の知っているお前は”すでに一度、今お前にこのことを話している人物《時の巫女》に“時間を逆行する魔法”を教えてもらい、遡つたが“失敗している”。いや、リリスを魔王との決戦のときに救うこと自体は成功したが、その後に、別の死に方をした。そして、本来魔王との決戦時、お前は気絶している最中に死ぬ。

そして、“お前は”どうしても変えられない未来に希望を失う。だが“お前は”思つたんだ、もしかしたら別の過程を進んだ俺が成功への道を切り開いてくれるのではないか。だから本来死ぬ筈であつたお前を生かすことにしたんだ。しかし、そうするためには同じ人間は同じ世界に二人存在できない。それは記憶の中のお前が重大なパラドックスを起こそうとしたからだ。二人が同じ空間にいて鉢合わせるといふことがな。

だからどちらか一方を殺す必要があつた。それを未来のお前は、俺の知っている“お前は”笑顔でよろしくと頼んできたよ。だから俺は、未来の“お前が”魔王との決戦時に“お前を”割り込ませずに俺の手で殺した。

そうして新たな可能性を作つた。そして、お前が“生きる”こと

によつて、お前の記憶の中のお前が生きる世界になるんだ。

わかりづらいたろうから少し、仮定を入れさせてもらつよ。

本来、この世界とは別の未来があつた世界を？と仮定するよ。その世界で何らかのことがあつたんだ。それを回避するために時の巫女は過去にとんだ。

この事象で大きく未来が変わつたはずなんだ。そして、変わった世界を？として過去にとんだ時の巫女がなぜかは知らないが、何らかの方法で、？のお前と接触し、お前のDNAを採取していたんだ。

それを、まだ何も知らない時の巫女に何らかの方法で、君のDNAを受け渡した。本来、時を逆行する魔法は一人の魔力を使つても全然足りないはずの物なのだけど、それを時の巫女は一人で行うことができた。それはお前も同様にな。

しかし、“生死は不明”。もし万が一死んでいるのだとしたら、正確に彼女の死ぬ前の時間、つまり過去に飛んできた瞬間に捕まえるんだ。しかし、君のいる世界は？に値する場所なんだ。

時の巫女が避けようとした未来を？、記憶の中の君がどうしても変えることができなかった世界を？、そして、？の記憶の中の君によつて変えた世界が？、お前がいるところだ。

本来なら、お前の？の世界からでも、巫女の行動を阻止すれば？にいけるんだが、その前にでも疑問に思うことがあるだろう？

お前が殺されるんだつたらなぜお前は死なないのかつて。それは簡単だ。時間は常に未来に流れているわけではない。生きているお

前があつてこそ俺は、俺の知っている“お前を”、セインを装って生かすことができたんだ。それは、お前らが知らない時の中で繰り返し行われたことで、成った結果だ。

多分、お前がこの話を聞いて時間を逆行するはずだ。それによって、俺に助けを求める。俺にだ、魔王の手下NO1の俺に。俺はどこの世界、どこの平行世界、どこの世界線の記憶だろうと共有できる。だから、お前が俺を頼るのは必然。すでにそれは確定している。しかし、あくまでお前の主観の範囲でだ。

時間は循環しているのだ。お前を中心として。

まとめようか——」

そしてまるで目の前のやつも、セインを名乗る魔王の手下も同時に話を止める。

「『要するに、——お前が一度死ぬのは確定した未来であつて、それを経験したお前が世界を変えることができる』」

それ以上は必要なかった。

俺には、“失敗した俺の記憶がある”。多分、いやそれはセイン（偽）が俺に記憶を何らかの方法で植え付けたのであろう。

だから、簡単とまではいかないが理解するのに時間は余りかからなかった。

つまり、誰かに、“変えられた世界”に俺達はいるということになる。

記憶の中の俺が目の中のやつに時間を逆行する魔法を教えてもらったが干渉した世界はすでに未来は確定していて変えることはでき

ない。それは“記憶の中の俺”が証明をしてしまった。

何度繰り返してもエリスの死は変わらない。因果がそれを了承してしまっている。

そしてまた、俺が時間逆行をするのも確定している。

なら、俺は世界を変えるのを止めなければならない。

いや、そうしたら俺はどうなる？

消える？ それとも多世界解釈なのか？

だとしたら、この世界《異世界》が救われる可能性も無くなるのか？

それはだめだ。少なくともそうでなくては異世界の人々が報われない。

ならどうすればいい。

俺だけがまだ未知の世界に飛ぶにはどうすれば。

今は、迷っている時間は無い。絶望に浸っている時間は無い。

過去に飛ぶんだ。それが今の最善の選択なのだから。

だから迷わず俺は言ったんだ。

「過去への飛び方を教えろ」

第十九話 タイムパラドックスは起きない（前書き）

同時ダブル投稿をするぞー！

おう！

第十九話 タイムパラドックスは起きない

2011年、6月29日、午後4時30分

俺はセイン——、いや、セイン（偽）に過去に戻ったとしても異世界への通行手段が無ければいくことはできない。

なら、俺が以前に、異世界に行ったとき同様、あの穴に入ればいいのだ。そうセイン（偽）に教えられた。（これは失敗した記憶の中での話でもあることだ）

今なら、この時代ならば、可憐を、暁や美希を助けることができるかもしれない。

だけどそれはもう一度試されたいことで、俺の“記憶の中の俺が”可憐に護符を渡したところで、可憐の死は変わらなかった。

俺の世界では、記憶の中とは違って、普通の魔物に殺されるのではなく、記憶の中の俺が渡した護符に宿る俺の魔力をたどって、魔王の手下NO2が殺しに来ていた。

つまり、記憶の中の俺のせいで、余計に“形の残らないくらいな殺され方をした”。

多分、別の方法でも無理ではないかと考えてしまふ。過程は変わるが結果は変わらない。

そうは思いたくない。

だが、そうおもって期待していても、突き落とされると思うと思
考を断念してしまう。

だから、今を変えても無理なんだと自身に言い聞かせる。

でも、この世界での可憐はどうなる？ そう考えると、躊躇して
しまう。本当にこのまま何もせずに異世界にいくのか？ このまま、
二ヶ月間の失踪をした俺の理由を話さずに可憐を悲しませるのか？

（やめろ、やめてくれ！）

考えるな！。

そう何度も自分の頭に言い聞かせる。

必死になって考えているうちに時間はやってきた。

同日、7時19分

俺はこの住宅街で、あの穴に落ちる。

俺が落ちる穴の付近の家の瓦の上で待つ。

俺が落ちるであろう場所を監視していると、そばに走っている“
俺”が現れる。

そして現れた俺に対して、あの穴が出現する。どうやら、なにか
俺のときとは違った様子は見受けられない。

そして、その俺は穴に、黒い触手なようなものの絡めとられ、穴へと吸い込まれていった。

（いまだ！！）

決して、タイムパラドックスは起こさぬように。

しっかりと魔法で気配を遮断。その上から気での気配遮断も怠らない。

それらを行ってから、目の前の穴へと飛び込んだ。

刹那、視界が、空間が、時間が、“俺”自身が、“世界に置いてかれた”気がした。

何も無い空間で一人。

色という概念がない世界に一人。

何も見えない空間で一人。

何もかもに置いてかれた世界で一人。

時間の存在を無くした空間で一人。

もはや自分が誰で、どのように生きてきたか、どのようにしてここに来たのかを忘れそうになっていた。

「ああああっ」

視界が霞む。

もう、何も見えない。

感じない。

自分という存在が消えていく。

（俺には…やることが…あるんだ！）

「ことわり理なんか、越えてやる！」

言葉を放った瞬間、世界に色が戻る。

何も無かった世界に暗闇が存在する。時間の概念が復活する。

意識が遠ざかっていくのを持ちこたえ暗闇のトンネルを抜ける。

自分に意識を保つように言い聞かせ、何とか意識を保ち続ける。

そうして、わずかな光が、この暗闇という暗黒しかない世界から
少しだけ。

それが少しずつ大きく。

視界一杯に光が溢れ、輝いていく。

（……………来る！！）

おそらく現れるであろう衝撃に身構える。

ズドン！　とはいかなかったが、その代わり自分で覆っていた魔法の障壁に衝撃が襲ってきた。

その衝撃は直接は伝わってくることはなかったが、障壁には多少のダメージが加わる。

それに視界いっぱい光が溢れ出している。

そこには、たった一週間だったが、とても懐かしく感慨深い思いがこみ上げてきた。

そんな感情に浸りそうになっている時に気づいた。

（ここは、召喚の場だ。すでに“俺”とリリスの会話は始まっている）

タイムパラドックスを避けるため、細心の注意を払い出入り口から外にでた。

その後も城内では注意は怠らず、一番身の隠すのに適した場所の一つ。

「もし、本当に俺が二回目だとしたら一回目の俺がいる可能性はあったが、召喚の場には俺と最初に召喚された俺しかいなかった。つまり、親殺しのようなパラドックスは起きないということか」

このことで、少なくとも親殺しのパラドックスは起きないことがわかった。

もしかして、俺の、記憶の中の俺がいるかもしれない思ったが、いなかった。

存在するのは、俺と、召喚されたおれだけ。

つまり、記憶の中の俺とは世界が違うのではないか。

不幸な未来を変えるために、本来死ぬはずだった俺を生かし、未来を変えた。それはもともとから確定していた。

すでに、世界は変わっている。

なら今俺がいるのは、世界を線として考えると、？から分岐した？の世界で、そこから未来から飛んできた巫女に会えるのか？

そもそも、時間跳躍をしてどのように世界が変わるのが分からない。

過去を変えたら、過去から未来すべてが再構築されその世界ではその世界一本だけの世界なのか、過去を変えた未来から、未来を変えた本人を残して分岐が起きるか。

その場合、過去にとんだ本人は、もう分岐したほうの世界に乗るから同時に二人存在する。

それは大丈夫なのか。

今のところ、俺の状況は後者だ。しかし、多分だが、記憶の中の俺自身が、死ぬはずであった俺と鉢合わせたことで死ぬという結末

に至ったのではないかと思っている。

それは、記憶の中の俺が証明していることと同じ。しかし、それはあくまでこの、未来でエリスが死に、日本が、地球が壊滅に向かう世界でのことである。

だがしかし、この世界に到達するために過去に飛んだ巫女の行動を遮ったとしたら、世界は変わる前に戻るのか？ それとも、遮ることに成功しても、その後にはまた未来から来た俺という矛盾を生じさせないために俺の召喚はされる因果が作られているのか。

それか、おれ自身が世界の理からはずれるのか。

ただ、わかってるさ。

もし、巫女の行動を遮り万が一世界がもとの世界に再構築されるのだったら、俺は死んでいる可能性が高い。そうでなくては、見ず知らずの巫女さんにDNAなど渡すはずもない。

この俺が向こうの《世界が変わる前》世界に行くには、俺という存在が理から外れなければならない。

それをするにはどうすればいいか。

それが分からない。

最後に、なぜセイン（偽）には、巫女が変えたらしき世界の未来の世界だけを認識できないのか。

すくなくともエリスが死ぬということを記憶の中の俺と、セイン（偽）がそれを見たことによって確定した未来なはずだ。？の世界にしる？にしる。

つまり、未来歩行から来る人間がいる時点で未来は確定してしまっていると考えるべきだ。

だから、誰も未来から来ていないし、何かが遭ったらしき世界から逃げてきた巫女は未来を見ていないから確定はしていない。

いくらでも未来を変えることができるのではないか。

だが、引つかかる。

なぜ、セイン（偽）はその巫女が変える前の世界を認識できていないのか。

あきらかにおかしい。奴は言っていた。自分がどこの可能性世界線だろうとパラレルだろうと、存在を許されている世界全てを認識できると言っていたのに。

セイン（偽）が嘘をついているのか。

いや、そんなの何の得がある？

少なくとも奴は何も知らない。

ということは何かしらその世界ではあるはずだ。

それは、その世界に言ってみないと分からない。

とりあえずは試行錯誤を続けなければ。

しかし、現実を決してうまくいくのはほんの極僅か。

「会いに行くしかない。セイン（偽）に」

そして、迎えるあの時。

“運命は変わらなかった”。

第二十話 覆らないエリスの死と狂う心 ？？？共通（前書き）

同時ダブル投稿だぜ！

即席で書いたからちよつと……

シリアス&ちよいグロ&鬱

第二十話 覆らないエリスの死と狂う心 ？？？共通

一つ。

また一つ。

一つの命が消えた。

助けたいと思って、いろんな行動を起こした。

その期間の間は絶対にいくことの無かった場所。

その時間には絶対に訪れない場所。

いろいろ実行した。

しかし、また、彼女は死んだ。

今回の死因は、単なる日本で言う、通り魔だった。

普段の彼女なら絶対に反応できるはずなのに、普段の彼女なら逆に通り魔を組み伏せるはずなのに。

“その、時間になると必ず死ぬ”

血塗られた地面と、そこに横たわる彼女。

自然と、あの時の、首根から吹き出る血を思い出させる。

魔王を倒したからって浮かれてたあの瞬間を。

「……そんなの認めるか、俺は認めない！」

そして、繰り返す。

同じ時間を。

地獄の繰り返しを。

何度も。

また一つ、命のともし火が消えた。

その時間になる前までは、メラメラと燃え盛っていたはずの炎が、その、時間になると急速に勢いを無くし、静かに消え去る。

今回の死因は、エルフォード国と敵対している国のスパイだった。

たまたま、ある町で出会った人が、敵対国の人間で、紅鷹はそれにまったく気づかず見殺しの状態だった。

（何をやってるんだ俺は！！ 守るんじゃないのかよ！）

自分自身で誓った思いを、自分で踏みにじったことに怒りを露にした。

今度は守るといいながら、結局は守れない。

運命がそれを拒んでいるのだから。

一人の人間ごときが、逆らうことのできない運命。

「くそおおおおおおおおお！ 認めない！！ 俺は、諦めない！」

血まみれで地面に横たわる彼女をやさしく抱きしめながら言う。

「戻れ！」と。

そして繰り返す。

無限に近いループへと。

抜け道の無い世界へと。

そうだ、監禁しよう。

狂った紅鷹はついに、心の中の感情が変な方向を向いて、自分から離さないようにした。

自分はある程度、治療系統の魔法が使える。

以前、誰かに教えてもらったが、もう覚えていない。

その治療魔法で、心臓発作といった急なものでも対応できるので

はないかと思つたから。

だから、監禁するんだ。

そんな、狂つた紅鷹をみたエリスはおびえた様子で問う。

「……どうして？」

決まってるじゃないか、愛しているからだよ。

そして、ずっと自分から離れられないように、エリスの足を？いだ。

すると？いだ足から血が噴水のように噴出す。

耳を突き刺すような悲鳴が聞こえるが、自分に依存してくれる様子を描くと、また悲鳴が気持ちを高ぶらせる。

もっと、傷つけてあげるからね。

気づいた頃には、悲鳴は止み、静けさが襲ってきた。

そして、エリスを見ると、腕や足といった部位が無く、あるのは、頭と体のみで白目をむいた状態で気絶している。

どうしたの？ おきなよ。

しょうがないな、俺がおこしてあげるよ。

そして、触ったエリスの体は冷たかった。

(…え？ どうして？)

自然と壊れた頭で思考する。

でも、すぐに理由はわかってしまう。息のしていない体。体温が感じられない体。

生命の感じない体。なにより、目からあふれ出ている涙があらわす気持ち。

自分が殺した。

紅鷹は、冷水を頭からぶっ掛けられたように感じた。

(何をしているんだ俺は？)

守ると誓ったのに、誰にも傷つけさせないと言ったのに。

自分が傷つけて殺した。

自分が、エリスを殺した。

殺した。

「う、うあああああああああああああああああ！」

何十、何百、何千、何万、何億。

幾ら繰り返しても変わらない世界。

誰かの少しした行動には変化が見受けられる。

だがしかし、本当に変えたい事実が変わらない。

変えられない。

何度、いろんな行動を起こしても必ず起こる彼女の死。

「……………もういやだ…」

紅鷹はとつくに壊れている。

大切な人の死に耐えられずに、精神をすり減らし、もうほとんど感情がなくなってしまうかのように。

繰り返しの中でわかった事は、唯一つ。

“絶対にエリスは救えない”。

それだけだった。

第二十一話（前書き）

ストックが後一つ…

あああああ、夏休みに入ったら気を抜いて連載とまりそうだけど、
終わりまであと少し。

がんばるぞー！

それと、時間の表示をシユタゲ風に変えました。

ちなみに数字は、無限大ですよ？

第二十一話

∞ ∞ ∞ ∞ / ∞ ∞、 ∞ ∞ / ∞ ∞ : ∞ ∞ : ∞ ∞

ここはいつたいどこなのだろうか。

暗くて、寂しくて、悲しくなっても、音もない。時間の流れもない。

時間の流れ自体はあるのだけれど、時間跳躍と時間の巻き戻しのせいで時間の感覚が薄れている。

いや、完全に時間の概念を忘れ、超越してしまった。

だけど、もう嫌だ。

もう疲れた。

誰かこの呪縛から解放してくれ。

俺をループから助けてくれ。

俺にはもう、同じ死を見ているのは辛いんだ。

絶えられないんだ。まるで人形みたいに殺される時間がほぼ一定で、死ぬ。

自分は何をしていたんだ？

エリスを助ける為に目指していた世界なんてもうどうでも良くな
ってしまった。

ただ、目の前の死を回避することにしか、目が行かなかった。

もう嫌だ。

何もしたくない。

“時間を巻き戻す”のはもう、いやなんだ。

誰か、“俺を殺してくれ”。もう、疲れたんだよ……。

そう、紅鷹は思った。

そして、誰かが殺してくれるのを願った。

だけど本心ではわかっている、もう人類などとうに絶滅している
のだから。

だから聞こえてくるはずがないんだ。この孤独な人類という生物
全てが絶滅した世界で。

「俺が、お前を殺してやるよ」

誰だ？ 幻？ 幻聴？ ついに幻まで見るまでになったか、俺は
もう本当にだめかもしれない。ただ、それでもいい。すぎるしかな
いんだ。神頼みでも良いとさえ思うほどに紅鷹は狂っているのかも
しれない。

どうすればいい？ 教えてくれよ。答えが帰ってくるかわからない。だけど、聞いておきたい。

「俺が、お前のやるべきことを教えてやるよ」

どんなこと？ 俺のやるべきことって一体なんだったつけ。

「今すぐ過去に行け。日付は、日本時間で、2009年の6月辺りだ。その日に、未来から巫女が飛んでくる。但し、巫女の行動は変えるな。変えると重大なパロックスを生んで、お前が消滅する。だから、巫女が何らかの行動を起こし終わった後に、特別な方法で過去に飛ぶんだ。お前ならもうできるはずだぞ。お前はとくに理から外れているんだから。まあそれは、巫女の行動があつてのものだからな」

待ってくれ、その月辺りに巫女がいるのか？ 会えるのか？ あきらめていたのに。必死になって探しても見つからないで、何度同じ時間を繰り返し返したって変わらない世界で、どんな方法を使っても居場所がつかめなかったのに。

これは、必然だったのだろうか……。俺が、こうやって屍のようになるのを。

そして、この見知らぬ誰かが、俺に伝えにくるのが。

「魔力感知くらいできるだろ。後は自分でやりーや」

最後に一つだけ、お前は誰なんだ？ 本心からききたいことだった。ここはもうすでに普通の人間じゃはいることすらできない領域のはずなのに。

そいつは笑顔で言ったんだ。

いまでもその理由はわからないけれど。それを理解するには彼本人だけかもしれない。

「あえて言うなら、“おまえ自身だよ”」

見知らぬ誰かの言葉に促され、しばらく使っていなかった体を起こす。

骨がきしむ。筋肉が悲鳴を上げている。一体、どれくらいの時間、動かさなかったらここまで酷い状況になるかは人間にはわからないだろう。

ただ言える事は、ものすごい膨大な時間をすごしてきたとしか言いようが無い。

それは決して、普通の人間の寿命の何百倍にもなるだろう。

それでも、道しるべをもらった紅鷹には止まらない理由がある。

完全に忘れかけていた理由が今、しっかりと思い起こされている。

とりあえずは体を元に戻さないと。

「戻れ」

そう、聞こえない小さな声で呟くと、世界が、ビデオの巻き戻しのように逆再生され始めた。

フラッシュバックのように次々に風景が変わり、巻き戻る。自分が歩いてきた道を。

紅鷹の立ち位置も変わる。

そのとき発生するGに対して、紅鷹はまったく苦になっていなかった。

それを行う当初は、ものすごいGにへこたれていたのだが、何百回、何千回とするうちに、まるで単純作業をするみたいにできるようになっていたので、苦を感じなかったのである。

巻き戻しは、この時間の概念が廃れたこの世界から、2011年の6月あたり。その間で、6月あたりから8月の終わりをなんども繰り返して巻き戻っている。

それは、紅鷹がなんとも同じ時間を繰り返したことを意味し、それら全てを巻き戻しているのである。

そして、ゆつくりと、巻き戻しの速度が落ちていく。巻き戻しが終わるとそこは2011年の6月辺りで、場所は紅鷹が召喚された場所であった。

そこでは、前にも見たように、すでに最初の紅鷹とリリース姫の会話は始まっている。

しかし、そんなことはどうでもいい。

今は、ここから普通の時間逆行を行うのだ。2009年へと。

そうして、なれた動作で体ごと、時間を飛び越える。

巻き戻すのではなく、過去に飛ぶ。

「飛べ」

たった二つの言葉で、紅鷹の言葉で、体を包み、不思議な魔力のような物体が絡みつく。

そして、何度も行い、もう体の一部みたいに感じる、G。

グググ、と横に引つ張られるようなものを感じながら、体が、時間を超えているのを感じている。

(2009年か……そこに巫女がいる)

紅鷹は、召喚の場で、時間を飛び越えた。

第二十一話（後書き）

思った。

これってトリプル投稿じゃないですか？

第二十二話 誤算と気づかぬ爆弾（前書き）

ストックがきれた……。

第二十二話 誤算と気づかぬ爆弾

2009/06、28/11:34:59

時間を飛んで、たどり着いた場所は召喚の場である。そんなのは当たり前だ。誰だって理解できる話だが。移動したのは時間なのだから。といっても、自転と公転をしている為に、もとの場所に帰るのにはGがかかるのだ。(この星って地球と同じなの？ といった質問が飛んできそうだが他にどうしろと？ といったくなるがそんなのはどうでもいい)

なぜなら、目の前にいる人物二人は、紅鷹もよく知っている二人だった為にGのことは気にはならなかった。

一人は、エルフォード国の姫君リリス。

紅鷹を、このエルフォードに直接召喚魔法を用いて召喚した本人。

そして、もう一人、それは、紅鷹を召喚するようになり引きした、“時の巫女”。

紅鷹に、時間を飛び越える魔法を教えた者。

(っ!?)

一瞬、驚愕にそまった。

俺のさがし求めていた人物がそこにいるのだから。なぜ？ 疑問があがるがそれよりも違和感が強烈に浮き上がる。

だが、すぐに違和感には気づいた。

彼女は、“この時代の巫女だ”。

紅鷹の探している、“未来から来た巫女”ではない。もし、彼女が未来から来た巫女だというなら、膨大な魔力を使って、精神を疲労させ、魔力の乱れが生じるはずだがそれが感じられない。

だが、この現場は一体何なのか？ 疑問が、不安感が、心拍数の増幅がとまらない。

もしかしたら、今この場で、俺のDNAを受け渡しているのでは？

そして、すでに目的を終えた巫女が、事切れているのではないか？

すぐさま気づかれずに召喚の場から外に出て、探知魔法を展開する。

それを凡そ、全国に広げる。数十秒しか及ばない魔法だがしっかり機能はしている。

しかし、見つからない。

「つち！」

思わず悪態をつく。

二つの意味で迂闊だった。

一つは、先のことしか見えずに外に出てしまい、目の前の、自分のDNAが受け渡されているのかを確認しなかったことについて。

もう一つは、もしすでに事切れているのなら、この世界で言う魔力の乱れが生じるはずなのだ。

それが、どこの国や場所にも無い。

それはつまり、すでに巫女はある程度の行動を起こして、尚且つ死んではいな状況。

これは困る状況だ。

すでに巫女が死んでいればある程度の魔力の乱れを見つけ、場所を把握し、時間を飛び越えてすぐにも会うことができる。

しかし、リリースと巫女の現場を見ていない限り、まだ、未来の巫女が来ているかの確証がもてずに、解を導き出せない。二度手間になってしまった。

（巻き戻すか……本当はもうあまり使いたくは無いのだが）

そうして、この時代の入りからやり直す為に紅鷹は呟く。

「戻れ」と。

2009/06、28/11:34:59

先ほどと同じ状況で二人。

リリスと巫女がなにやら難しい話をしている様子が目に映る。

だが、実際に聞きたい事が一切聞こえてはこない。

（魔法を使っしかないか…）

存在がばれる可能性を考えたが、それはそのときで何とか成ると思ひ、発動する。

『聴力強化』

キーン、と少し耳鳴りがしたがすぐにそれは収まり、周りの小さな音が、二人の会話が聞こえてきた。

「これは？」

リリスの声が聞こえた。そしてリリスに答えるように巫女の声が聞こえた。

「私も良くはわからないの。ただ、これを渡してきた人はものすごい剣幕でお願いしてきたのよー」

『これを生贄として勇者召喚魔法を発動して』と。

「でもなぜその人はこの血肉を？」

「わからない……此処に血肉があるということは少なくともこの血肉の本体の人は死んでいるはずだ。だが、召喚魔法で行ったとしても生き返るなんてことは起きない」

「じゃあなぜ、こんなものを？」

わからない。そう、巫女は首を横に振った。

（そういうことか）

紅鷹の中では解はでた。

すでに、未来から来た巫女が現時点での巫女に、俺の血肉を渡している。

だが、さっきやった探索魔法ではなにも引つかからなかった。魔力の乱れも無い。

つまり、すでに死後から数日がたっている。

「すでに死んでるのか……」

会いに行くしかない。

過去に飛んで死ぬ前の巫女に。

そして、紅鷹は少し時間に余裕を持つ為、一週間以上時を飛んだ。

ただ、ここで紅鷹は大きな誤算をしていた。

現代の巫女が、未来の巫女から紅鷹の血肉を受け取ったのは前日の27日なのだから。

実質的に、未来から来た巫女は、死んではない。消失したの
あることに。

「これを受け取ったのは確かに昨日なのですか？」

「そうよ。だから、私急いで報告しに来たのよ。絶対なにかを知っ
てそうな顔で、その顔はフードでよくは見えなかったけど、ただ、
絶望に近い色をしていたことはわかった」

「…少し考えさせてください」

リリスは迷う。

“この血肉を使うべきか、否か”。

そして、“勇者召喚を促したのは巫女だけではないこと”を。

第二十三話（前書き）

時間がなくて書けない…

第二十三話

2009/06、21/11:34:59

紅鷹は無事、自身のDNAが受け渡されるのを見た後、町外れの場所で時間を飛び越えた。

そこでは幸い、誰かがいることは無かったが、これから来るであろう未来の巫女をすぐにでも分かるように世界を監視しなければならぬので、もっとも探すのが効率がよく、魔力の素が溢れている場所であれば集中を乱すことなくできるはずなので、紅鷹は、もっとも魔力が溢れていて、この世界に満ちる魔力が出るところで探知魔法を常時発動することにした。

その条件に適した場所を探すのは容易だったが、探知魔法だけに集中しすぎるとさすがに、理からはずれていても元は人間なので腹は空く。

そのため、携帯食を買い集めるほうがよっぽど手間がかかった。

(この世界にカロリーメイトなんてうまい携帯食はないからな…)

それから、一週間紅鷹は探知魔法を続けることにした。

2009/06、26/11:34:59

そして、探知魔法を発動してから五日がたった。

その日の前日から妙な違和感を感じていた。

紅鷹が時間を飛ぶ前、確かにDNAの受け渡しをしていたのは28日だったので、遅くてもそろそろだと思っただが、今日もまだ探知魔法には引つかからない。

最悪、巫女自身で過去の自分に直接渡すのはリスクがおきすぎる。

万が一、タイムパラドックスでもおきれば、紅鷹自身の存在が消えかねない。

それだけは、やめてほしいと少しだけ思った。

そしてなにより、自分の推測が間違っているのではないかと思うと、手汗が止まらなかった。

2009/06、27/01:58:32

時間的に考えてそろそろ現れないとタイムパラドックスが起きないか紅鷹はあせっていた。

自分の推測が間違っていたのはもうどうでもいい。

ただ、28日のあの日に、未来の巫女がこの時代の巫女に渡さないと、重大なパラドックスが起きるのではないかと思っているからである。

だが、ここで思いついた。

巫女から教えてもらった時間を飛び越える魔法は、場所は移動できない。

移動するのは時間だけであって、場所は変わらない。

ならば、未来の巫女がいる可能性の高い場所に重点を置けばよりこつりつてきにいくのではないかと思った。

なので、記憶の中の俺と、俺との記憶を照らし合わせ、できるだけでも良いから情報を割り出す。

少なくとも、未来から来る巫女の世界は戦争が起きたのではないかと思われる。

その戦争は人と人の戦争だけとは限らないと思う。

理由は、そうでなくては、勇者召喚をしてわざわざ俺を魔王討伐へと向けさせる意図が分からない。

逆に、魔物の繁殖によって、人間側が対処しきれずに国がつぶれてしまうのではないかと察した巫女が過去へと飛んだのではないか、それが紅鷹の推測だ。

しかし、自身はあまり無い。

すでに、巫女が来る時間を数日はずしてしまったので、自分の推測に自身が持てないのである。

そんなことを考えているうちに、探知魔法に膨大な魔力の乱れが

引つかかった。

思わず歓喜に溢れる。

「来た！！」

すぐさま移動術式を展開して、察知した魔力の乱れえと行こうとするが、唐突に“あいつ”の言葉を思い出した。

『―お前はとづくに理から外れているんだから。まあそれは、“巫女の行動があつてのもの”だからな』

巫女の行動を万が一阻害してパラドックスを犯すと、俺が消える。

身震いがした。

ほんの少し前は、軽く考えていたことだが、あいつの言葉をよく思い出してみると、パラドックスを犯すと、自分の全てが否定されることがわかった。

もし、巫女が？の世界の俺のDNAをこの時代の巫女に届けられなかったら。

俺は、この世界に勇者として召喚されることは無く、リリースやエリス。

旅の中で知り合った人々との関わりは発生せず、記憶をなくして日本に戻るわけでもなく、この世界で習得した魔法が使えるわけも無く、2013年に、魔物の群れが襲ってきてても魔力の持たない俺が魔物と戦えることも無く、死ぬ。

日本は救えず、魔王討伐も行わない世界。

そして、本来なら、それが？の世界なのではないか。

そう思えてきた。

？の世界では、俺という異世界人が召喚される事無く魔物の繁殖が増え、魔王の時代になっていたのではないか。

ただ、リリスが言っていたように、魔王は複数の国内最強の精鋭を連れて行けばなんとか倒せる程度で問題なかったはずだが、それよりも紅鷹が気になるのは、魔王の手下のNO.2のことだ。

NO.1のセインは多分、性格的に考えて面白いことが単純に好きそうなので、人間の領地とかを奪うといった戦争に加担しそうにない。

問題のNO.2は、俺が倒した。

倒した場所は日本のあの日、2013年の記憶を取り戻した日だ。

NO.2は、紅鷹の妹を殺した張本人でもある。

そんな奴を生かしておくわけがない紅鷹も戦っているときに実力は気づいていた。

NO.2とNO.1の二人は、魔王と言われていた奴より遥かに強い。

なので、魔王が討伐された後、NO.2が変わりに指揮を行っていたに違いないと思われる。知恵も回る奴だ。

その先は、考えずとも分かっってしまう。

仮にこの推測が間違っていればそれはそれで良い。

しかし、もし推測どおりだったらどう世界を救うべきかが浮かばない。

だから、どうかそんなことにはならないで欲しいと紅鷹は心に留めていた。

そのため、決して巫女の行動は阻害せずに後をつけることにした。

第二十四話（前書き）

すいません、今回は私の都合によって明日から、三泊四日の合宿にいくことになっておりますので投稿は25日まで無いと思われます。携帯で執筆すればいい、と思う方がいるかもしれませんが、私はあまり携帯で執筆するのができません。

というより、うまく文章が浮かびません。

大変申し訳ございません。

なので、短いですが投稿させていただきます。

第二十四話

未来から来た巫女の付近にすぐさま移動術式を展開し、移動する。

それは、召喚の場に出る時も行っていた、気配遮断も情りはしない。

移動した場所は、どこかの国の城内だった。

そこに部屋には特に変わった物は置かれてはおらず、物置部屋として使われているように感じる。

ただ、ここに巫女が現れたということは、この場所に住まわして貰っていたのではないかと想像がつく。

どうやら、巫女は周りを警戒しながらのこり僅かな魔力を使って身体強化を使った。

身体強化はそれなりに難しい魔法なのに、今の巫女は魔力ともに精神的疲労が見えるがそれでも彼女は身体強化を行っている。

（すごい精神力だ……）

思わず絶賛してしまった。

彼女は、それだけ勇者召喚をやり遂げようと思う気持ちがあるからなのか、とてもじゃないが彼女のような精神力は紅鷹には無い。

しかし、彼女の足取りは重たい。

やはり、魔力の枯渇が原因だろう。

だが、彼女がDNAを届ける前に死ぬことは無いと思われる。

そうであった場合、28日に言っていた巫女の言葉が否定されることになる。よく思い返してみると現代の巫女が、『絶対なにかを知ってそうな顔で、その顔はフードでよくは見えなかったけど、ただ、絶望に近い色をしていたことはわかった』と言っていた。

多分この私に来た人物は、未来の巫女なのだろう。

しっかりとパラドックス対策はしている。フードと、あまりにも不確定要素の強いものだが、それはしかたないとおもう。

だから、この時代の巫女に渡せることは確定している。

しかし、その後は、セイン（偽）が言っていたように生死が不明だ。

万が一、すぐに死んでもらっては困る。

なので、自分の魔力を還元する準備を整え始めた紅鷹だが、すでに未来巫女と現代巫女の接触は行われている。

（そっちはまだいい。すぐにも巫女の魔力を還元できるように急がなければ）

魔力の還元なんてものはそう簡単にはうまくいかない。

本来、魔力なんてものは人間の体に流れている血液のようなものと同一だ。

それぞれに独立した本人しか持ち得ない血液があるように、独立した魔力をもつのだ。

そのため、自分の魔力を一度、世界に溢れる魔素に戻してから巫女に合わせた魔力を作り直すのだ。

そのための巫女の魔力はしっかりと把握している為問題ない。

問題なのは時間がかかることだ。

この世界で巫女がいつ死ぬかは分かってはいない。

そのためにも何時でも還元が行えるように準備をしなければいけない。

第二十五話 時間を跨ぐ二人の出会い（前書き）

すいません。

今回も短いです。

でも理由があります。

次回からは未来巫女の話に移るんで。

どうして、過去に来たのかをやらうと思っています。

第二十五話 時間を跨ぐ二人の出会い

紅鷹はまだ、聴力強化を行なったままだったので現代巫女と、フードをかぶり、姿を見られないようにした未来巫女との会話が聞こえていた。

未来巫女は酷く疲れ、視界が朦朧とした中、過去の自分に話しかけた。

しかし、未来巫女などの思いなど知らない現代の巫女は当然不審がる。

彼女の立場上、誰かに命を狙われることが過去に多々あったため、いきなり声をかけてきた人物を疑わないはずが無い。

そんなことは分かっている未来巫女は話を続ける。

「これで、これを生贄として勇者召喚魔法を発動して欲しい。理由は話せない。ただ、これをリリスに渡して。お願い」

話終えた彼女は種を返すようにさらっと消えてしまった。

そんな彼女を引きとめようとするが、もう遅かった。

「なんなのよ、一体…」

残る彼女には疑問しかない。

そして、動き出す紅鷹。

現代巫女から遠ざかった未来巫女は残り僅かな魔力で、移動する時間に換算すると、ほんの数十分だが、彼女にとってはきっと最期のような時間なのだろう。

彼女は悟っている。

自分が死ぬことを。

本来は、過去に飛ぶという行為は一度きりが精一杯なのだ、特別なのは紅鷹だけであって、巫女は違う。

死ぬことが前提で過去に飛んだのだ。

だから、悔いは無い顔をしている。

もう、場所は人気が無く、まるでどこかの無人島に似た沙漠のような場所。

（ここで、一人骨を埋めるのもちよつといいかな）

なんて、未来巫女のおもいが頭に出てくる。

どて、と彼女は砂漠の中に倒れこんだ。

「どうかお願い。世界を“救って”。“あなた”がそうできることを唯、願っている。これで終わる――」

そう、人生の幕を下ろそうとする巫女のそばに行き、残り少ない

灯火に照らす太陽をさえぎり言う。

少しだけ、瞼を開ける。一度は閉じた瞼を。

此処には私一人なのに、どうして人がいるのだろうと考えてのにとだろつ。

目先には、未来を変えて欲しくて、ゆだねた血肉の本人がいる。

「……………どうしてあなたが？」

「そんなの決まってる。終わらせない。……まだ、やることは残っているぞ」

紅鷹は、巫女を生かすため、エリスを救うため、世界を救うことにしか目がいつていな為気づいてはいない。

巫女は目を開けた直後に見た右手が消えかかっていることにしつかりと気がついた。

そしてその消えかかっている人間が、巫女自身が世界を変える為に救って欲しいと願った本人だった。

第二十六話 始まりと終わりの通過点？（前書き）

巫女視点めんどくせえ！

この話、壊れたマイノートこの作品を書き始めたところから、てか最初に書いた話なのに、そのTXTが……、なんとか、覚えているものを呼び起こして書き直しました。

なので、クオリティーが落ちています。

もとはもっと、何ヶ月もかけて書いておいたのに。

とほほ…。

第二十六話 始まりと終わりの通過点？

2013/09、23/20:48:31

目の前に広がる光景はともじやないが、信じられるものではなかった。

周りの建物は全て崩壊し、特に、此処からでも見えるあの赤い建物は、すごい大きいが、それは倒れてしまつて、余計に被害を大きくし、人々は、それを行なつた人物から恐怖の為逃げ惑っている。

ある、一人は、目の前の恐怖から唯ひたすらに逃げるもの。

ある、一人は、現実から目をそむけて、ただ呆然と、破壊される光景を眺める者。

ある、一人は、一種の錯乱状態にでもなつたのか、それとも自分が何かのヒーローにでもなつたのか、近くにあつた鉄で、現れた魔物たちに反抗しようとして、ゴブリンから放たれた棍棒で腕がへし折れ、泣き叫ぶおろかな人たち。

ある、一人は、いまいる“一番強い存在と戦う人物”。

彼は、一体何者なのだろうか？ この世界に魔法という概念がないのはすぐに分かった。

この世界には魔力のもととなる存在が無いわけではないが、それ自体があまりにも薄く感知がぎりぎりであるほどにしかない。

だから、発見されてはいないだろうと思われる為、戦うすが素手か、何かの武器しかないと思った。

しかし、彼は近くに鉄らしきものがあるというのに素手でメギドナに挑んだ。

メギドナは、魔王の手下の中でもNO.3だ。

彼と対等に対峙するには、魔法を扱えることは大前提だ。

しかし、彼に魔力は少しも感じられはしない。

それに、体もそこまで大きくは無い。

ある程度の筋肉は付いているだろうと思うが、とてもじゃないが、メギドナの拳を受け流せるような力があるとは思えない。

そして、なにより、身体強化を使っているメギドナになぜ、同じ速度で追いつける？

彼は、一体何者なんだ？

紅鷹は、すごく冷静だった。

目の前の奴が、少なくともここにいるやつらで一番強いことが分かった。

近くにいる、緑の物体のほうか、一見強そうに見えるが、目の前の奴から感じる殺気と比べると、幼稚園児レベルだ。

だから、迷わず、一番強いと思うメギドナに近づいていった。

メギドナも、気づいたのだろうか、二つしかない目を紅鷹だけにむけた。

二人は、唯、見つめあいながら一歩近づく。また、一歩と。

ゆっくりと。

そして、メギドナが先に仕掛ける。

身体強化をしているメギドナにとっては、軽い踏み込みだ。

彼女はなめているのだ。この世界の人間を。

少し腕を振るっただけで崩れる死体。

こんな奴らがどうして、此処までに近未来の技術を持っているのか。

そんなことは、どうでもいいくらいに殺し続けた。

だが、見つけた。

紅鷹を。

彼なら少しは楽しめる、そう思ったが、あくまでこの世界の人間

だ、だからちよつとした腕試しのつもりで軽く、踏み込んだ。

しかし、紅鷹の反応はメギドナの予想を遥かに超えていた。

踏み込み、紅鷹の目の前まで来たメギドナが、振るつた右ストリートをかわすのは予想の範囲内だったが、その後、まさか反撃されるとは思は無かった。

だから、すかさず、攻撃をよけた。

しかし、攻撃はそれで終わりではなかった。

よけたメギドナに、さらに紅鷹は足を踏み込み連撃を仕掛けてきた。

思わずもらつた拳は、人間とは思えぬ力で、とてもあの細腕じゃだせるものではなかった。

メギドナは、油断していた上に、鳩尾にもらつた拳のせいで、地面に足をつけてしまった。

そこを紅鷹は見逃さなかった。

地面に膝をついたメギドナの顔面に、膝をそのままクリンヒットさせた。

そこで、後ろに反り返るはずの体を、それを越える速度で後ろに回りこみ、後頭部に右回し蹴りを浴びせる。

その威力は、魔法の身体強化に引けをとらないモノであるため、

メギドナは数百メートル吹き飛ばされた。

紅鷹は、少しの油断も慢心もしてはいない。

メギドナが、特別な力を使うことは重々承知のことだ。

しかし、それは紅鷹のほうも違いは無かった。

（こんなときに、じじいに教えてもらった“気”が役に立つとは思わなかった。だが、まだ終わってない）

このくらいで、メギドナが倒れるとは思ってはいなかった。

しっかりと、メギドナが吹き飛んだほうを見ていた紅鷹は、すぐに臨時体制に入った。

いつも言われていたあの言葉。

今はしつくり来る。

『油断はするな。誰もが、敵を倒して終わったと思った瞬間が一番のすきなものだからな、覚えておきなさい』

「今なら、本当にしつくりくるぜえええ！！！！」

煙が立ち込めるほうから、メギドナが最速で体当たりを仕掛けてくる。

メギドナは逆上したのだ。

（人間ごときに、俺が！！）

「ふざけるなああああああ！！！！！！」

体当たりをしつかりと受け流すが、その威力に地面のコンクリートの方が耐え切れずに深く沈む。

その、瞬間に地面に目をはなした紅鷹を見逃さずに、魔法を放つ。

もはや、手加減を見失ってしまったメギドナは、得意の毒の魔法で発動する。

ブシャああつとメギドナのかざした右手から汚れた水のような物体に塩酸の混じったような液体が紛失される。

自分の失態に気づいた紅鷹は、下を見ながら気を集中させ吐き出される何かを防ぐ。

全ては防ぎ切れずに、両腕に何適か浴びてしまう。

すると、その本の少しの水滴が、まるで、腕を溶かすように、ジユクジユクと音をたてて腐敗させようとする。

その液体に対して、ゾツとした紅鷹は水滴を腕を払って腕から落とす。

すると、塩酸のように腕の皮膚を溶かす行為はとまった。

（今のは、塩酸？ 毒に似たようなものか？ どうしてあんなものが？ さっきのは右手から出た。もしかして両手からでるのでは

？ 注意しろ！ しつかり相手を見定めろ）

より、いっそうを相手を警戒した紅鷹には隙がまったくと言っていいほど無かった。

紅鷹の隙が無くなり下手に手を出せない二人はお互いに相手の次の行動を見つめるだけであった。

そんなんじゃ変わらない。

なにも、できっこない。

『相手が手を出さないのは、相手を探っているか、隙が無いか、出方を伺ってカウンターを仕掛けるかのどれかじゃ。そんなときは、突っ込むのみじゃぞ。気を使つてな』

（わかつてるよ。体全体に気をまとわせる。なにも、気を集めることだけに集中するんじゃない。相手を見ながらだろ）

自然と、体全体が熱くなる。

心臓の鼓動の数も二倍近くに早まる。

（これで良い）

体から蒸気のような煙を発生させた紅鷹は、踏み込んだ。

踏み込んで、相手の顔面にめがけて拳を振るう。

それを、メギドナは、軽く体を屈めてよけた後、紅鷹の顎めがけ

てアッパーを繰り出す。

しっかりと集中している紅鷹には軌道がある程度見える為、自然と体は足裁きで避け、相手の右側に回りこむ。

回りこんだ状態で、両手を使い顔面と脇腹を狙った、山突きを放つ。

自然と、顔をかばったメギドナは、残りの脇腹を狙った拳に気づかずに入る。

「ッ!？」

うめき声を漏らし、両手をぶらん、と地面に向かって下げる。

両手が下に下がった瞬間、防がれた顔面を狙った右手で、正拳突きで再度顔面を狙う。

顔面は、軽やかに右手を頬に貰い、相手の顔が左に体ごとねじれながら吹き飛ぶ。

放物線のように吹き飛んだ体を追い、着地する寸前で、踵落としで腹から地面にたたきつける。

もうそろそろ、メギドナの体力は尽きそうだともい、奴の目を見る。

その目を見た瞬間、紅鷹は、すぐさま飛び引いた。

（あの目、……あれは合い打ちの覚悟だ!）

飛び引いた紅鷹を見ながらメギドナは高笑いをする。

「俺じゃあ、普通にやつても勝てそうにねえわ。でも、俺の魔法で全てとかしてやんよおおおおおおお！！！」

一気に近づいてきたメギドナは、両手両足を使って攻撃してくる。

しかし、それら全てを紅鷹は受け流すことはしないし、反撃もしない。

「何だそれは！？」

声を張り上げるほどの奇妙な体をメギドナはしているのだ。

体は、スライム見たいな状態。触ったらポヨンと揺れそうなやわらかさが見た目だけでも伝わってきて、なにより、体全体が、全てを溶かす塩酸であるからだ。

数秒、たっているだけで、メギドナの触れているコンクリートは溶けていく。

さすがにコンクリートというべきか、そんなすぐには溶けはしないが、それがもし、皮膚に浴びてしまったら、数分も持ちはしないだろう容易に想像が付く。

「くっそ！！」

紅鷹は、反撃できずに、唯ひたすら避けるのみ。

メギドナは、先ほどまでの圧倒的劣勢をひつ繰り返し、どんどん士気を増していった。

「おらおら！！ 避けてばっかじゃーいつまでたっても俺を殺れねえぞ！」

攻撃はとまらず、たまに飛び散る液体が、頬や、腕、膝、といった箇所に当たりそこを急速に溶かしていく。

それを振り払いたい気持ちが高いが、そんなことをすれば一撃を貰ってしまう。

（一撃で決めるしかない）

「くれてやるよ、この腕。その代わりお前の命を貰っていく！！」
体全体に纏っていた気を、両腕に集中させる。

「俺がお前の命を貰うううううう！！」

ぶつかり合った二人の体はどちらも絶望的であった。

抱きつくように二人の体は触れ合い、メギドナの顔と心臓の辺りは、近くに吹き飛び、紅鷹は払ってもとれないような量の液体を体に浴びた。

体が、溶けながらもメギドナの体を自身の体から離し、ふらふらとしながら、歩こうとする。

しかし、おもいの他、体を溶かす進行度が速いしで、足は、もう

まともな形状をしていなかった。

巫女は二人の戦いをじっと見ていた。

周りにいる魔物たちは、メギドナの命令によって私を襲わないようになっているからずっと二人の戦いを見れた。

私は、期待していた。

もし彼がこのまま、あの毒牙のメギドナに勝って、そのままNO、2を破り、NO、1と、強敵たちを打ち倒していつてくれるのではないかとおもっていた。

しかし、魔法という存在に最期は勝てなかった。

やっぱり最期はそれが問題になる。

“もし、彼が魔法を使えていたら、事実は大きく異なっていたのではないだろうか”。

そう、思えてくる。

私は、近づいたんだ。

彼に。

「ねえ、あなた。名前はなんていうの？」

理由なんて分からない。

ただ、聞いておきたかったのかもしれないし、聞かなければならないような気がしたからかもしれない。

「俺か、俺……は……獄閻寺紅鷹だ」
ごくえんじ べにとう

「そう、ねえ、あなたの血肉を貰っていいかしら？」

「血肉？ いいかもな。どうせ後何時間も生きていられる自身がな
い。もしあんたが俺を治せるような力があるのならくれてやりたく
はないな」

私はうつむいた。

もし私に、彼を治せる魔法を覚えることができたならどんな未来が
待っていたのだろうか。

せめて、もし、悲惨な未来になってしまったときに、あなたを使
うことができれば。

だから、頂戴？ あなたの血肉を。

「ごめんなさいね……私はそういうのはできないの」

「そうか……じゃあ、俺が此処で戦って、あいつを倒したこと覚え
ていてくれるか？」

「ええ、あなたの有志、忘れないわ」

彼は、紅鷹は笑顔で静かに息を引き取った。

私は、走る。

この世界から、私の世界に戻って、逃げなきゃ。

いまなら、逃げれる。

NO、2はいない。私を、私の魔法を恐れて監視する奴は誰もいない。

そのまま、私はゲートを通ってもこの世界に帰り、いずれ来る奴ら《魔王勢力》を食い止める為に走った。

第二十六話 始まりと終わりの通過点？（後書き）

はい、赤い建物は、どう考えても東京タワーです。

なんか、ぶつ壊してみたかったですたい！！

本当はもっと、いい表現があったのですが忘れちゃった。

第二十七話 巫女の最期 ？（前書き）

一人視点を書いてみましたが、無理。

第二十七話 巫女之最期 ？

2015/09、23/20:48:31

紅鷹が死んでから、もう二年。

いまだに魔王勢力の侵略は訪れてはいなかった。

魔物たちの繁殖期は種類がいるためにバラバラだ。

それに、早熟で、あっという間に成長し、一人前に人を食い殺せるようになる。

そんな奴らが二年も、向こうの世界で繁殖しているかと思うと、悪寒が走る。

「この世界は、このままで大丈夫なの？」

一人、ひっそりとこの部屋で、考える。

どうか、悲惨な未来にはならないでください。

そんな思いは通じなかった。

数日後に、魔王勢力はゲートの向こう側からゾロゾロと現れた。

当然、此方と向こうをつなぐゲートは精鋭たちで待ち構えさせていた。

しかし、NO.1には誰も勝てなかったと報告があった。

それに、凡そで軽く億は越える数が侵略をして来たと。

その報告から数時間で、さらに別の報告があった。

エルフォード国が、サザーミア国が魔物たちによって墮ちたと。

そこには、友がいる。

唯一、別世界から人間を召喚できる魔法を使える彼女が。

死んでしまっているだろう。

こんな世界あんまりだ。

さらに報告があった。

今魔物たちが向かっているのは、この私がいる国だということ。

死ぬ。

殺される。

世界が奴らのものになる。

だれも食い止めることができない。

そんな世界認めない。

（“使おう”。あの魔法を）

「こんな世界、私を変える」

呟いた言葉とともに、足元に魔方阵が現れる。

その魔方阵は私から、ほとんどの魔力を持っていた。

それに加え、周りの魔力までも持っていた。

それでもいい。

なんとか、紅鷹の血肉をリリースに渡さなければ。

あるとき。

2009年に行なわれたあの会議で、もし勇者召喚を可決させれば、私の行動によって紅鷹を呼び出せれば、世界は変わる。

行こう。

過去へ。

その部屋から巫女は消え、残ったのはただの空気と僅かな魔素だった。

2009/06、27/01:58:32

大量の魔力を消費し、着いた場所は私が使っていた部屋と変わらない場所であった。

変わったといえば、此処が物置部屋になっていることぐらいだ。

魔力の枯渇がものすごい。

気を抜いたらすぐに倒れそうだが、あんな未来向かえたくない。

すぐにでも、届けなきゃ、でも誰に渡せば。

自分に渡せばいい。

さすがにバレるとかなり大変なことになりそうだから、フードで顔を隠そう。

あまり、私も持たない。

早く届けなきゃ。

ちまちま歩いていたんじゃ持たない。

「身体強化」

早くこの場から抜け出そう。

そして、私はあそこを歩いているはず。

現代巫女から遠ざかった未来巫女は残り僅かな魔力で、移動する。
時間に換算すると、ほんの数十分だが、巫女にとってはきっと最
期のような時間なのだろう。

彼女は悟っている。

自分が死ぬことを。

本来は、過去に飛ぶという行為は一度きりが精一杯なのだ、特別
な存在などいない。

死ぬことが前提で過去に飛んだのだ。

だから、悔いは無い顔をしている。

もう、場所は人氣が無く、まるでどこかの無人島に似た砂漠のよ
うな場所。

（ここで、一人骨を埋めるのもちよつといいかな）

なんて、未来巫女のおもいが頭に出てくる。

どて、と彼女は砂漠の中に倒れこんだ。

「どうかお願い。世界を“救って”。“あなた”がそうできることを唯、願っている。これで終わる—」

そう、人生の幕を下ろそうとする巫女は、残り少ない灯火に唯、日差しに照らされ続けた。

そして、ひっそりと巫女は息を引き取った。

第二十七話 巫女の最期 ？（後書き）

時間をかけずに書いているのでクオリティーが低いですが、投稿しているだけで許して。

第二十八話 境界線

「……………どうしてあなたが？」

巫女が、魔物たちの侵略によって世界を墮とすのを防ぐ為に勇者召喚を促したのに。

此処にいるということは、成功したという裏づけなのだろうが、どうしてここにいるの？

疑問が募る。

もしかして世界が救えなかった？

「そんなの決まってる。終わらせない。……まだ、やることは残っているぞ」

紅鷹は、巫女を生かすため、エリスを救うため、世界を救うことにしか目がいつていな為気づいてはいない。

巫女は目を開けた直後に見た右手が消えかかっていることにしっかりと気がついた。

そしてその消えかかっている人間が、巫女自身が世界を変える為に救って欲しいと願った本人だった。

「どうして此処に？」

再度疑問を投げかける。

「話すと長くなる。その前にあんたの魔力を回復させる」

「あなた魔法が？」

巫女にとっては最初に会った紅鷹は、召喚されることが無く、魔法も使うことができなかった。

そんな彼はちゃんと使えるかというおもいからでた言葉だった。

その言葉がしっかりと聞こえた紅鷹はそっけなく返す

「あんたがそうしたんだろ」

「そう、ね」

紅鷹はあらかじめ還元していた、魔力をありったけ巫女の形状に変換させ、それを手を腹に添えるようにして流し込む。

「っ!!!？」

すると、魔力がすーと巫女の中に入っていく感覚が感じ取れるが、しかし、紅鷹は気づいた。

自分の右手が消えかかっていることに。

紅鷹にとってありったけは、巫女にとっては計用量をあつというまに満タンにして、入りきりはしなかった。

「あなた、魔力が多すぎるのよ」

ジト目で紅鷹を睨み、それに思わず恐縮する。

「それで、お前にはやってもらうことがまだ残っている」

「結果だけ聞くけど、世界は救えたの？」

「救えた。だけど、この世界じゃ、彼女や妹は救えなかった」

「そう、で、どうするの？ 私にはあなたがどうするのかがまったく分からない」

「それは、あんたに世界がどんな状況なのかを教えてもらわなければ行動することはできない。それに、この右手について聞きたい」

紅鷹が見たときとまったく同じような反応を示した後、真剣に考えるようにうつむいた。

すぐに、思いついたのか、早口で聞いてきた。

「あなた、何かパラドックスを犯した？」

「いや、そういうのは入念に気を配っていたので、ミスはないと思う」

「じゃあ、答えは一つね」

さらっと巫女は答えを導いた。

時間を越えるもののなにどうして、そんな簡単に気づいてしまうのかものすごく疑問だった。

「どうしてそんな簡単に？」

「あなたが答えのような物よ。時間はもう過去から未来に一本道で川のように流れているわけではない。未来方向から過去に何かをしないとパラドックスが起きる可能性だって起きてしまう。つまりは、これから私たちが勇者召喚を手助けしに行くことが答えよ」

そうか、そんな可能性もあるんだ。と自分の行動を思い返しいくつか似たような経験をしたなと思った。

すると、消えかかっていた右手が少しだけ色を戻し、視覚に収めることができた。

もし、答えが出なかったら自分という存在が消えていたと思わせる現象だ。

しかし、俺たちは気づいた。

「とりあえず、行こう。リリースを説得に」

紅鷹はこれからを変える為に一緒に歩むため、手をだす

「ええ、いきましよう」

それに答えるように手を差し出しつなく。

そして、二人はこの時間から消えた。

第二十九話

2009/06、28/11:41:25

飛んだ先は、巫女が無事、俺の血肉を渡すことに成功したかを確認する為に飛んだ時間より少し後にした。

その時間帯は、現代巫女とリリスの二人の会話を聞いている俺もいる。

当然、俺は、そのとき自分なんかを見た覚えは無い。

この時間にいる俺に気づかれずにし、この時間にいる俺と、現代巫女が去った後に、俺たちが行く。

そのため、巫女にとって一回過去に飛ぶことが精一杯だった為、こんな風に過去の別の道を歩む自分と、親友のリリスを見ているのはどうも不思議な感覚がするのだろう。

（俺も感じてたよ、まるで世界に取り残されたような感覚を…）

本当の繰り返しをしてこなかった巫女には、到底、エリスを救う為に繰り返しした紅鷹の日々の苦しみをすることは無いだろう。

そんな気持ちで沈んでいた内に、俺はどうやら巫女をとっ捕まえにいったらしい。

その後、現代巫女も心配はしながらも自身の仕事があるためか、

リリスの前から消える。

その間、何度も現代巫女はリリスを心配するせいか、後ろを振り返ってばかりだった。

「行くぞ」

すかさず、巫女に声をかける。

タイミングとしたらどう考えても今なのだから、さっさと用件を終わらして行こうじゃないか。

まだ見ぬ世界へと。

「いきましょうか」

二人は物陰から、腰を上げ、リリスに近づく。

巫女は大して問題ない。

さつき帰ったばかりだが、なにかいい忘れたことがあったとごまかせば良いからだ。

しかし、紅鷹はこの時間ではまだ知り合いではなく赤の他人だ。

万が一、召喚されたときの初めましてに影響が出たらどんなパラドックスが起きるか想像もつかない。

だから、しっかりと時間の旅を続けていくうちに手に入れた、絹のフード付のコートでしっかりと顔を隠す。

それに加え、万が一しゃべるような機会が出てきてしまったら困るので、魔法で声を紅鷹の声には聞こえないようにする。

準備がすでに整っていた為、巫女はまるで現代巫女かのように振舞いながら声をかけた。

「リリース」

「？ なにか忘れ物でも？」

「そうね、忘れ物というよりかは、贈り物ね。それで、本題なんだけれどあなた、迷ってる？」

「っ！？」

リリースの反応を見る限りどうも迷っていることは本当らしい。

そんなのは出会ったときに微塵も感じさせていなかったリリースはどうだったのだろうか、もう知ることは無いだろうと紅鷹は思考を放棄する。

「はい。迷っています。だって、勇者召喚とは一人の人生を！その人に合った家庭や環境！ それら全てを壊すことなんですよ！そんなのあんまりじゃないですか。この世界のことは私たちが解決すべきなのに」

「ハハッハハハ！ そんなこと考えていたのか…」

思わず笑いが出てしまった紅鷹は、真剣にリリースの瞳を見つめた。

同時にそんなにも召喚する人間のことを考えて躊躇していたなんて、俺がよく聞く勇者召喚はいつも召喚される側の都合で勝手に呼び出されるまでは同じだが、リリースみたいにそんなに心配するような人間はいなかったな、と遙か昔に呼んだライトノベルが頭にふと出てきた。

「あなたは？」

そうだよな、まだこの時間では俺のことを知らないんだよな。

一つだけ、一つだけなら良いよな？ 自問自答して紅鷹は答える。

「世界を救う勇者かな？」

ジョークを言ったつもりはないのだが、リリースは苦笑いをもらった。

ただ、まだそれでも勇者召喚をする意思は薄い。だが、もう一押し。

「必ずしも、召喚された奴が此方に召喚されたとしても不幸になるとは限らない。むしろ、召喚されたほうがいいと思うかもしれない。きっと、召喚されなかったらそいつは何も変えられないまま、人生の幕を下ろしていたかもしれない。良いんだ。召喚して。もしそいつが泣き言でも言ったらそいつを殴れ」

「どうしてそうなるんですか？ あなたのいつている言葉の意味がよく分かりません」

「分からなくなたっていい。唯、せつかく“本人が”教えてやってるんだから信じろ」

その言葉を残すとすぐに、二人は身体強化を使って城から脱出した。

そのときにはすでに紅鷹の右手はすっかりと色を戻し、存在が消えることは無かった。

そして、しばらくの作戦会議をする為の場所を探す為に、顔がよく知れている巫女が正体をばれないような場所を探すのであった。

第三十話（前書き）

ふー、困った。

PS3で執筆していたらなんと、1024文字までしか入力できなかったが、携帯の方の結合を使って何とかなった。

第三十話

エルフォード国の位置する場所から北上した場所に人気のあまりない町はあった。

その町でひっそりと身を隠し作戦を立てることにした。

途中、何度か御子の顔を知る人間たちが話しかけてきたり、妙な噂を立てるような奴が居たため、ゆつくりと作戦会議をする暇もなく場所を移すことにした。

場所を移し、今度こそ誰にも巫女が存在をばれずに宿を借りることができた。

たとえ男女だとしても二部屋取るようなことはしなかった。金は幾らでもあるが、いちいち部屋を移動するのは時間の無駄だし、何となく落ち着いて話を聞けると思ったからだ。

「で、あんたが見た世界はいったいどうなったんだ？ 詳しく状況を教えてもらわないと世界を救うことは疎か、巫女が過去に飛ぶというパラドックスを阻害しそうになってしまいかもしれない」
「そうね、話すわ」

そして巫女は、自分の行動をはなし連ねた。

自分が、時間を飛び越える力を恐れられ、魔王の手下に捕らえられたこと。その後、日本の侵略に連れていかれたこと。

そこで、俺が魔王の手下の毒牙のメギドナに魔法なしの、素手で

相打ちまでにいったこと。

ただ、その時の俺は夏蓮が死んだことを全く知らなかったこと。いや、死んだかは不明である。ということは、俺たちがその時間に行って可憐を事前に助けてもパラドックスには決してならない。それに、巫女は俺の地肉を得た後、すぐにこちらの世界に戻るから、その後の日本の事は一切わからない。

ということは、巫女が居なくなったら幾らでも日本は救える。俺が暴れても大丈夫って事になる。

しかし、そうしてしまうと二年後に訪れる魔物たちの異世界への侵略がなくなってしまう。

「なら、疑似的にも侵略を行うしかない。私自身を騙すんだ。そのために、君は幾らでも世界の時間を越えられるだろう？　なら、どこでもいい。未来から、遙か未来から魔物の大群、およそ数十億の魔物を引き連れて、ゲートの前に出現してほしい」

「本当にいいのか？　そのまま魔物の大群で二つの国を落とさなければならぬのだろう？」

巫女は、ばつの悪そうな表情を浮かべながらも顔を縦に振った。

「そうでもしないと、でもできるだけ致命傷は避けてほしい」

分かってる。紅鷹は心に響かせる。自分勝手な行動で余計な死人を出すつもりはない。そこは、なんとかする。いや、してみせる。

俺は、すべてを望む。手伝ってもらうぞ、セイン（偽）きっと巫

女は想像だにしていなかっただろう。

紅鷹と、魔王の手下NO.1が、勇者が召喚された世界では手を組んでいたことを。

多分、召喚された世界同様に、巫女の世界でも紅鷹自身のことを話せば協力してくれるのではと踏んでいるが、もし、そうはならなかったら戦うしかない。

セイン（偽）は強い。実際に戦ったことは記憶の中の俺しかないが、全力でぶつかなければ逆にやられてしまいそうなほど厄介な相手だ。

セイン（偽）の魔法破壊はかなり手強い。名前のとおり魔法を破壊されてしまったため、あまり魔法攻撃は有効ではないので、体術で挑むしかなくなるがそれも奴の作戦で、セイン（偽）は体術も扱える奴で、魔法をフェイントに入れながらではないと勝てるかどうか不安だ。

説得できた場合は、セイン（偽）を使って、俺と二手に分かれて魔物を先導し、できるだけ気絶させるように命令する。

そうすることで死人を無くし、さらに、巫女が言っていた伝達係の人間を洗脳し、誤認情報を過去の巫女がいる国へ流す。

そして、巫女が時を遡ったのを見計らい魔物たちを滅する。魔物たちは可哀想に感じるが、やむ終えない。

「こんな感じの作戦で良いか？」

紅鷹は、自信の案を巫女に提示し賛否を聞く。

巫女は特に反対するそぶりは見せずに賛成した。

そして、紅鷹が行くかと巫女を誘う。

しかし、巫女はまるで決定的な盲点に気がついたみたいに目を大きく開かせて紅鷹に近づいた。

「そもそも、一体どうやって元の時間軸へ行くつもりだ！？ 今、私たちが居るところはもう！ おまえが召喚される世界なのだぞ！？ どうすれば…」

一人で激怒して、一人で沈む、巫女に紅鷹は笑みをこぼした。

「そうだな。ふつうの方法じゃ絶対に無理だ。だが、俺なら、あの、繰り返してきた時間の中で見つけた方法なら行ける！」

自信満々の紅鷹の言葉でもどこか納得できない巫女は沈んだままだ。

「あんたが飛ぶんだ。あんたを”主”として時間を飛ぶんだ」

無理よ、そう巫女が言う。あたりまえだ。巫女は一度しか飛べないんだ。彼女の魔力は時間を一回飛ぶので精一杯なんだ。

なのに、紅鷹は続ける。

「魔力は俺を媒体とすれば良い。後は、あんたの流れてきた時間を逆行して、その時間に降り立てばいい

L

第三十一話（前書き）

誤字脱字が多い（^ー^；

すいません、意欲がわいてない。

後少しで、完結なのに力つきそうです。

それと、PV一万越えました。

正直びっくりです。自分、初めて書いた小説がこれで、この小説とともに成長していくつもりでしたがPVが軽く一人歩きを…。

まあ、これからも精進してがんばりますのでよろしくお願いします。

あ！、それと、説明が下手ですいません！。

第三十一話

「どう言うこと？」

巫女は、まだ紅鷹の言っていることを理解していない。

そんなのは当たり前だ。時間を何度も飛び越えることができるの紅鷹だけで、ほかの人間は時間を飛び越えることさえ不可能なのだから。

たった一回飛んだだけの巫女さえ、紅鷹の言っていることは理解できない代物である。

「そもそも俺たちの時間を過去に飛ぶという行為の定義をはき違えているんだ。まず、簡単な例を上げるぞ。巫女、あんたは過去の時間に飛ぶこの魔法をどう考えている？」

「どうとは？」

「世界を中心としているか、自分を中心になっているかだよ」

「……世界か、自分か？」

「そうだ。俺たちが使った時間を飛び越える魔法は世界を主、として考えるのではなく、己、自分が暮らし成長してきた世界を、自分を主として考えるんだ。それを当てはめて、改めて巫女という存在を考えてみてくれ」

「私という存在？」

「巫女。あんたは、”世界を跨いでこの世界にきた”じゃないか。俺には、あんたのたどるはずだった未来は知らないし、存在していても死んでいる。だが、あんたは、その世界を回避しようとして別の未来を辿る世界。俺たちが居るところにきたんだ。分かるか？あんたの存在は、二つの別世界を唯一つなく存在なんだよ！」

「二つの世界を跨いで、唯一繋げた存在ということ？」

「そういうことだ。あんたが遡る時間は、あんたの人生を主観としてきた時間を遡る《巻き戻す》のであって、もどる時間は、この俺たちが居る、俺が召喚される世界ではなく、俺が召喚されなかった世界なんだ」

「遡るのは、世界が流れる時間ではなく、私がここまで到達するために動いた時間に到達するって事？」

「俺たちがやるのは、時間を戻すのではなく、巫女の主観的時間を戻る《遡る》んだ」

紅鷹の言いたいことが、形としてだが巫女に伝わったらしい。紅鷹のやろうとしていることは、いわゆる、人間たちが過ごしていく中で流れる時間を飛ぶのではなく、巫女の？の世界で体験してきた時間を遡ることということになる。

巫女はとても珍しい人間なのだ。

紅鷹とは違って、巫女は世界を飛び越えているのだから。

彼女の主観的時間においては、別の時間、別の未来を送るである

う二つの世界？と？を跨いだ状態なのだ。

それを、紅鷹のエリスを救うために繰り返した時間で見つけた『戻る』を応用して、本来の？の世界に割り込もうとする作戦なのだ。『まず、俺たちはあんた《巫女》が日本に来た直後まで遡る。そして、”俺”とメギドナが戦う前に俺が民間人に被害が及ばないようにできるだけ力を振るう。その間、あんたは隠れていてくれ。それくらいは魔力があるならできるだろう？』

当然と言わんばかりに頷く巫女はすべてを紅鷹に任せるため、口出しをすることはなく、作戦を聞く。

「事を終え、無事にアンタがゲートを使って逃げたのを確認したら魔物たちを残さず殺す。日本を救い終わったらできるだけアンタも協力してけが人を治癒魔法で癒してくれ。だが、一つ確認しておくが、”俺は”死ぬ必要があるんだよね？」

「そうでなくては、血肉を得ることは疎か、あなた事態の存在がパラドックスとして消え去ってしまうじゃない」

巫女の言うとおり、”紅鷹”がメギドナと戦って相討ちし、死ぬからこそ巫女は紅鷹の血肉を得ることができ、勇者召喚で紅鷹が召喚されるのだから、死ぬはずである？の紅鷹は死ぬということが絶対なのである。

そのため、？の紅鷹とメギドナが戦闘中に出る死人やけが人を防ぐことは殆ど不可能に近い。

変に深追いすれば、パラドックスを犯してしまうのだから、二人の戦闘中に発生する付近の事態は関与できないのが苦しいところで

ある。

ただ、唯一の救いが、二人が戦っていたときは戦闘に夢中で周りに気が一切向いていなかったと言っていた。

その言葉を信じるとすれば、二人の戦闘付近以外の場所なら魔物たちを排除してもなんら問題がないこと。

”可憐が”死ぬ運命”を変えられるかもしれない。

紅鷹は”二度、可憐を救うことを失敗している”。

一回目は、？の世界の紅鷹が、記憶を取り戻すのが遅く可憐を助け出すまでに時間がなかったこと。

その所為で、？の紅鷹が過去に時間をとに超えたさいに、魔物を寄せ付けない護符を渡したことによって、？の、今の紅鷹の世界では、護符の力に反応した魔王の手下のNO、2が出てきて、可憐を殺すまでの時間が速まったこと。

原因はどちらも違うが、死ぬ日は同じである。

もしかしたら、また助けられずに死んでしまうのではないか、そう考えると肝が冷えるような錯覚を感じる。一度は、いや二度助けることを諦めたのに往生際の悪さで自分を笑いたくなった。

あくまで、二人が、紅鷹がやろうとしていることは自己満足だ。紅鷹の想像通りなら、？の世界と？の世界はどちらも可能性世界として平行して存在していると思う。

紅鷹たちが？の世界に割り込んだからと言って、？の世界の未来そのものがなくなるわけではない。それを証明するのが”獄閻寺紅鷹”の存在だ。

彼が存在することが、そのまま？の世界が消えずに残っていることが証明されることになる。

だから、？の世界の未来では、文字通りエリスは死ぬかもしれない。

日本にいる可憐、暁、美希全員が死ぬ未来は変わらないかもしれない。

変わるはずなんてないんだ。それが、？の世界の辿る道なのだから、幾らその世界で足掻こうが何も変わらない。変えられない。

でも、そいつらが死なない世界があっても良いじゃないか。そう考えた。

（分かってる。俺がやろうとしていることは自己満足だ。だからこそ、？の世界の人をできるだけ、いや、そんな決意じゃだめだ。全員を死なせない覚悟をしないとだめなんだ）

分かっているても望むそんな世界を夢見ることは悪くはない。

だが、それをするには力が必要だ。今の、紅鷹には力がある。

？の世界では持ち得なかった魔法という力を。

「行こう、世界を、アンタ《巫女》を騙しに」

誰も死なせない。命をあの世へともって行かせない。自分が守るんだ。約束を果たしに。

その決意を胸に抱き、巫女に手をさしのべる。

それを快く受け取る巫女の顔には、不満や疑問といった顔は感じ取れなかった。それは、世界を変えようとした自分と姿を重ねていたのだからだろうか。まだ、巫女には答えは出せなかった。

「私を騙しに。いきましよう」

第三十一話（後書き）

余談ですが、ノーパソはお陀仏になりました。と診断された。

「な！？ 何だと！？」と思わず店員をなぐるつと、なんてするわけもなく沈みました。

第三十二話（前書き）

誤字脱字があつたら報告をお願いします。

て言つても今まで言つてくれた人は皆無です。

多分、僕の口の悪さと、マナーの無さのせいだと思います。

第三十二話

二人の手が繋がったその先に活路は開く。

そつと巫女の手を握った紅鷹は、彼女の手を自信の胸、体中の最も魔力が集中し、循環する場所、人体の活動する根元の場所に手を置いた。

「飛び方は解るか？ 主観的時間を戻した後、”割り込むんだ”。俺たち二人の異分子を強性的に世界にねじ込ませるんだ」

二人は、これから向かう時間、世界にとっては完全なる異分子だ。本来存在するはずのない紅鷹と？の世界では全く同じ存在が二人になる巫女。

宇宙的に、存在を、二人分の量子を割り込ませることは容易なことではない。そつとうな魔力量を要するため、？の世界の時間に割り込んですぐには紅鷹は活動することが困難になると予想される。

幸い、紅鷹には大氣中に含まれる魔素を自信の魔力に還元することができるため、数分もあれば活動状態まで持つていける。

そして、一度世界に割り込むことができたなら紅鷹自体の？の世界での時間跳躍は難易度が下がる。

割り込むときこそ、様々な拒絶反応や、他人に付き添つての時間跳躍に酔う可能性があるだけである。

「……じゃあ、行くよ？」

「ああ」

紅鷹が返事をした瞬間、猛烈な横にかかるGと、猛烈な目眩、吐き気、頭痛に襲われた。

予想を遙かに越え、気持ち悪さがこみ上げてきて、異物が胸のあたりまで逆流しているような感覚に陥る。

そんな紅鷹に反して、巫女は至って涼しげな顔で自分の辿ってきた時間を見て、降りる時間を見極めていた。

そんな涼しげな巫女の様子を見ていた紅鷹は少々、自虐的になっていた。

（俺だって初めてやったときは酔ったよ？ 確かに時間を飛ぶ魔法を使えた人は巫女だし、教えてくれたのを巫女だよ。だからって、この違いは酷い）

2013/09、23/20:20:41

その時間はまだ、メギドナと俺が戦闘する時間ではなく、巫女が日本に来た直後ということらしい。

二人の行った魔法は、紅鷹が使っていた「戻る」を応用したかげの物のため、すぐそばの目の前には、過去の巫女が人型の魔物に連れられてゲート付近から歩いている。

生憎なことに、巫女の監視役とされているのはメギドナだと巫女自身が説明をくれた。

今は、そちらに気を取られるわけにはいけないので、巫女には一日身を隠してもらう。

「いいか？ バレないように隠れていてくれ。特に、自分自身とは会うなよ」

そう、言葉を残し、紅鷹は東京タワーの方へと向かう。

巫女の話によると、この日に『赤い大きな建物が、根本から崩れてしまったのよ』と言っていたのを聞いた。

巫女の話に出てくる赤い大きな建物とは、東京タワー以外に思いつかない為、急ぎで東京タワー付近まで行き、民間人を何とかして避難させなければならない。

こんな非日常なんか知りもしない民間人たちは、今日も普通に観光客が溢れている。

そんな人たちを東京タワーから引き離すために最も被害を抑えて避難させるにはアレしかない。

紅鷹は、東京タワーの入り口から強性的に入る。

「君！！ 何をしている！？」

明らかに不振者のような汚い服に、入場するためのチケットを勝っていないために、警備員の人間に止められるが押し入る。

今の紅鷹には、魔法を使わずとも普通の大人の人間に何人に押さ

えつけられても抜け出すことは容易で、身軽なため、警備員の包囲をすり抜け階段をかけあがる。

そして、二階の売店にて魔法を使ったのをバレないように身を店内側に隠しながら手元から炎の魔法を発動する。

できるだけ大きく、周りの観光客に聞こえるように。

「燃えろおおおおお！！」

そして、狙った店はメラメラと音を立ててその火の大きさを増していく。

「何だ！？ 火事か！？」

紅鷹を追ってきた警備員がいち早く火事に気付く。

それにあわせて、観光客たちも火事に気付き始める。

当然、火事のさいに起こる火災報知器は事前に壊しており、警報も鳴らないし、鎮火するための水も出てこない。

火事の影響で、急いで避難している人たちのどさくさに紛れ東京タワーを脱出する。

「次は魔物の掃除か！ 疲れんなああ！」

この後には極力、巫女と、紅鷹、メギドナから遠すぎず近すぎずの感覚で付近の魔物を排除しなければ行けない紅鷹は思わず、自分のしていることの難しさを表に出さない代わりに不満として愚痴を

吐いたのだ。

時間的にもそろそろ、紅鷹とメギドナの戦闘が始まる。

急いで、あらかじめ巫女に場所を教えてもらった所に行く。

肉眼で紅鷹とメギドナが戦闘しているのが見える位置に紅鷹が来ているが、決して数十メートルな距離ではなく、数百メートル離れている場所からだ。

そこらには今にも魔物が民間人に襲いかかるうとしているが、ほんの少しの魔力を紅鷹が放出すると、魔物たちはそろって動きをやめ、首だけを機械ロボットのよう紅鷹のほうへ向ける。

まるで、魔物たちの目は、自分たちの魔力量より低い獲物を見つけ、集団で狩りをする森のハンターのようなものだった。

そりゃあ、全く魔力を持たない肉よりは魔力を帯びた肉の方が魔物たちは好きに決まっている。

それに、魔物たちは紅鷹の実力を計れるほどの力眼は持っていないために、魔物たちには自分たちより弱そうな肉にしか見えない。

そして、一斉に襲いかかってくる魔物たちを両手だけしか使わずに斬りさいた。

忽ち、魔物たちは肉片の死体とかし、視界に移る魔物たちを狩り終えた。

そして、紅鷹が一息付こうとした瞬間、”知っている魔力が”、

”自分の最も知っている町の方角に現れた”。

反射的に、魔力の存在が現れた方に視線を置く。

その方角的には、どう考えても、紅鷹の住んでいる町の方角だった。

「可憐……、暁、美希……」

つぶやかれた言葉は、今は懐かしき友と妹の名前。

「助けなければ……、この時間を巫女に”選んでもらった意味が無い”」

紅鷹は、もうどうせこの世界にいる紅鷹とメギドナが戦っているのを承知で、身体強化を両足にかける。

そして、一気に駆けだして跳躍する。

目指す場所は、紅鷹の家。

そこには、紅鷹が一度殺した人物が居る。

紅鷹にとって大切な、たった一人の肉親を殺した魔物。人型の魔物。

魔王よりも強く、ずる賢い”あいつ”がいる。

”漆黒の亡霊ミゲル”が。

第三十二話（後書き）

今回は、プライドが高く、おバカな敵を滅多討ちにします。

妹を間一髪で助けます。

これで妹が生存できる！

第三十三話

紅鷹は、今は懐かしき自分の家を視界に納めることができた。

しかし、目の前の光景を受け入れると、祖父との鍛錬に使っていた道場は全壊し、住居の方も半壊していた。少なくとも道場の方に人がいたら死は免れないと思われるが、幸い可憐は道場に行くような事が無い。

だが、半壊しかしていない家の方でも万が一がある。

（まさか、…………間に合わなかった…？）

道場と家が破壊されて所為で砂煙がたつ中、半壊した家のドアを見てみると、人影が外に逃げ出しているのが目に映る。

そして、人影をゆっくりと追う魔力を持つもの。

どうやら、恐怖に染まってしまった人影は、盛大に転けた後、立ち上がれずに震えているのがやつとのことらしい。

そして、人影を追っていた魔力を持つ者が、そつと手を人影の頭に添えるように翳そうとした。

刹那、その魔力を持つ者を紅鷹が蹴りをいれて吹き飛ばした。

砂煙の中でも、姿形は見える。

立ち上がれなくなってしまった彼女は、突然の乱入者に疑問を抱

く。

「……………誰っ？」

その声は、怯えに浸食されているような声をしていた。

しゃがみ込んでいる彼女に視線を合わせる紅鷹。

彼女を慰めるように言葉を伝える。

「俺の……………俺の大事な妹は俺が助ける」

声こそ大きくはなかったが、彼女の、可憐の心には響いたと思う。

そして、今一度、ここら一体に住む人たちのためにミゲルを殺さなければならぬ為、先ほど吹き飛ばした方向に進む紅鷹に可憐は問う。

「お兄ちゃん！？　ねえ！？」

その言葉に返事することなく紅鷹は、ミゲルの魔力を辿って歩きながら辺りを探す。

すると、敷地内の幣の瓦礫に埋もれていたミゲルが立ち上がる。

「これはこれは、まさかこの地の人間に魔力を持つ者がいるなんて驚きですよ。ぜひ、その経緯についてー」

お喋りなミゲルの言葉を紅鷹が遮る。

「――黙れ」

その言葉を発した直後、ミゲルはさらに遠くへ吹き飛ばされた。

紅鷹は知っている。漆黒の亡霊ミゲルがお喋りなことに。そして、奴は言葉巧みに相手を困惑させ判断能力を鈍らせる。

以前戦ったときに耳を貸したせいで紅鷹は苦戦した。

紅鷹は、魔法で空中に浮かびミゲルを探す。

「探す手間が省けそうだ」

そう、紅鷹が言った瞬間にミゲルは空中に現れて紅鷹に背後から攻撃する。

そんな卑怯な攻撃を仕掛けることを知っている紅鷹は空中でひらり、とミゲルの攻撃を避けて追撃を加える。

瞬く間に、ミゲルは地面へと逆戻されるように突き落とされた。

紅鷹は、地面にいるミゲルに聞こえるような音量で声を張る。

「なあ、漆黒の亡霊ミゲル。……運命つてのは時に悲しいよな」

「あなたがこれから私に殺される運命つて事でよろしいのでしょうか？」

紅鷹の言葉にすかさず応答すると言うことは、元気な上に怒っていることになる。さらに、ミゲルを怒らせるため、というよりかは

意味の分からないことを告げる。

「お前が……、俺に、二度殺されることについてだよ」

「意味が分かりませんね……。頭でもおかしいのでしょうか？」

「お前、バカだな。気がつかないのか？ 俺がお前をこうして食い止めているうちに巫女は向こうの世界へと逃げ出しているのを」

「なっ！？ バカな……、巫女の監視はメギドナにやらせているはずだぞー！！」

ミゲルの言う、メギドナはそんな状況では無い。

「メギドナねえ……、今頃、”俺”と交戦中じゃねえか？」

「何を訳の分からないことを！？」

ミゲルが困惑するのも当たり前だ。

彼は、知りもしないのだ。紅鷹の存在を。巫女がすでに、いやこれから過去に飛んで未来を変えてしまうことを。

そんな、可哀想な奴に慈悲でもくれてやる。そんな気持ちで言葉を吐き捨てる。

「冥土の土産に教えてやる。巫女が過去に行くのをお前は阻止できない」

「何を！？」

「そして、勇者召喚されたのが俺だ」

「……………まさか、未来から来たのか!？」

さー、と顔が急速に青ざめながら否定したい事実が本当なのかを
確認するために声を上げる。

それでも、ミゲルは魔王の手下の中でもNO、2だ。魔王の配下
の中でも頭が回る切れ者だ。

「正確には違うが、まあ、三角でもやるか。だが、さようならー」

「ーまっ」

自分の命を助けてくれ、とでも言いたかったのだろっが、紅鷹は
ミゲルの言葉に一切耳を傾けることなく破壊の魔法で粉々に粉砕し
た。

そして、しっかりと、ミゲルの再起する可能性が無いように、塵
残さずに炎の魔法で焼き尽くす。

「これで、残る敵はセインだけか……………」

第三十四話（前書き）

お盆前に、父方の祖父と母方の祖父両方が体調を崩し入院。

落ち着いた時間がありませんでしたので短いです。

第三十四話

紅鷹は、セイン（偽）を探す前に一旦、自分とメギドナが戦っているであろう場所に戻った。

巫女の隠れていた場所は案の定、『俺』とメギドナの戦闘が見える範囲内にいたため、『俺』の屍が存在している。

その様子を見るかぎり、既に二人の戦闘は終わり、現代にいた巫女が逃げられたことに同義だ。

今の日本では考えられないような惨劇を繰り広げたこの場所では、人も魔物もいない。

人は、紅鷹が助け、避難させた。

魔物も紅鷹が一匹残らず排除した。

いるのは、巫女だけ。

「……終わったの？」

巫女の言葉はどこか、決別を終えた人にたいする慰めのように聞こえるし、ただ単に、為すべき事を終えた人に労いを込めた意味にもとれる。

実際どちらの意味を含まれている。

それが意味するのは、この国の未来を救った英雄とも言えるし、せっかく救えた人達、特に知り合いや家族と会えないことを意味する。

仮にも、人一人死んでいるんだ。

それが必要だったとしても、それが、もうひとりの自分だったとしても、世界に『死』を受け入れられてしまったのだ。

だから、紅鷹は自分自身の屍を超える

この世界の『紅鷹』は死んだのだから、紅鷹が日本に残るのは必然的に選択権から除外される。

「……………ああ」

短い分、しっかりとそれらを理解したうえの返事とわかった巫女は紅鷹に笑いかけ、背丈の高い紅鷹の頭に届くよう背伸びして、頭を撫でた。

紅鷹は、巫女の善意を受け入れた。

紅鷹と巫女の二人は、セイン（偽）を捜すのを止め、魔法で二年後に飛ぶことにした。

本来なら、紅鷹はセイン（偽）を捜して仲間に取り入れたかったのだが、生憎、日本にセイン（偽）はいなかった。

それと、日本と異世界とを繋ぐ『ゲート』はすでに閉じてしまっていた。

日本から『ゲート』を開くことは出来ない。

巫女の話では、『ゲート』は異世界から何者かによって強襲され開かれたと言う。

だが、今現在向こう《異世界》から『ゲート』を開いてくれるものはいない。

「これでは矛盾が生じてしまう……」

必死になって紅鷹は思考を続ける。

どうすれば良いかを頭の中でプログラムを組み立てようとするが、……崩れる。

諦めそうになった刹那、巫女が口を開く。

「二年……、私が待ちます」

「何を言っているんだ？」

「私がこちらに残って二年待つ、と言っているのです」

「俺には、アンタのしたいことと意味が理解出来ない」

「では、これから・紅鷹に作戦をお伝えします」

第三十五話 二年後（前書き）

更新速度がおちていく。

可憐に少しだけ、良い思い出を…

第三十五話 二年後

日本の、今ではそう、多くない道場という建物を所有している土地の所有者。

その人物の家に巫女は二年という月日を過ごしていた。

まあ、住んでいたのは紅鷹の家で、可憐とともに過ごしてきたのだ。

二年という月日はイヤでも他人と仲良くなる期間には十分な時間だ。

最初こそ、可憐に兄、紅鷹のことを聞かれ、どう答えるべきか困惑していた。

確かに、紅鷹に巫女は言われた。

『俺が、言ったと可憐にはなせば多分、すぐ了承してくれる』とは言ったが、巫女にとっては予想外な出来事があった。

当然、2013年の9月23日のあの日、東京で、不可思議な謎の生命体の出現と、東京タワーの火災事件。それに、一人の死。

上記の事件に警察は大きく動いた。

まず一つ。東京に突如出現した謎の生命体。

そいつらの目撃者は多く、テレビにも映り、信憑性がある。

ただ、そいつ等をすべて虐殺したのが一人の青年によるものだと調査の結果に解った。

それと同時に、その謎の生命体たちを虐殺した青年は唯一の死者だった。

それだけなら、まだ迷宮とまでは行かないが、その青年がみんなを守り、一人でに死んでいったといえる。

しかし、同時刻に、東京タワー内部に進入者が出ていた。

その進入者は、現代に出回っている服装とは違い、一昔前、中世時代の旅人のような小汚い服にマントといった現代人らしからぬ格好だった。

その犯人を突き止めようとし、監視カメラを確認したら、そこに移っていたのは、同時刻に東京で発生した謎の生命体を倒した青年と瓜二つだった。

当時は、その問題に必死で真実を突き止めようと、青年の唯一の肉親の妹さんに警官は訪ねたそうだ。

警官は、あの日の事件について真相を知りたいが為に、青年の肉親の心境を考えずに質問した。

「あの日の事件については良く覚えていますか？」

質問をされた、彼女。可憐は酷く悲しげな表情を見せながらも答

えた。

「……………はい」

「では、あなたの兄弟は、紅鷹さんのおひとりだったのですか？」

「なにを？ ……一人に決まってるじゃないですか！ 兄はたった一人の肉親でした」

可憐は、紅鷹を失った事件についてまだ立ち直ってはいなかったが、警察は追求する。

「それはおかしいですね。あの日、あのときには、紅鷹さんは二人同時に存在しているんですよ。東京に現れた謎の生命体と戦った紅鷹さんと、東京タワーに無断で進入した紅鷹さんの二人が」

警察は、なにか可憐が隠しているのかを疑ったが、可憐は「そんなことはありません！ 兄以外の兄弟なんているはずない」

そうして追い返された警察は、彼らの戸籍をあらったが、戸籍では紅鷹と可憐の二人しか存在していなかった。

過去に、養子にだした記録もない。

もしや、ずっと隠していたんものでは？ 疑問が浮かぶが、この時代、戸籍なしで隠しとうして生活なんてできっこない。

そして、とくにこれといった証拠が無いために真相は解らず、事件は迷宮入りになった。

どうして、東京のと真ん中に謎の生命体が出現したのか。

なぜ、獄閻寺紅鷹は同時刻に二人存在していたのか。

東京タワーの放火の理由は。

ただ一つ解ったのは、もし、獄閻寺紅鷹が、東京タワーに放火をしなかったら、東京タワーにいた人たちすべてが死んでいたのではないかと言うことだ。

東京に現れた謎の生命体は東京タワーを破壊したが、もしかして獄閻寺紅鷹はあらかじめ東京タワーが破壊されることを知っているのでは？

そのために放火をして、人を避難させたのでは？

そういった意見や、ほかには常識を逸脱した意見もあった。

獄閻寺紅鷹が未来から来たのではないか？

そんな意見だった。

しかし、誰がどう考えたってその意見はあり得ない。

そう、思わせた。

世間はそんな話題を二年たってもテレビで放映していた。

そんな、放送を紅鷹の家で二人はみていた。

「レイナさん。お茶、入れましたよ」

ソファーに座り、テレビNEWSをみていた巫女に可憐が声をかける。

「はい」

それを巫女は、友達、いや、家族のように返事をした。

巫女はお茶が入れられている食事をする席まで歩き木で作られた椅子に座りお茶を啜る。

「もう、二年か……。時間が過ぎるのも早い……。ね」

「そうですね。レイナさんが家に来てから二年がたちますね」

「今、何日だっけ？」

急に真剣な表情になった巫女に少したじろぎながらも答える。

「……えーと、23日ですね。9月の23日。ちょうどあの日から二年ですね」

可憐は兄の死を乗り越え、今では笑い話とは行かないが、普通に話題に出せるようになり、感慨深くあの日のことを思い出していた。

そんな思考をさせないかのように巫女は言葉を放った。

「じゃあ、私……。これで失礼するわね」

「え？……どこかに出かけるの？」

可憐は、こう言いたかったのだろう。

また、帰ってくるの？ と。

可憐は心の中で思った。

また、帰ってくるわ。そんな返答を返してくれると望んだ。

しかし、帰ってきたのは――。

「いえ、もう会うことはないわ」

――望みとは違った。

「どうということ？」

可憐はできるだけ冷静に質問を投げかけた。

ただ、解っているんだ。たとえば、巫女が可憐の心の支えになってくれたとはいえ、いつかはそんな依存はやめなければいけないことを。

「言葉の通り。もう、会うことはない

」……そう。じゃせめてどこか外に食事に行かない？」

可憐は、すこしでも巫女をつなぎ止めておこうと誘うが、巫女は首を横に振る。

可憐は、泣き出した。

紅鷹が死んだときも泣いた。

だが、巫女という心の支えと共に友情という絆を手に入れた。

しかし、今度はその悲しみを埋める何かはない。

そんな、可憐の様子や考えを察したのか、巫女は本当は言っではいけないのだけれどはなした。

「私ね、迎えが来るのよ。大事な彼のね。勘違いしないでほしいけれど彼氏じゃないわよ。お迎えなだけ。ただ、そのお迎えに来てる人は貴方の大好きな人よ」

泣きながらも巫女の話聞いていた可憐は顔を少しだけ上げて、聞いた。

「……私の大好きな人？」

「そうよ。私にはやることがまだ残っているの。ただ、友達の貴方にプレゼントがあるのだけれどいる？」

可憐は、疑問を浮かべ不思議がりながらも頷いた。

「じゃあ、急ぎましょう」

そういつて、巫女の向かった先はあの日、二年前の謎の生命体が発生した中心だった。

その場所には依然と変わらない。

ちゃんと、修復作業がされており、特に何もない。

だが、巫女は、何もない虚空をずっと見つめている。

そこに何もなければずなのに、普通の視点よりも少し高い虚空を見つめている。

可憐が、巫女に話しかけようとするが、それを遮るように巫女が言う。

「来たわ……迎えが」

そう、巫女が言ったが何か車やバイク、誰かが来るといった光景は見られなかった。

「本当に来たの？何も来ないじゃない」

可憐の視界では、何も変化は無い

しかし、巫女の視界では、しっかりと日本と異世界を繋ぐ『ゲート』が開くのが見えている。

巫女は可憐が『ゲート』が見えていないのに気づき、「ちよとごめんね」と言い、可憐の両目に魔力を少量送りこんだ。

魔力を送りこまれた可憐は、すぐに目を開いて、巫女に、何をしたの？と言いたかったが、目の前に存在する『ゲート』に呆然

となった。

「……なに……これ？」

声を搾り出せるのが精一杯かのような呟きだった。

可憐の呟きに巫女は答えないまま、『ゲート』を見る。

少しずつ開いていく先には、懐かしの故郷の景色と、ゾッとするほどの魔物の数。

恐らく、億を超える数なのだろうと推測というよりかは、真実に近い。

そして、待っていた彼が現れる。

「悪い。二年も待たせて」

こちらに近づいて来た人物は、紅鷹だった。

現れた人物、紅鷹に対して可憐が、言葉を搾りだす。

「……………兄…さん？ どうして？」

言うならば、死んだ人間が目の前で現れ、普通に会話をしている光景に啞然と言うべきだろうか。

ただ、そんな様子に理解出来なくてもない。

だが、それは、全てを知っている巫女だけのものであって、な

にも知らない可憐には一切分からないけ事象だ。

第三十六話二年後2（前書き）

やっぱり戦闘は上手く書けない。

第三十六話二年後2

可憐に気づかぬまま、巫女に近づいていく紅鷹に向かって、可憐が、とぼ、とぼ、と足を前進させ、現れた人物を捕まえようとするかのように腕を伸ばす。

相変わらず可憐に気づかない紅鷹は巫女に話かけようと近づいたら横から、誰かに袖を捕まれた。

「え？ ……………」

ただ、単に、その人物が気になってみたら、その人物が可憐だった紅鷹の反応を誰が予測出来るだろうか？

まさに、これぞ妹愛というべきだろうか？

紅鷹は、黙って可憐を抱きしめた。

十秒以上も抱きしめられた可憐は、現状を理解したとたん、顔を急速に赤らめ恥じらいながら呟く。

「あ…あの……離してくれないかなお兄ちゃん？」

もはや、可憐には目の前の人物が偽物には見えなかった。

たとえ、警察が言っていた紅鷹が死んだとして、遺体を見せられ、それが本物であって、もう、この世に存在しないと理解しても、

目の前の紅鷹のことを、何かのまがい物には決して見えなかった。感じる温もりは、なにも違わない。

まるで、永遠にそうして二人の世界を作っていたのを止めようとしたが、それを紅鷹が止めた。

「あら？ …… どうしてかしら」

同時に二人存在する紅鷹に多少驚きながらも、すぐに平然として言う。

「ああ、時間を賭けすぎた。あの二人はほっといてくれ」

そう、紅鷹が言いながら人物と可憐を見る。

「流石に時間をかけすぎた……」

紅鷹は巫女と共に「ゲート」へと歩きながら、頭をかいて言う。

巫女は口を開こうとするが、やめる。

現に、こうしてやるべきことをやろうとするために戻って来たのだから許そうと巫女は思った。

「でも…… 時間を簡単に越えて戻ってくるなんて卑怯ね」

「すみません……」

巫女の皮肉めいた言葉にすぐに紅鷹が答えた。

そして、「ゲート」へと入る。

その場所は、紛れも無く巫女の故郷なのだが。

「うつ！……………」

思わず、紅鷹が連れてきた魔物達に対して怯む。

当たり前だ。

巫女は魔物達の侵略を、防ぎきれなかったから過去に飛んだんだ。

たとえ、魔物達が襲って来なかったとしても、恐怖に囚われそうになる。

「大丈夫だ」

しかし、紅鷹の言葉で、ふと、恐怖に蝕もうとする心の闇を払ってくれた気がした。

「ありがとう」

「何か言ったか？」

「いえ、なにも」

巫女は、心の中でだけ言うつもりだったが、声に出していたようだ

が、紅鷹が聞いてなかった事を良いことに無かったことにした。

それでも良い。

感謝の気持ちはちゃんとあるから。

そんな良いふいんきだったが、急にキョロキョロして辺りを見渡す。

そして紅鷹に質問する。

「セインは、いないの？」

「っ？ ……………」

巫女の言葉に何も言い返せない紅鷹を見て、巫女は追求するのを止めた。

そして

立ち止まっている時間は無いので、紅鷹は、自身が未来から連れてきた魔物達に指揮をとる。

魔物達を二つの軍隊に分け、一つは、サザーランドに。

もう一つは、エルフォードに。

「くれぐれも致命傷は与えるな？ もし致命傷を負わせた場合真っ先にそいつを殺す。理解したか？」

魔物達は紅鷹の殺す、という言葉に怯え、理解したか？ の言葉を肯定するかのように首を縦に振った。

魔物達は、それぞれの行き場へと走り去っていく。

それについて行こうと紅鷹もサザerland国へと向かおうとするが、最高のタイミングで奴が現れた。

「何やら、面白そうな事してんな」

声質はいたってクールさをイメージさせるが、見た目はちゃらけている筋肉質な姿だった。

そいつを見た途端、紅鷹は人生で一番の難所を迎えたと言えるだろう。

「巫女???? お前は先にエルフォードに行け??」

紅鷹の慌てぶりに、巫女は動揺するが、紅鷹は急かす。

巫女は、あまりの剣幕に気圧され身体強化を使って駆け出す。

現れた人物は、巫女に見向きもせず、紅鷹を見据える。

「なあ、何か答えるよ」

「くそ。なんでお前がこのタイミングで出て来る？」

「楽しそうだから？」

そうだ。

こいつは前からそうだ。楽しそうな事を見つけると、邪魔をするか、協力するかどちらかをして、自分が楽しむ。

楽しめればなんだっていいんだ。

今、戦うしかない。

セイン（偽）は、もう戦う事しか頭に無い。

「くそおおー!!」

掛け声を上げて、大きく振りかぶりながら右ストレートをするが、軽く交わされて、背後から攻撃される。

「っ?.....」

セイン（偽）の攻撃をしゃがみ、右に回り込む。

すぐに、顔を上げて前を見るが、いない。

「上か?」

そう思い、上を見るが、いない。

（後ろか?）

すぐに横に回避しようとするが間に合わずに蹴りを貰う。

すぐに、顔を上げて前を見るが、いない。

「上か?」

そう思い、上を見るが、いない。

（後ろか？）

すぐに横に回避しようとするが間に合わずに蹴りを貰う。

第三十七話 二年後3 諦めたタイムトラベラー（前書き）

文化祭……。

すいません。

皆が楽しいはずの行事のせいで、こちらが疎かになってしまった事を謝らせていただきます。

まことに申し訳ありません。

第三十七話 二年後3 諦めたタイムトラベラー

「っ……………!!」

蹴りを首に入れられ、顔面から地面に叩き付けられながら地面を滑る。

「早く起きろよ」

「言われなくつても立ち上がるさ!」

瞬間的に足に力を入れて踏み込み、セイン（偽）の正面から突きを繰り出す。

「無駄だ……………」

軽くいなされ、反撃に右からパンチを貰うが、左フックを当てる。

軽く怯んだが足払いで足を掬われ右肩から地面に落ち、不快な骨の折れる音がした。

「くそっ!」

異世界にきてから、魔法という便利なものに頼って来たせいで、気を常時使つのを忘れている。

だから、肉弾戦では遅れをとる。

なら、一時、切り替えれば良い。「昔の……、魔法が使えない時の感覚を思い出せ」

「何ぶつぶつ言ってたんだ……」

セイン（偽）に指摘され、集中している紅鷹に殴り掛かるが、避ける。

「なっ……？」

目をつぶったまま、避けた事に驚いたのか、一瞬スキができた。

「後ろがお留守ですよ」

後ろから足払いをして空中に浮いたセイン（偽）を大きく上に蹴り上げる。

そして、セイン（偽）よりも僅か上にまでジャンプして地面に叩き落とす。

セイン（偽）の体が地面と接したと同時に轟音になる。

「……………」

紅鷹も地面に着き、様子を見る。

まだ、セイン（偽）がこのまま立ち上がって来ないはずが無い。

砂煙りが立ち込める中、見ていたら、僅かな赤い光が見えた。

「まさか？」

紅鷹は即座にその赤い光に反応し、右目を閉じて、左目に魔力を籠める。

砂煙りの中から現れた赤い光が自身の体に届く前に、左目の赤い紋様が浮き上がり、打ち消す。

「……!？」

セイン（偽）は、驚愕した顔をした。

一瞬、紅鷹はどうしてそんな顔をするのか分からなかったが、すぐに理解する。

「そういえば、お前は見たこと無かったな」

「なんだそれは？」

「見た通りだ。魔法を消し去った」

「くっ!!」

紅鷹の能力を確かめるためか、魔法を連発する。

「無駄だって」

正面から来た魔法は全て目によって消えた。

ホッと一息ついたとき、セイン（偽）がニヤリと笑った気がした。

刹那、背後から衝撃があった。

紅鷹は何の抵抗もしていないので、衝撃を緩和せづに食らって

しまう。

「やっぱな……その能力の有効範囲は視界に写る所だけってことか？」

「……………」

「もしかして、そんなの気づいて無かった？ 馬鹿だな」

語尾に盛大な笑いをつけて言われた紅鷹は打開策が浮かばなかった。

近接戦闘は押され気味で、魔法の戦いも平行線。

おまけに自分の知らぬ弱点まで言い当てられた。

「諦めるのか…？」

自問自答する。

確かに、一度は諦めた。

同じ時間の枠組みの中で、何度も、何度も、エリスの死を回避するために色んな行動を起こした。

だけど、どんなに仮定を変えたって、エリスの死は変わることは無かった。

「諦めるのか…？」

もう一度、自問自答する。

まだ、戦闘方法ならあるじゃないか。

戦う力を持ってるじゃないか。

「こんなところで、俺は……、俺はああ！ 立ち止まっていられねえええ？」

立ち止まっちゃいけないんだ。

紅鷹は、叫びながらセイン（偽）に殴り掛かる。

それを軽くないなされるが、それを想定していて紅鷹はつこんだ。

格闘はあくまで困だ。

すでに、紅鷹の目は左目は閉じられ右目に魔力を籠た状態。

紅鷹は、さっきのセイン（偽）の背後からの魔法をコピーした。

だから、全く同じ現象がセイン（偽）にも起きた。

当たり前だ。

紅鷹の能力がもう一つ有るなんて知らないんだから。

「何っ！！？」

「潰せ」

前屈みに倒れるセイン（偽）の真上から重力の固まりを球場の形態で落とす。

「グウアアア！！」

獣のような呻き声が聞こえ、そのまま押し潰されてしまえば良かったのだが、そう、上手く行くわけも無く、バリンっとガラスが割れるような音と一緒に重力の固まりは砕けた。

「一体何処のイマジンプレイカーだ？」

結構真剣に思った。

右手を翳すだけで魔法を打ち消すなんて、自分も似たような能力を持つてはいるが限定条件がある。

だが、セイン（偽）にはそれが無い。

地面に出来たクレーターを見てみると、まるで、怒りに身を委ねたかねように目を真っ赤に充血させ、唸っている。

「……………」

紅鷹は、セイン（偽）がどう来るか見極める積もりだったが、いつの間にか視界に写るセイン（偽）は消え、ただ、後ろから感じる殺気を受ける事しかできなかった。

刹那、背後からとんでもない衝撃で一瞬、意識が飛んだ。

視界は強制的に白くなり、何も見えない。

聞こえない。

だが、痛感だけは残っており、背中の痛みと、右頬に今現在当たっ

ている足が、ふりぬかれ、大きく後ろに吹っ飛ぶ。

紅鷹が滑った地面は、砂煙りがたちこめているが、見えないほどではない。

地面に倒れながら、顔を少し起こしてセイン（偽）を捜す。

だが、先程までいた場所には当然いなかった。

「グウ、アアアアアアアアアアアア！」

セイン（偽）は、紅鷹の腹の上に立っていた。

叫び声を上げたのは、紛れもなく、セイン（偽）が紅鷹の腹部に攻撃を仕掛けたからである。

お腹に全くと言っていいほど力を入れていなかった紅鷹は、セイ
ン（偽）の攻撃をもろに食らった。

腹筋に力が入っていなければ鍛えた腹筋は意味を成さず、弱点と
も言える。

「つまんねえ。終わりか？」

セイン（偽）が不満そうに紅鷹に言う。

（終わるのか？）

紅鷹は、声も出せず、心の中でしか言う事が出来ない。

身体中に疲労が回り、魔法も何発も打ち、精神力を擦り減らした。

頑張っても勝てそうに無い。

（自分で、巫女に、終わらせない、とかカッコイイ事言っというて、

自分が戦う事、勝つことを諦めて終わろうとする)

「けっ……………」

セイン(偽)は、折角現れた人物の期待はずれに幻滅する。

(折角、俺と互角に戦える奴がいる、と思ったらこれか…)

「……………」

紅鷹は、もう、気力さえも、無い。

身体を動かす事も、戦う意思も、あんなに必死になって助けるすべを捜し続けていたのに、純粋な力によって道を閉ざされる。

(終わる……………)

「っ……………」

泣くしか無かった。

ただ、抗えぬ未来に悔しい涙を流す事しかできなかった。

「泣いてんのか？ あほらし。弱いからそんな事になるんだ」

弱いから。

紅鷹の心に突き刺さる言葉。

物凄く重かった。

日本にいたから、異世界に来て、能力を手に入れ、チートとか、

自分が最強にでもなつて浮かれていて、それで、エリスは殺された。
あんなに、爺に、言われていたのに。

『油断はするな。敵を倒して終わつたと思つた瞬間が一番のすきな
のだからな、覚えておきなさい』

そんな言葉忘れ、魔王を倒した時に、警戒心をゼロにして、敵の、
セインの攻撃に気がつかなかった。

思えば、そうだった。

心の浅い所では、仲間には迷惑かけないよう、守れるように努力しよう、とか考えていながら、奥底で、魔法や、目の能力さえあれば大丈夫なんて思つてた。

全部、自分が弱かつたからいけないんだ。

「死ねよ……」

（ああ、ごめん。ごめんなさい。俺の個人的な事に巻き込んで、ごめん巫女）

最後の瞬間に出て来たのは、こんな事に巻き込んだ巫女に対する謝罪だった。

それと、諦めだった。

（終わる……）

紅鷹には、セイン（偽）の魔法が近づいて来るのが見えた。

それは、多分左目を使えば消し去る事が出来るものかもしれない。

だが、同時に、数百も出現する魔法を消し去る事、退ける事は出来ないと思う自分がいた。

能力には穴が多数あった。

いや、もう、どうでもいい。

紅鷹は、思考を止めた。

目を開ける事を止めた。

抗う事を止めた。

（終わる……これで、本当に……）

紅鷹は、全てを諦めた。

「なっ………！！？」

だが、諦めた紅鷹は視界を聴覚を使う事を断念しているために、セイン（偽）が何に、啞然、愕然としているのかは分からない。

だが、セイン（偽）の言葉がこんな状況を打破してくれる存在がいることを証明してくれる。

「な、な、なんで、なんで、二人いるんだっ！？」

地面に横たわっている紅鷹の後ろから声がする。

「俺は、……とつくの昔に埋なんて越えているんだぞ?。」

第三十七話 二年後³ 諦めたタイムトラベラー（後書き）

余談、かき氷は、ある程度場所がわるくても完売する。

かき氷の強さを初めてしりました。

当然のように黒字になりましたので、被災地のほうに義援金として送るそうです。

こんな話、求められてませんよね。すいません。

第三十八話 二年後4（前書き）

だめだ。

遅れてすいません。

なんか、本当に駄文だ。

もっと本を読もう。

第三十八話 二年後 4

「意味わかんね。 ああ、意味わかんね。 ああ、そうだ。 あれだ、幻影の魔法使って、実は今倒れているこいつは偽物で、お前が本体なんだろ？」

セイン（偽）は、現状を自分の都合の良いように言い当てた。

地面に倒れている紅鷹の事を偽物と判断し、それは、セイン（偽）を油断させるための物だと思わされた。

「勝手に事実を捏造して解釈するのは良いが、別にその地面に横たわっている奴は幻影でも、偽物でも無いぞ」

やはり答えたのは地面に横たわっている紅鷹の後ろから聞こえる。

「それにしても、姿がばれないようにフード付きのマントを付けてたのにバレるなんて、まさか、魔力で感知したのか？」

紅鷹の後ろにいる、フードを被った不自然なそいつは、セイン（偽）に問。

「いや、確かに、魔力は全く同じだ……、いや、ありえねえ。 同じ人間が同時に二人存在するはずは無い」

あくまで、現実を否定するセイン（偽）にフードを被った奴は答える。

「」「これがびっくり、可能なんだな」

「そついう未来が俺の時から決まってるんだよ」

「ハッ…！ 意味分かんねえ！ ……いや、もうどうでも良い」

セイン（偽）は、考える事を止め、いつも通りにすることにした。

「殺れればどうでも良い」

セイン（偽）は、地面に横たわっている紅鷹の真上を踏み込みで飛んでフード付きマントを羽織っている奴に急接近した。

それを見たフード付きマントを羽織った奴は、自然と半身になり、マントの中で、左手を左腰あたりに。

右手は左腰よりやや前に。

「死ねえええええ！」

セイン（偽）が、右腕を貫手の形でフード付きマントを羽織った奴の心部に向かってしなやかにかつ、素早く貫く。

それを、フード付きマントを羽織った奴は、右腕を斜め右上に一閃。

「っん！？」

セイン（偽）の声と、何硬い物どうしがぶつかる甲高い音がした。

「ちっ。さすがに自己防衛は発動するのか…」

セイン（偽）に対して憎らしい言い方で呟いた。

フード付きマントを羽織った奴のふりぬいた刀は、魔法を壊す力は元来、有るはずも無い。

セイン（偽）の身体は、自然と物理的攻撃を防ぐ魔法が自動的に発動したが、それが意味するのは、本来の防御力が、フード付きマントを羽織った男の攻撃力より劣っているということ。

だが、それは、決して、直接的なダメージにはならない。

「まあ、そんな事予想の範囲内だから、付加魔法位学んでるさ」
言葉通り、よくある一般的な炎を纏ったりはしないが、その変わり、毒。

人間の身体で言う、神経性の毒で徐々に内側から崩壊するように、魔法の、セイン（偽）の自己防衛魔法を、内側から毒を繁殖させる。

後は、時間の問題になる。

そんな事が施されている刀だとは知らないセイン（偽）は、自身の身体を完璧に切り落とせなかった刀と、フード付きマントを羽織った男にまた、優越感が戻った。

「はっ、そのナマクラじゃあ、俺は斬れないぜ」

分かっている。

フード付きマントを羽織った男は理解していた。

今の場合は、刀の問題では無く、どんなに良い刀でも完全に腕を

切り落とす切れ味を持つ刀は存在しないと思われる。

だから、毒にしたんだ。

「今のうちに笑ってる。すぐに自分のその慢心が仇になる」

「ああ？ ハツタリなら止せよ。んなもん、きかねえって」

「じゃあ、試してみようか」

フード付きマントを羽織った男が、踏み込み、未だ地面に横たわる紅鷹の真横を摺り抜け、先程と同じ腕を斬り付ける。

またもや、甲高い音が響くが、セイン（偽）の腕が斬れる気配は無い。

そして、もう一度、振りかざした刀をセイン（偽）が、左手で白刀取りで刀を捉えられてしまったため、動かせない。

「これで、お前は――」

セイン（偽）が無駄だとしても言おうとしたのかは分からないが、言葉を言い切らせないようにフードの男が左足で、回し蹴りの用途で、身体を振りながら、セイン（偽）の腹部に入れたのが、そのまま吸い込まれるように入って吹き飛んだ。

その吹き飛んだセイン（偽）に追い撃ちをする様子は、紅鷹がやっていたのと変わりが無かった。

いや、変わるはずがない。

紅鷹は、暗闇の中で意識を持続させていた。

当然、時間の感覚はある。

だから、どうして早く痛み、『死』が襲ってこないのか不思議だった。

目を閉じる前は、もう、セイン（偽）の魔法で視界の半分以上がうめつくされていた。

が、いまだに何も来ない。

目を空けて見れば分かる。

ちよつとだけ、もう一度、死ぬ前に景色を見ておくのも悪くないだろう。

そして、紅鷹が目を開けた瞬間、紅鷹のすぐそばで、セイン（偽）が地面を高速で吹っ飛んでいた。

「……………」

紅鷹には、どうしてセイン（偽）が吹き飛んだのか理解できなかった。

ここには、紅鷹とセイン（偽）しかいない。

が、何者かの第三者がいないとセイン（偽）が吹き飛ばなんてありえない。

それに、ただ者でない奴に等しい事にもなる。

紅鷹は、セイン（偽）が吹き飛んだ方向とは逆に位置する方を見た。すると、フード付きマントを羽織った男がいた。

（誰だ？ あいつは？）

疑問に思う。

紅鷹が、フードを羽織った男の方を見ているのに気づいた、フー
ドを羽織った男は、紅鷹に近づいてきた。

「……………誰だ？」

発した声は、絶望、悔しさ、無力感、諦め、など、負の要素だけを
集めたような声。

そんな声を発する紅鷹にフードを羽織った男は、妙な、この場には
不自然な笑みと言葉を漏らした。

「いつまで、地面に横たわっているつもりだ？」

紅鷹は、答える事さえ面倒だったが、しねば、言葉を発する事が出
来なくなると考え、今のうちに後悔を減らして行こうという為だった。

「あんたには関係ない」

「関係ない…か。関係については有るところか、大有りなんだけどな……どうしてお前は諦めたんだ？」

「そのまんまさ。抗う事を止めた。それだけだ」

「何故？ 抗う事を止めたんだ？ 可能性は十分にあるはずだ」

「そうかもしれない。いや、あるはずないんだ。所詮、可能性なんて理想や願いから来る妄想だ」

「本体にそう、思うか？」

「……」

紅鷹が、フードの男の問いに答えようとした瞬間、後方から、セイイン（偽）が吹き飛ばされた方から殺気が物凄い圧力とともに、現れた。

「可能性なんて、すぐに壊されるんだ。みるよ、奴《セイイン（偽）》がキレて、破壊すれば終りさ。俺もアンタも」

「あああああああ！！」

セイイン（偽）が、奇声を上げながら高速で、フードの男に近付き、攻撃する。

それを、フードの男は左手で、セイイン（偽）の拳を受け止め、再度、紅鷹に問う。

「本当にそう思うか？」

「どうせ、魔法を使われたら…無理だ」

紅鷹の言葉とともに、セイン（偽）は僅か数秒足らずで、魔法を数百以上作り上げた。

紅鷹は、それを見て今度こそ可能性は消えたと思った。

フード付きマントを羽織った男は、セイン（偽）の魔法で『死』ぬ。防ぎようの無い事実。

紅鷹は、そんな未来を迎えるフードの男の顔を見ることにした。

『死』が迫る今、一体どんな顔をしているのか気になる。

俺のように、全てを諦めた顔に成るのではないかと。

だが、ふとフードの中の顔を見ると、フードの男の顔は一切、負の要素が感じられなかった。

有ったのは、笑み。

それと、右目を閉じる行為だった

その行為を、紅鷹が知らないはずがなかった。

紅鷹が、こちらの世界に来て、手に入れた能力の一つ。

だが、そんなのは有り得ない。

一瞬、頭に過ぎった事を直ぐさま頭の中から出そうとしたが、未だ、フードの中を覗く紅鷹の見た事象がそれを否定する。

フードの男の目は、右目を閉じた後、左目だけに魔力が集中し、朱色の紋様が瞳の中に現れる。

「そんな……まさか……どうして？ 何で？」

紅鷹の言葉を掻き消す程の魔法の飛び交う音、それとフードの男にぶつかり発生する爆発音。

だが、それらは全てフードの男に直接は届かない。

それなら、紅鷹にだって出来る。

いや、紅鷹にしか出来るはずが無い。

紅鷹は、啞然としながら、身体を起こしていた。

それに、セイン（偽）の魔法がフードの男の真後ろを狙うのを紅鷹は気付いた。

危険を知らせようと叫ぼうとするが、間に合わず、フードの男の背後から爆発音と煙りが発生する。

「あの日の俺は、抗う事を止めた」

不意に、煙りが立ち込めるなかでフードの男の声が聞こえた。風によって煙りが晴れ、フードの男の姿が見える。

フードの男の、顔を隠すためのそれは、爆風によって取り払われ顔があらわになっていた。

その顔を見た紅鷹は、妙な気持ちを抱いた。

それは、自分自身が否定した可能性が自分自身だったことなのかは、分からないが。

ただ、言える事があった。

紅鷹が見たフードの男の顔は、小さい頃から自宅の鏡で見ていた自分自身の顔そのままだった。

それが意味するのは言わなくても分かる。

「俺って奴は本当、理なんか越えてるな」

フードの男。

それは、この日に、抗う事を止めた紅鷹の未来の紅鷹。

（自分が言った言葉を、自分に帰されるつても、変な気分だ）

「お前だって、いずれ……俺のこの場所に立たなくてはいけない」

「逆に、俺がそこに立たなければ、タイムパラドックス。未来は確定している……。だけど」

「努力するのは、お前自身だ」

エピソード。これも一つの終わり方。？　ちなみに、もう一つはこの紅鷹が15

別の小説を二作品思い付いていたのでそちらに力が…

ちなみに一つは、過去改変物です。

異世界トリップよりかは酷い事にはなることは無いし、主人公もやや内気に、現実を否定したがりな感じです。

すでに、終わりまでしつかりと決めており、更新が停滞することはないと思われます。

もう一つは、まだ話が固まってなく、まだまだ工夫中です。

エピソード。これも一つの終わり方。？　ちなみに、もう一つはこの紅鷹が15

「んな事は、アンタ《俺》を見れば分かるさ……」

紅鷹は、目の前にいる自分《未来》に答えを出した。

となると、残る弊害は一人。

「セイン（偽）を倒すぞ。二人でなら倒せる」

そう、未来の紅鷹は過去の自分に言った。

そして、二人でセイン（偽）を倒そうとしたが、結果は殆ど未来の紅鷹に良いところを持って行かれたと言っべきだろう。

現時点での紅鷹は、陽動位にしかない。

言い方を変えれば、陽動も立派な者だが、そこは譲れない気持ちだろう。

実際、未来の紅鷹は程度の差はあれど現時点での紅鷹と差ほど変わりはない。

だから、未来の紅鷹も現時点での紅鷹と似たような気持ちを抱いていたことになる。

つまり、結果的にはそれは、数年の時間で解決するものであって悩む必要はない。

紅鷹は、自身の手で勝ち取った異世界で生涯を閉じる計画を立てていた。

この世界では、紅鷹は二人存在しない。

日本にいる紅鷹は、この世界の紅鷹は死んでいる。

ここにいるのは世界から外れた、どんな所からも外れてしまった紅鷹しかない。

彼は、独りぼっちになったのだ。

世界を変える前、あの永遠に近い時間のくりかえしの中でも確かに感じた思い。

信頼、絆、それら全てが、この世界では無かったことなのだ。

だから、今の彼には、この世界での人とのつながりは無い。

それは、悲しいことだ。

誰だって同じ気持ちになる。

あるはずだったものが無い。

空しさがある。

ただ、それでもいいと紅鷹は思っていた。

だが、やっぱり叶わぬ願いだとしても会いたい気持ちがたしかに心にはある。

エリスやリリス。

一週間という短い期間であったが、エルフォード国の人たち。薄暗い夜の街で出会ったおっさん。

おっさんとは、時間をこえたつながりがあった。

それと、セイン（偽）。

ここでは、セイン（偽）はそのままのはずが無い。

ちゃんとした魔王の手下をしていて、今はどこにいるかさえわからない。

会いたい人がいっぱいいる。

だけど、みんなは覚えてはいない。

それでもいい。

そう、紅鷹は思った。

そして、旅をする準備を始めた。

魔法は使わず、己のみ一つで。

2011

エルフォード国。

紅鷹が召喚された場所。

一週間、過ごした城。

二ヶ月ぶりに訪れた場所はなにも変わってはいなかった。

あの時初めて見た市場。

店、武具屋。

なにより、三人で歩いた道がやけに懐かしく思えて、目が潤んだ。

ただ、ちょっとだけでも良い。

彼女たちの姿を見たいと思った。

それを、きつと神様は了承してくれたのだと思う。

潤んだ目で、視界が完全に戻っていない紅鷹は誰かとぶつかった。

途端に誰かとぶつかったのすぐに謝った。

「ごめなさい！」

するとぶつかった人も慌てて謝って来た。

そして、彼女は良く知っている人間だった。

日光に反射したきれいな銀髪。何者にも取り込まれない銀色の瞳。

（リリス…）

「ふふふふ！」

思わず不気味な笑いが出てしまった紅鷹は思い出した。

この世界ではリリスと俺の間にはつながりは無い。

いかにも怪しい奴に移ってしまうので、笑うのをこらえた。

てつきり不審者でも見るような目で見られていると思ったのだが、彼女はキョトンとした目で見ていた。

世界を変えて紅鷹が降り立った時間は、2011年の6月29日。

おそらく世界を変える為に奮闘する俺が来るのは二年後。

だから、彼女は俺が始めて会った時と年は変わらないはずだが、さつきまではしゃいでいた様子だとしても同じ年、いや、もう精神年齢はとっくにおじいちゃんを超えているが、今の自分は大学一年の時の状態だ。

本当なら高校のときの状態でも良かったのだが、それはどうしても譲れない思いがあった。

二年間についたいろんな傷をなくしたくなかったからかもしれない。

だから、いや、うまくまとめられないけど、これだけは言いたかった。

「危ないから気をつけろよ」

「ええ、それともスカーレットの騎士に何を言われても私のことは内緒に」

言葉とともに彼女は右手の人差し指を唇に持っていた。

自然と会話は続いてなにもあの頃と変わらない雰囲気だったが、彼女は逃げていたのに気づいたのかすぐに一つの言葉を残して走り去って言った。

『またあいましょう』と。

ふふふと、頬が赤く染まる。

繰り返しの中、女と感じる暇は一切無かった為、欲はかなりたまっていたので思わず赤くなってしまった。

これでも健全な男だ。

世界は危機に陥る事はないから、くだらない感情を表に出すこと

が出来る。

この時代を選んだ意味は、特に無い。

ただ、こことは違う世界で出会ったのがこの時代、この時期だったから選んだだけだ。

彼女らの、成長を見たかったのもあながち間違っではないない。

成長を見守ると言うよりかは、幸せに暮らしているかを見たかっただけ。

自分と関わってしまったせいで、不幸な末路に導いてしまった事のせめてもの償い。

そして、彼女らを守る為、強く成らねばならない。

今の自分よりももっと。

「過去の自分を、世界を助ける為に……………なんて厨二病だ」
考えるだけでバカらしくなる。

エリスを救う事にしか意識が行かず、失敗。

日本を救う為に、日本に紛れ込んだ魔物達との戦争中に暁、美紀が死んで、世界が見えなくなって自殺。

未遂に終わり、巫女に時間を飛ぶ事の出来る魔法を教えて貰った。

実にバカらしい。

「時間は、有るようで無い」

今から考えれば、紅鷹とセイン（偽）が戦うのは、何年も先の話だが、いずれそうは言ってられなくなる。

忘れてはいけない言葉。

「常に時間は有限」

自分自身に刻む。

そして、忘れてた事が有ったが、四年後の15年には、巫女が、俺がやって来る。

少なくとも俺は過去。

今現在俺が歩む道を歩む事になる。

巫女は、そういえば、唯一の知り合い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0989r/>

異世界トリップとタイムスリップをする主人公って・・・

2011年10月12日18時51分発行